財団法人八尾市文化財調査研究会報告81

Ⅰ　山賀遺跡（第３次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第23次調査）
Ⅲ　老原遺跡（第６次調査）
Ⅳ　老原遺跡（第７次調査）
Ⅴ　老原遺跡（第８次調査）
Ⅵ　中田遺跡（第10次調査）
Ⅶ　矢作遺跡（第３次調査）
Ⅷ　矢作遺跡（第４次調査）

２００４年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

(財)八尾市文化財調査研究会報告81　正誤表

頁	行	誤	正
55	38	布留1期	布留Ⅰ期
127	21	遺包含層	遺物包含層
128	35	層厚0.5～	層厚0.05～
140	11	縄タタキ目	縄目タタキ
140	37	縄タタキ目	縄目タタキ
140	25	胎土いわゆる	胎土はいわゆる
143	23	10世紀台	10世紀代
153	第5図	柱穴	土坑
158	第13図	ＳＥ203	ＳＥ302
161	14	移化	変遷

財団法人八尾市文化財調査研究会報告81

Ⅰ　山賀遺跡（第3次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第23次調査）
Ⅲ　老原遺跡（第6次調査）
Ⅳ　老原遺跡（第7次調査）
Ⅴ　老原遺跡（第8次調査）
Ⅵ　中田遺跡（第10次調査）
Ⅶ　矢作遺跡（第3次調査）
Ⅷ　矢作遺跡（第4次調査）

２００４年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府の東部に位置し、東に大阪と奈良の境をなす生駒・信貴・高安連山を仰ぐ八尾市は、その山地西麓部から西部に広がる、河内平野を占地しており、その豊かな自然環境のもとで、先人達が残した貴重な文化財が数多く残っています。

平野部では、旧大和川水系の豊かな水量と肥沃な土壌を背景に、水稲耕作の初期段階の弥生時代前期から、活発な流域開発が各所で行われてきており、これにより、地域の核と成る拠点集落が形成されています。古墳時代においては、河内湖を介した他地域との交流が活発で、その範囲が国内に留まらず、朝鮮半島にまで及んだことが、出土遺物により明らかにされています。

一方、市域東部の山地西麓部においても、旧石器時代以降の遺跡・遺物が数多く残されています。なかでも、古墳時代後期に形成された「高安古墳群」は日本有数の群集墳に数えられるもので、この地域一帯で古墳文化が昇華した証を今に伝えています。

また、瀬戸内海・河内湖・大和川水系を介して、国内はもとより、大陸や朝鮮半島との交流の中継地としての役割を果してきたほか、難波と大和を結ぶ交通至便な土地柄から、奈良時代後期には、本市南部の弓削郷に「西の京」が設けられています。

このように、本市には、先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識しております。そこで私共では、こうした消滅の危険にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

このたび、平成４・６～９年度に実施しました８件の、発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ、報告書として刊行することに致しました。

本書が、地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に、心から厚く御礼申し上げます。

平成16年12月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩　﨑　健　二

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成４・６～９年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成16年10月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は以下の通りである。Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ原田昌則、Ⅴ西村公助、Ⅶ・Ⅷ岡田清一。全体の構成・編集は原田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の１/2500の地形図(昭和61年測量・平成６年修正・平成８年７月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成13年度版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、Ⅰが国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕の座標北、Ⅱ～Ⅷが磁北である。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。
   井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　小穴・柱穴－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ
   土器集積－ＳＷ　不明遺構－ＳＸ
1. 遺構図面の縮尺には、平面全図1/100・1/200・1/400、断面全図1/40・1/50がある。部分図面の縮尺には１/20・1/40がある。
1. 遺物図面の縮尺は、土器類1/4、石器類2/3、金属類1/1・1/2に統一した。断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・金属類は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤付着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　山賀遺跡第３次調査（ＹＭＧ94－３）……1
Ⅱ　跡部遺跡第23次調査（ＡＴ96－23）……29
Ⅲ　老原遺跡第６次調査（ＯＨ95－６）……61
Ⅳ　老原遺跡第７次調査（ＯＨ96－７）……77
Ⅴ　老原遺跡第８次調査（ＯＨ97－８）……93

Ⅵ　中田遺跡第10次調査（ＮＴ92－10）……105
Ⅶ　矢作遺跡第３次調査（ＹＨ95－３）……127
Ⅷ　矢作遺跡第４次調査（ＹＨ96－４）……147
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

―平成13年度版―

凡例

- 周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適用を受ける区域
- 史跡指定地であって、文化財保護法80条または府・市文化財保護条例の適用を受ける土地
- 古墳・周溝墓
- 既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

0 100 500 1000m

Ⅰ　山賀遺跡第３次調査（ＹＭＧ94－３）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山賀町４丁目34－１．35－１で実施した寮・研修施設建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する山賀遺跡第３次調査（ＹＭＧ94－３）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋396－３号　平成６年11月４日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がダイダン株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年１月９日～平成７年２月10日（実働25日）にかけて原田昌則が担当した。調査面積は約675㎡である。現地調査においては、大見康裕・垣内洋平・岸田靖子・西田真紀が参加した。

1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し平成16年９月30日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤静江・岩沢玲子・加藤邦枝・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・村田知子・吉川一栄・若林久美子、図面トレース－山内千恵子、図面レイアウト・遺物写真撮影－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行ったが、石器については二宮（旧姓金親）満夫（現宮崎県教育委員会）が行なった。

1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
第２章　調査概要 …… 2
　第１節 調査の方法と経過 …… 2
　第２節 基本層序 …… 3
　第３節 検出遺構と出土遺物 …… 4
　　１）検出遺構 …… 4
　　２）遺構に伴わない出土遺物 …… 21
第３章　まとめ …… 28

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 …… 1
第２図　調査地地区割り図 …… 2
第３図　ＳＫ－１、ＳＫ－２平断面図 …… 4
第４図　検出遺構平断面図 …… 5・6
第５図　ＳＫ－１出土遺物実測図 …… 7
第６図　ＳＫ－２出土遺物実測図 …… 7

第７図　ＳＫ－３～ＳＫ－６平断面図 …… 8
第８図　ＳＫ－５、ＳＫ－７出土遺物実測図 …… 9
第９図　ＳＫ－７平断面図 …… 9
第10図　ＳＫ－８、ＳＫ－９平断面図 …… 10
第11図　ＳＫ－８出土遺物実測図 …… 10
第12図　ＳＤ－１、ＳＤ－２断面図 …… 11
第13図　ＳＤ－１出土遺物実測図 …… 12
第14図　ＳＤ－２出土遺物実測図－１ …… 14
第15図　ＳＤ－２出土遺物実測図－２ …… 15
第16図　ＳＤ－２出土遺物実測図－３ …… 16
第17図　ＳＤ－２出土遺物実測図－４ …… 17
第18図　ＳＤ－２出土遺物実測図－５ …… 18
第19図　ＳＤ－２出土遺物実測図－６ …… 18
第20図　ＳＤ－３～ＳＤ－５断面図 …… 19
第21図　ＳＤ－３出土遺物実測図 …… 19
第22図　ＳＤ－５出土遺物実測図 …… 20
第23図　第15層出土遺物実測図－１ …… 22
第24図　第15層出土遺物実測図－２ …… 23
第25図　第15層出土遺物実測図－３ …… 25
第26図　第15層出土遺物実測図－４ …… 26

写　真　目　次

写真１　ＳＰ－１柱根検出状況 …… 20

図　版　目　次

図版一　調査区全景
　　調査区東部遺構検出状況
図版二　ＳＫ－１検出状況
　　同　上　断面
図版三　ＳＤ－２断面
　　ＳＤ－４断面
図版四　ＳＫ－１、ＳＫ－５、ＳＫ－７
　　ＳＫ－８出土遺物
図版五　ＳＤ－２出土遺物
図版六　ＳＤ－２出土遺物
図版七　ＳＤ－２出土遺物
図版八　ＳＤ－２出土遺物
図版九　ＳＤ－２出土遺物
図版一〇　ＳＤ－３、ＳＤ－５出土遺物
図版一一　第15層出土遺物
図版一二　第15層出土遺物
図版一三　第15層出土遺物
図版一四　第15層出土遺物

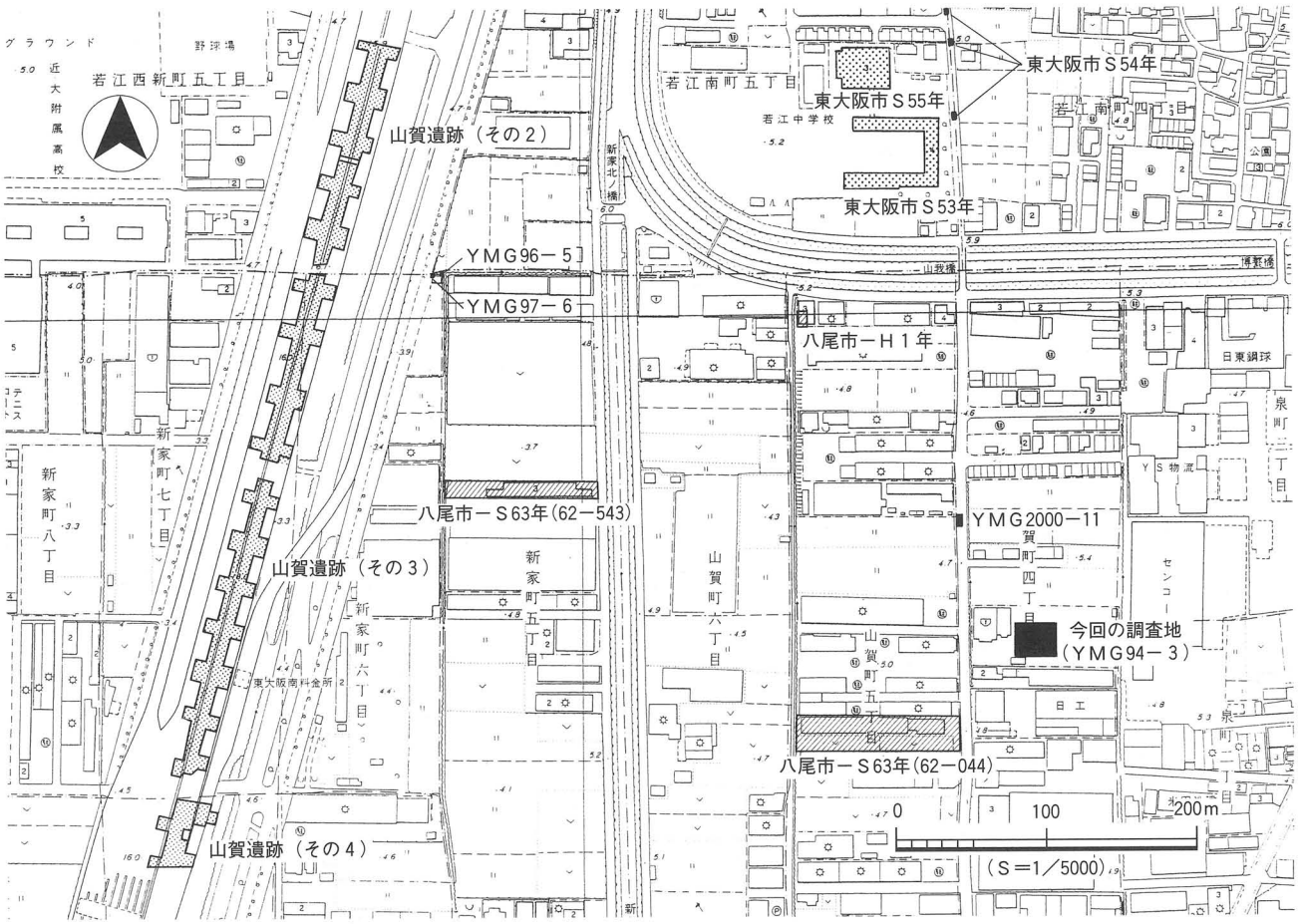
第１章　はじめに

山賀遺跡は、旧大和川の本流であった長瀬川・玉串川をはじめとする数多くの中小河川の沖積作用により形成された河内平野中央部の海抜４～５ｍに展開する複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市北西部の新家町１～８丁目・山賀町１～６丁目、東大阪市若江西新町５丁目・若江南町４～５丁目の東西0.85km、南北1.0kmがその範囲とされている。

山賀遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行なわれた楠根川改修工事により発見された遺跡である。その後、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター(現　(財)大阪府文化財センター)、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により多次にわたる調査が実施されており、縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡として認識されている。なかでも、昭和54～60年に(財)大阪文化財センターにより実施された近畿自動車道路建設に伴う山賀（その１～６）の発掘調査では、弥生時代前期中葉（第Ⅰ様式中段階）に成立する集落の存在が明らかにされ、河内平野中心部での稲作導入期の動向を知る上で貴重な資料を提供している。

山賀遺跡周辺では、東に西郡廃寺遺跡、南東に萱振遺跡、西に小若江北遺跡（東大阪市）、南に美園遺跡、北に若江北遺跡（東大阪市）、北西に上小阪遺跡（東大阪市）が位置している。

当調査研究会が山賀遺跡内で行った発掘調査は、平成５年度の第１次調査以降、11次の調査件数を数える。今回報告する第３次調査（ＹＭＧ94－３）は、平成６年度に実施した調査で、山賀遺跡の弥生時代前期集落の東部範囲を推定するうえで示唆に富む資料を提供する結果となった。



第１図　調査地周辺図

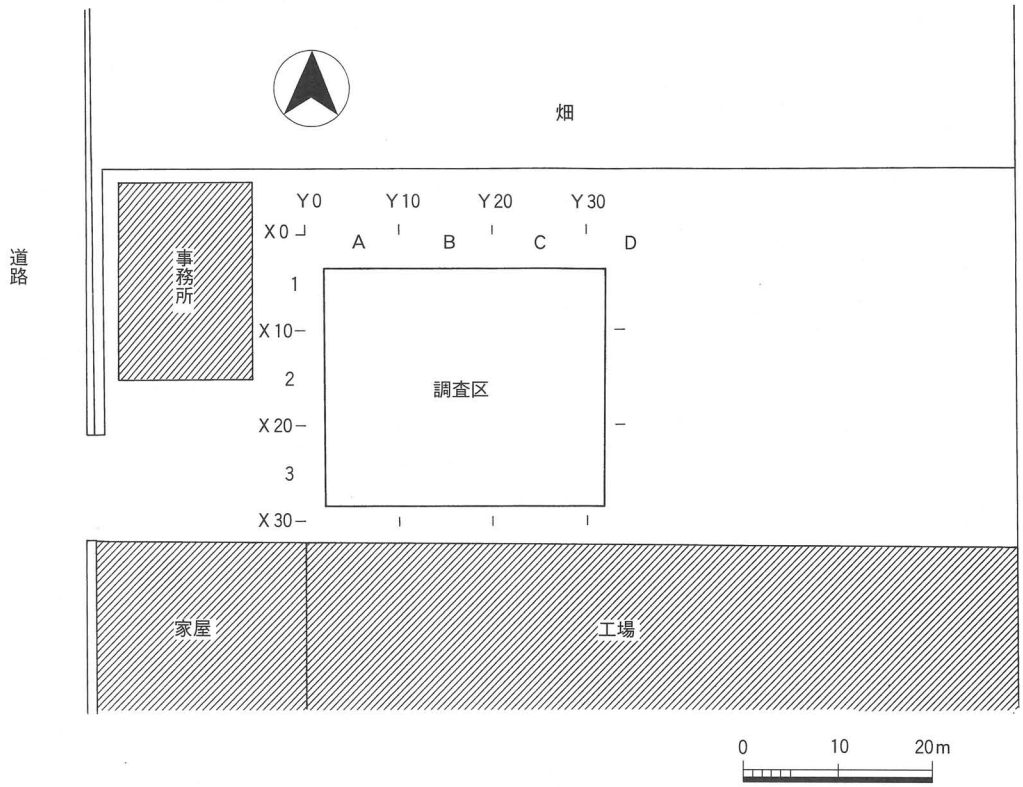
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は寮・研修施設建設に先だって実施したもので、遺構確認調査で遺物包含層を確認した地点を中心に調査区を設定した。調査では、上幅で東西27m、南北25mを設定したが、遺構確認調査で遺物包含層の深度が3.0mに及ぶことが確認されていたことから、安全面を考慮して法面を二段に掘削する調査方法を実施したため、調査範囲は約305m²となった。

調査地の地区割については、調査地の北西隅に任意のＸ０・Ｙ０地点を設け、その点を基点として東西30m、南北30mにわたって設定した。一区画の単位は10m四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｄ）、南北方向は算用数字（北から１～３）で示し、地区の表示は１Ａ地区～３Ｄ地区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ30）・南北線（Ｙ０～Ｙ30）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下2.7m前後までを機械掘削した後、以下0.3mについては、人力掘削を行ない遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下2.9～3.1m（T.P.＋2.0m前後）付近に存在している第15・16層上面で、弥生時代前期後半～中期前半（第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式）に比定される土坑９基（ＳＫ－１～ＳＫ－９）、溝５条（ＳＤ－１～ＳＤ－５）、小穴21個（ＳＰ－１～ＳＰ－21）を検出した。遺物は遺構および第15層からコンテナ箱に15箱程度出土している。



第２図　調査地地区割り図

第２節　基本層序

現地表（T.P.＋4.9m）以下、約4.1m（T.P.＋1.8m）迄に堆積する27層（第０層～20層）を摘出して基本層序とした。第１層の作土以下は平野部に通有な水成層を中心とした比較的安定した層相の連続であった。第１層～第３層が近世～現代、第４層が中世、第７層が古墳時代後期の遺物を含む。第８層～第12層は粘土質シルト～極細粒砂の水成層が連続する。第12層上面では、本層を切り最大層厚70cmを測る自然河川（Ａ層）の存在が南壁西端と西壁で確認できる。第15層が弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階）～中期前半（第Ⅱ様式）の遺物を多量に含む包含層で、一部の遺構の構築面にあたるが、調査では第15層を取り除いた第16層上面を調査面とした。

第０層　客土。層厚50cm。上面の標高はT.P.＋4.9mを測る。

第１層　N4/0灰色極細粒砂。旧作土。層厚10cm。

第２A層　7.5GY7/1明緑灰色極細粒砂。細礫を含む。層厚10cm。

第２B層　7.5GY6/1緑灰色極細粒砂。酸化鉄が斑点状に沈着している。層厚10cm前後。

第３層　7.5GY8/1明緑灰色極細粒砂。層厚20cm。国産磁器を包含する。

第４層　5GY8/1灰白色極細粒砂。層厚10cm前後。酸化鉄が斑点状に沈着。中世の遺物が極少量含まれている。

第５A層　5Y8/4淡黄色極細粒砂。層厚15cm前後。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着。

第５B層　2.5GY8/1灰白色極細粒砂。層厚５～20cm。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着。

第６層　10YR6/1褐灰色粘土質シルト。層厚10～25cm。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着。

第７層　10YR5/1褐灰色粘土質シルト。層厚10cm。古墳時代後期の遺物が極少量含まれている。

第８層　10YR7/6明黄褐色粘土質シルト。層厚10～20cm。酸化鉄が斑点状に沈着している。

第９A層　2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土。層厚10～45cm。水成層。

第９B層　2.5GY8/1灰白色シルト。層厚５cm。水成層。

第９C層　N7/0灰白色粘土質シルト。層厚５～30cm。水成層。

第10A層　2.5GY8/1灰白色極細粒砂。層厚８～30cm。ラミナが認められる。

第10B層　10BG7/1明青灰色極細粒砂。層厚５～15cm。ラミナが認められる。

第11層　N5/0灰色粘土質シルト。層厚15cm。

第12層　5B5/1青灰色粘土質シルト。層厚10～40cm。

第13層　5BG6/1青灰色粘土。層厚10～35cm。

第14A層　10BG7/1明青灰色シルト～粘土。層厚10～35cm。

第14B層　10BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚７～20cm。植物遺体が少量含まれている。

第15層　N3/0暗灰色極細粒砂混じりシルト。層厚15～30cm。弥生時代前期後半～中期初頭の遺物包含層および遺構構築面である。

第16層　10BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚20～42cm。弥生時代前期後半～中期初頭の遺構検出面。

第17層　N5/0灰色シルト質粘土。層厚７～10cm。

第18層　N7/0灰白色細粒砂。層厚10～25cm。

第19層　N8/0灰白色中粒砂～粗粒砂。層厚15～30cm。

第20層　N4/0灰色粘土。層厚20cm。植物遺体を含む不均質な土層である。

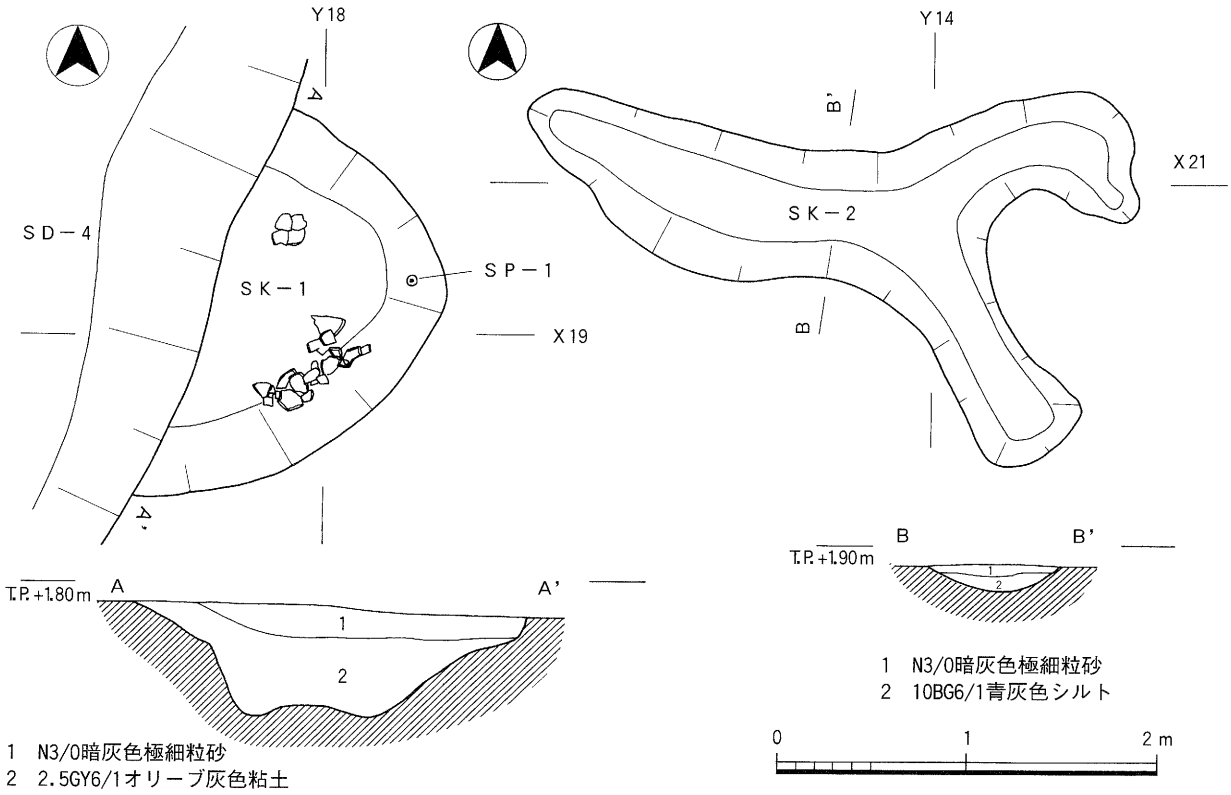
第３節　検出遺構と出土遺物

１）検出遺構

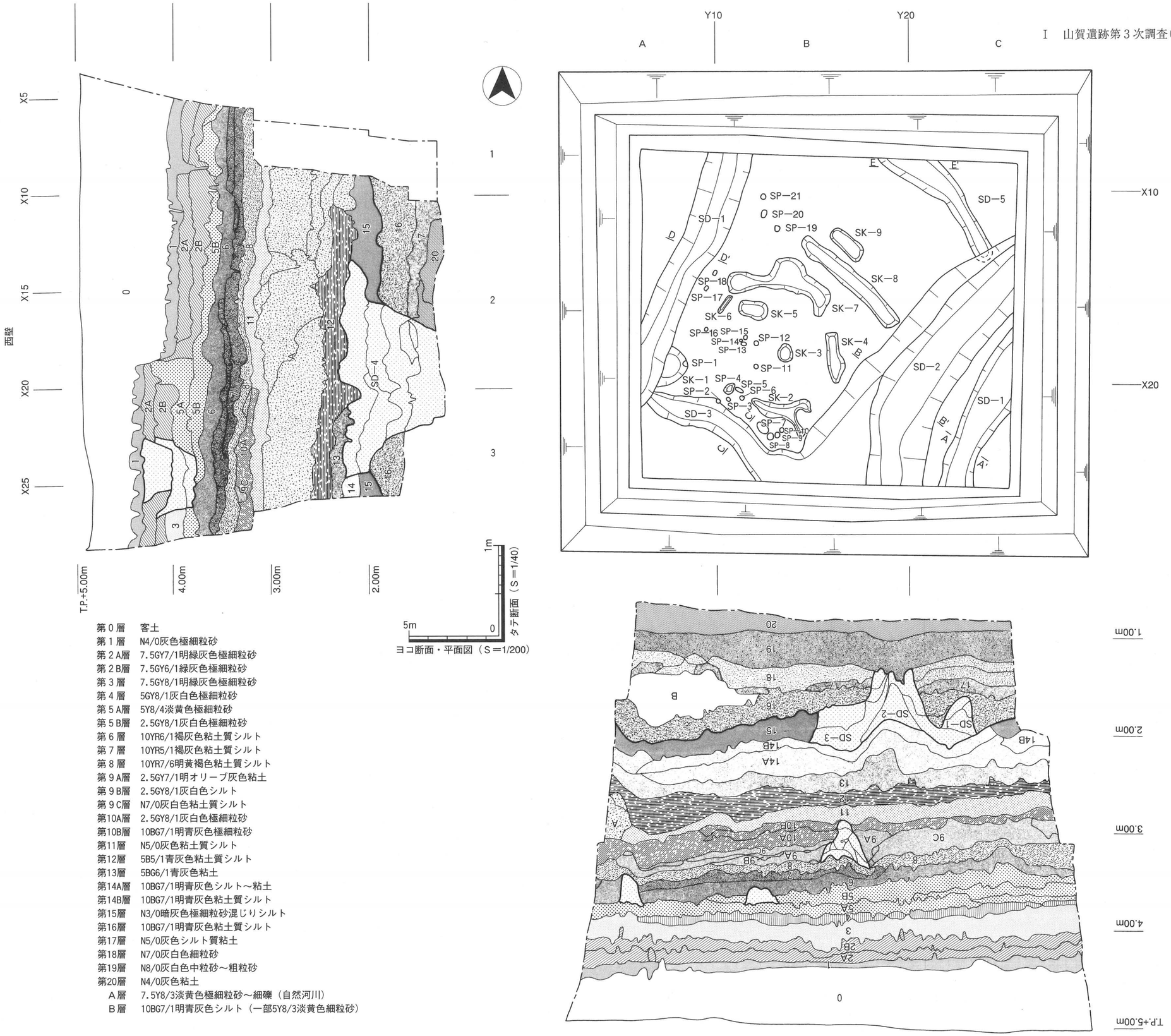
土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

２Ａ地区で検出した。西部はＳＤ－４に切られており全容は不明であるが、検出部分で東西幅1.2m、南北幅2.2m、深さ0.6mを測る。埋土は２層で上層がN3/0暗灰色極細粒砂、下層が植物遺体を多く含む2.5GY6/１オリーブ灰色粘土である。遺物は両層から弥生時代前期後半の弥生土器類が多量に出土している。弥生土器７点（１～７）を図化した。壷は３点（１～３）である。１は中形の広口壷で頸部から体部下半が残存している。体部は算盤玉形を呈するもので体部最大径20.0cmを測る。体部外面中位に６条のヘラ描き沈線文を施文する。器面調整は外面ではハケを多用しており、体部上位では縦位、体部中位以下では左上がりに施している。体部内面は上位が指頭圧成形後横位のナデ、中位は指頭圧成形後左上がりのハケ、以下はナデを行う。色調は褐灰色。生駒西麓産。２・３は広口壷の底部である。２点ともに底部が完存しており、底径は２が11.5cm、３が8.7cmを測る。器面調整は２の外面が横位のヘラミガキ、内面は剥離のため不明。３の外面はハケ調整の後横位に単位の細いヘラミガキ、内面は底部が指頭圧痕、体部は外面と同様細い単位のヘラミガキを多用する。色調は２が褐灰色、３が淡橙色。２が生駒西麓産。３が非生駒西麓産である。甕は３点（４～６）で共に体部が倒鐘形で口縁部が短く外反する如意形口縁を呈するもので無文の４・５と有文の６がある。復元口径は４が18.0cm、５が23.0cm、６が27.9cmを測る。４・５の体部外面には縦位のヘラミガキを行う。６は口縁端部に刻目と体部上位にヘラ描による４条の沈線が巡る。３点ともに色調は褐灰色で生駒西麓産。鉢は１点（７）図化した。口縁部か

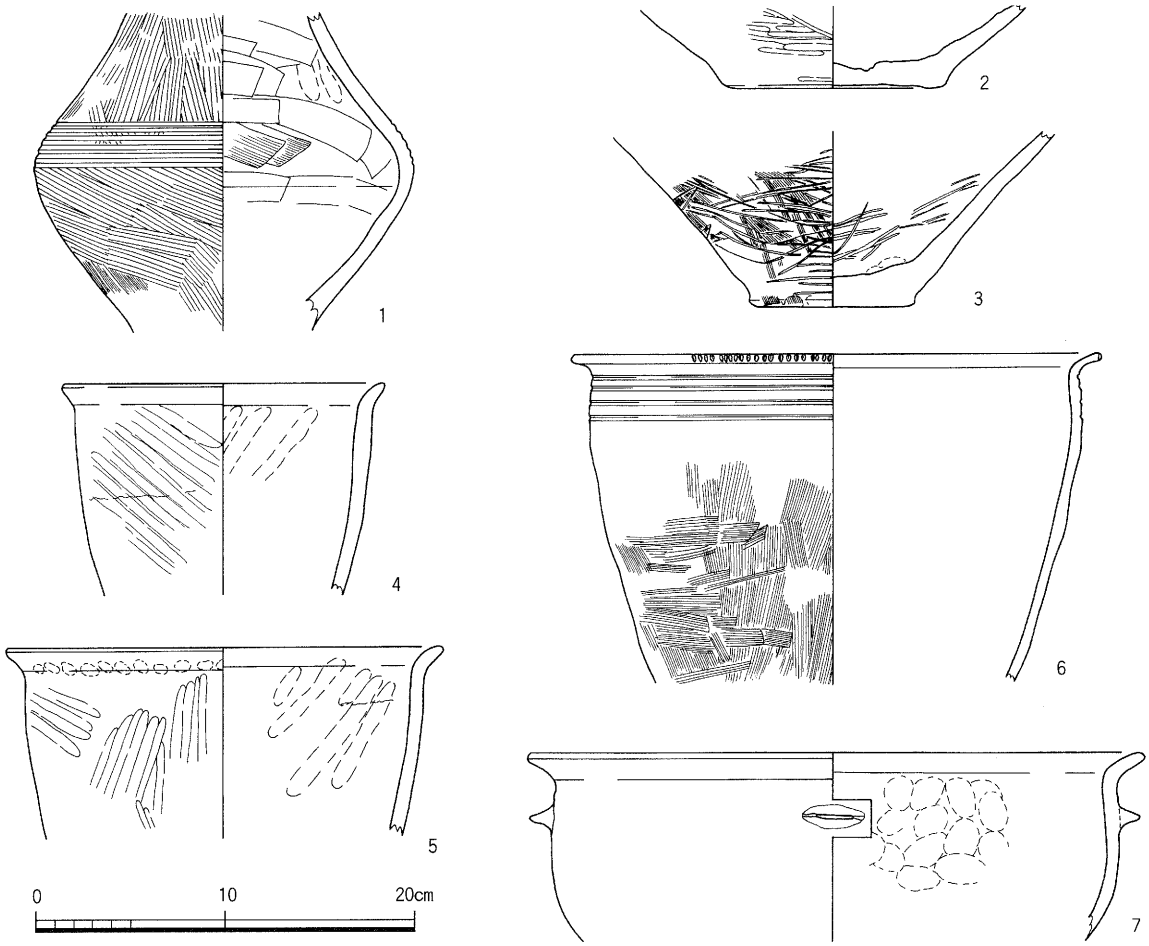


第３図　ＳＫ－１、ＳＫ－２平断面図



第４図　検出遺構平断面図

第０層　客土
第１層　N4/0灰色極細粒砂
第２A層　7.5GY7/1明緑灰色極細粒砂
第２B層　7.5GY6/1緑灰色極細粒砂
第３層　7.5GY8/1明緑灰色極細粒砂
第４層　5GY8/1灰白色極細粒砂
第５A層　5Y8/4淡黄色極細粒砂
第５B層　2.5GY8/1灰白色極細粒砂
第６層　10YR6/1褐灰色粘土質シルト
第７層　10YR5/1褐灰色粘土質シルト
第８層　10YR7/6明黄褐色粘土質シルト
第９A層　2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土
第９B層　2.5GY8/1灰白色シルト
第９C層　N7/0灰白色粘土質シルト
第10A層　2.5GY8/1灰白色極細粒砂
第10B層　10BG7/1明青灰色極細粒砂
第11層　N5/0灰色粘土質シルト
第12層　5B5/1青灰色粘土質シルト
第13層　5BG6/1青灰色粘土
第14A層　10BG7/1明青灰色シルト～粘土
第14B層　10BG7/1明青灰色粘土質シルト
第15層　N3/0暗灰色極細粒砂混じりシルト
第16層　10BG7/1明青灰色粘土質シルト
第17層　N5/0灰色シルト質粘土
第18層　N7/0灰白色細粒砂
第19層　N8/0灰白色中粒砂～粗粒砂
第20層　N4/0灰色粘土
Ａ層　7.5Y8/3淡黄色極細粒砂～細礫（自然河川）
Ｂ層　10BG7/1明青灰色シルト（一部5Y8/3淡黄色細粒砂）

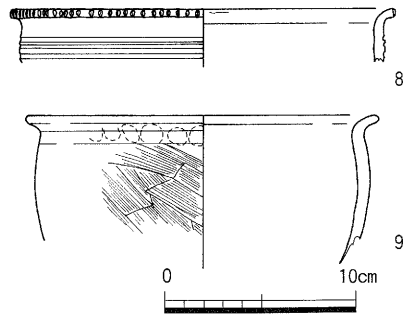


第５図　ＳＫ－１出土遺物実測図

ら体部上半にかけて残存しており復元口径32.5cmを測る。体部外面上位に瘤状突起を付ける。色調は褐灰色。生駒西麓産。時期的には弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階＜河内Ⅰ－４様式＞）に比定される。

ＳＫ－２

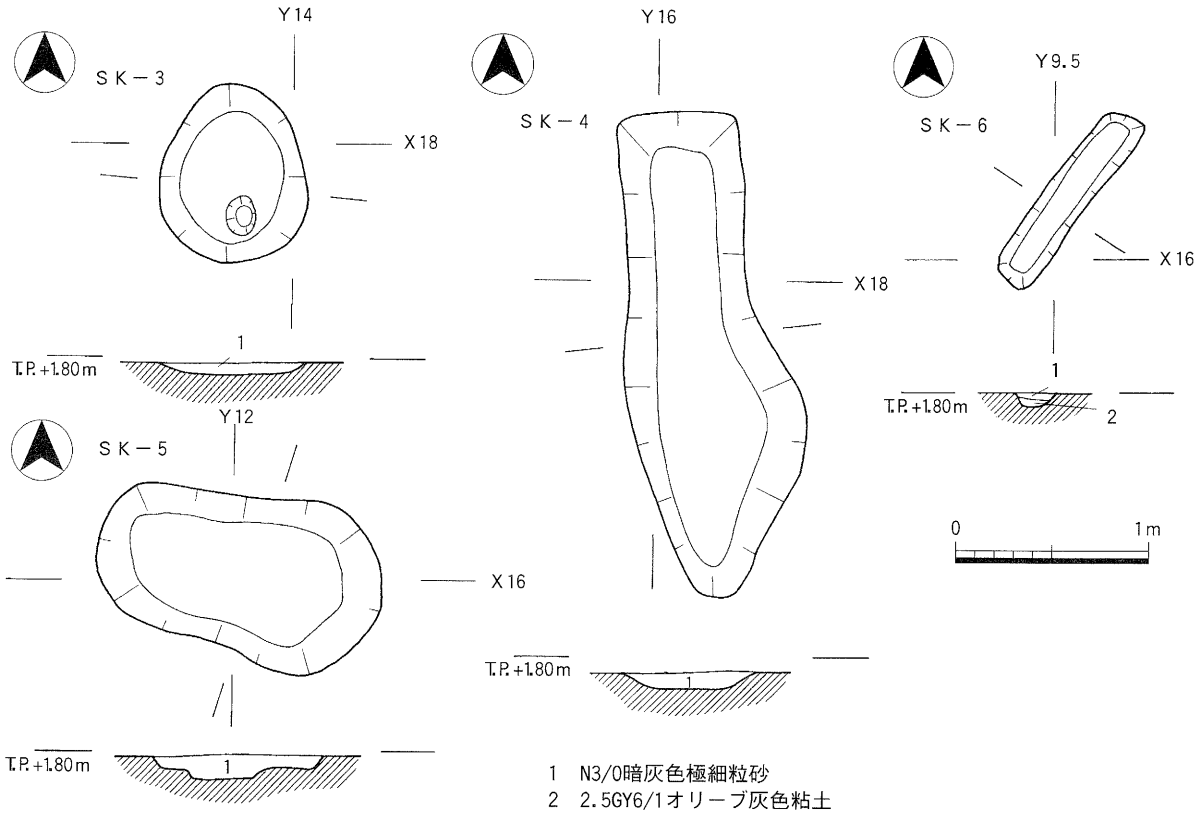
３Ｂ地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅3.3ｍ、南北幅2.0ｍ、深さ0.14ｍを測る。埋土は２層から成る。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土している。甕２点（８・９）を図化した。共に小破片で復元口径は８が20.1cm、９が18.2cmを測る。８が有文、９が無文である。８は口縁端面に刻目、体部上位にヘラ描きによる沈線文が巡る。色調は褐灰色。生駒西麓産。時期的には弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階＜河内Ⅰ－４様式＞）に比定される。



第６図　ＳＫ－２出土遺物実測図

ＳＫ－３

２Ｂ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.79ｍ、南北幅0.92ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土はN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土しているが図化し得たものはない。



第７図　ＳＫ－３～ＳＫ－６平断面図

ＳＫ－４

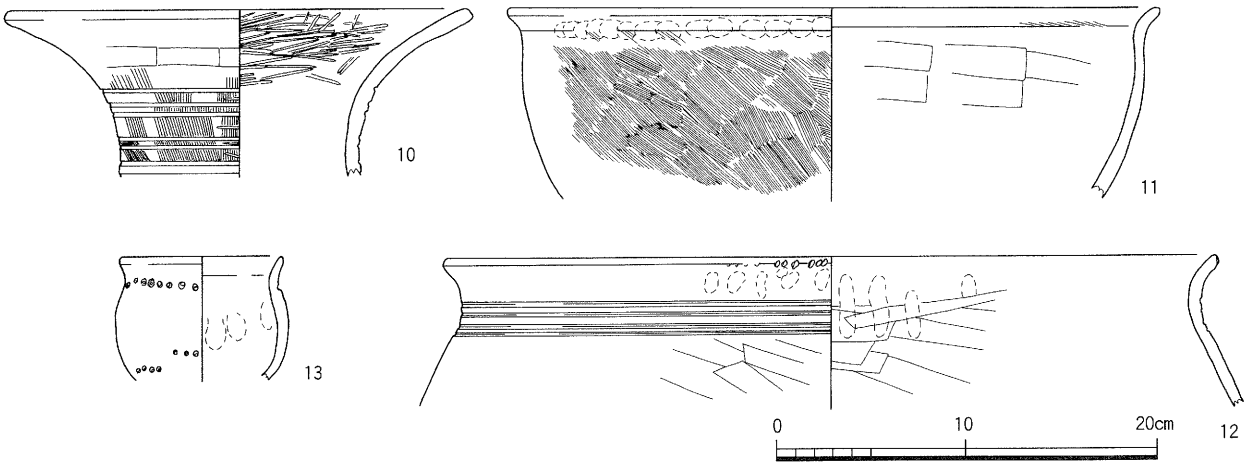
２Ｂ地区で検出した。南北方向に長い溝状を呈する土坑で、東西幅0.9m、南北幅2.58m、深さ0.09mを測る。埋土はN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の土器類が少量出土しているが図化し得たものはない。

ＳＫ－５

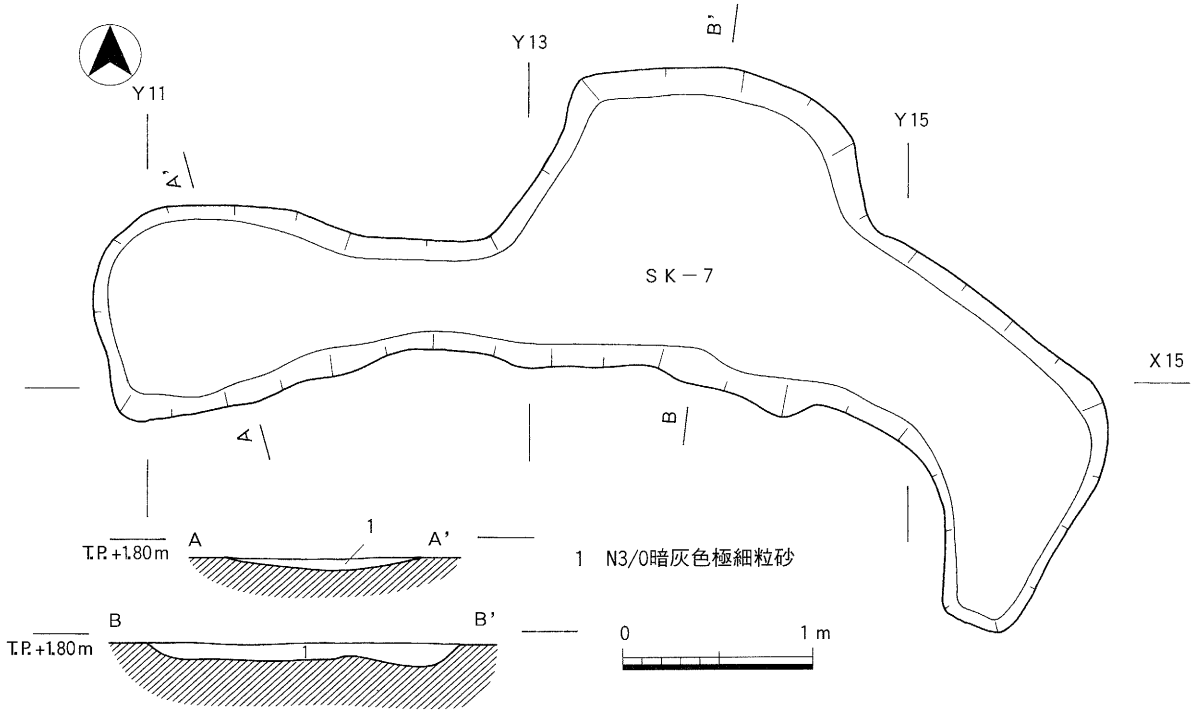
２Ｂ地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.5m、南北幅0.8m、深さ0.13mを測る。埋土はN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土している。３点（10～12）を図化した。壷は２点（10・12）である。10は広口壷で復元口径23.7cmを測る。頸部外面は縦位のハケおよび板ナデによる器面調整の後、ヘラ描き沈線文が施文されており、残存部分では６条が確認できた。色調は淡褐灰色。非生駒西麓産である。12は小片のため不明な点が多いが、太頸の広口壷と推定される。復元口径40.6cmを測る。口縁端部に刻目、体部上位にヘラ描き沈線文が４条巡る。色調は褐灰色。生駒西麓産である。11は鉢で復元口径34cmを測る。体部外面には細かい単位のハケメを密に左上がり方向に施している。色調は褐灰色。生駒西麓産である。時期的には弥生時代前期後半（第Ｉ様式新段階＜河内Ｉ－４様式＞）に比定される。

ＳＫ－６

２Ｂ地区で検出した。幅の狭い長方形を呈するもので、検出長1.08m、幅0.22m、深さ0.06mを測る。埋土は２層から成る。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が極少量出土しているが図化し得たものはない。



第８図　ＳＫ－５（10～12）、ＳＫ－７（13）出土遺物実測図



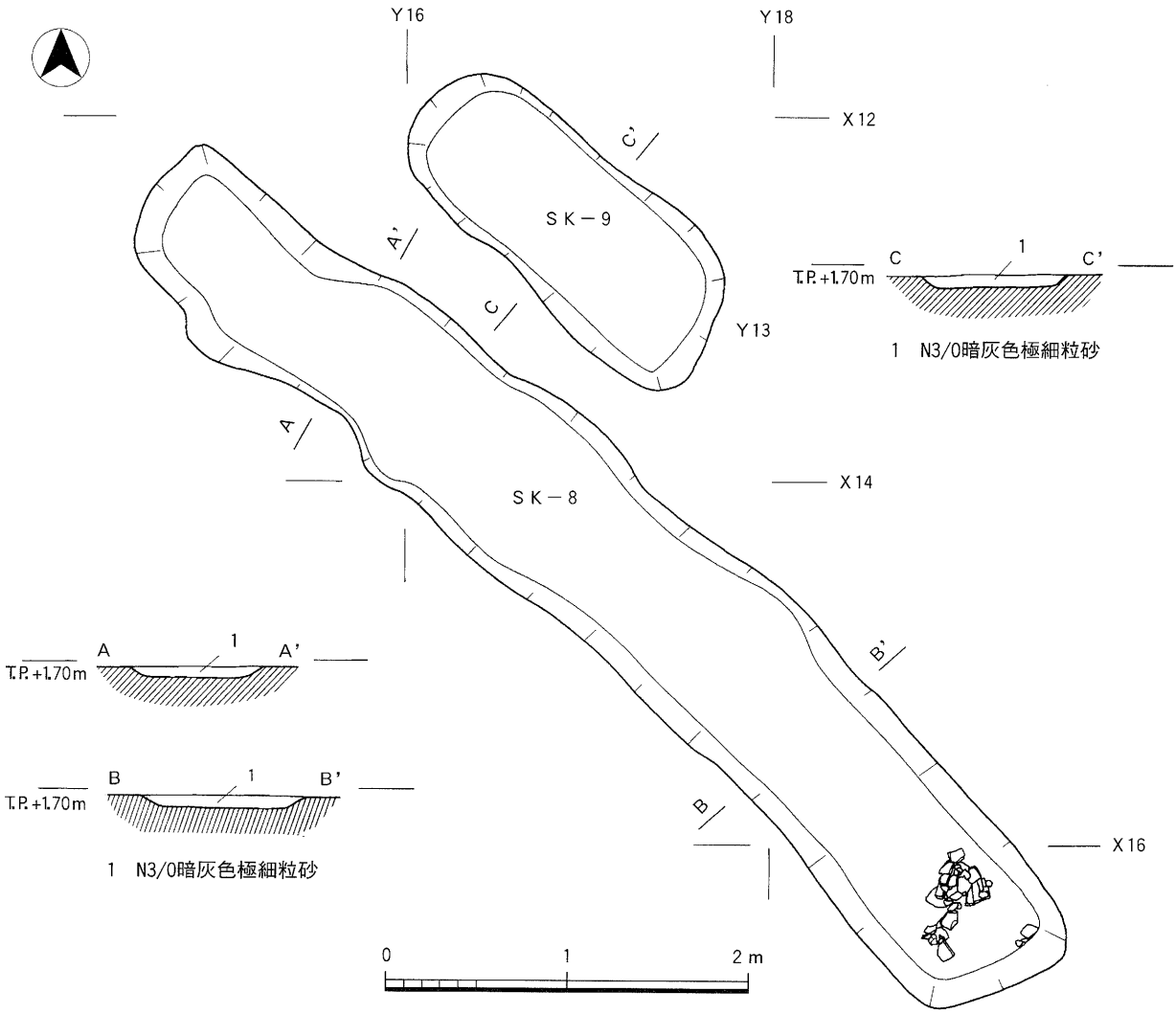
第９図　ＳＫ－７平断面図

ＳＫ－７

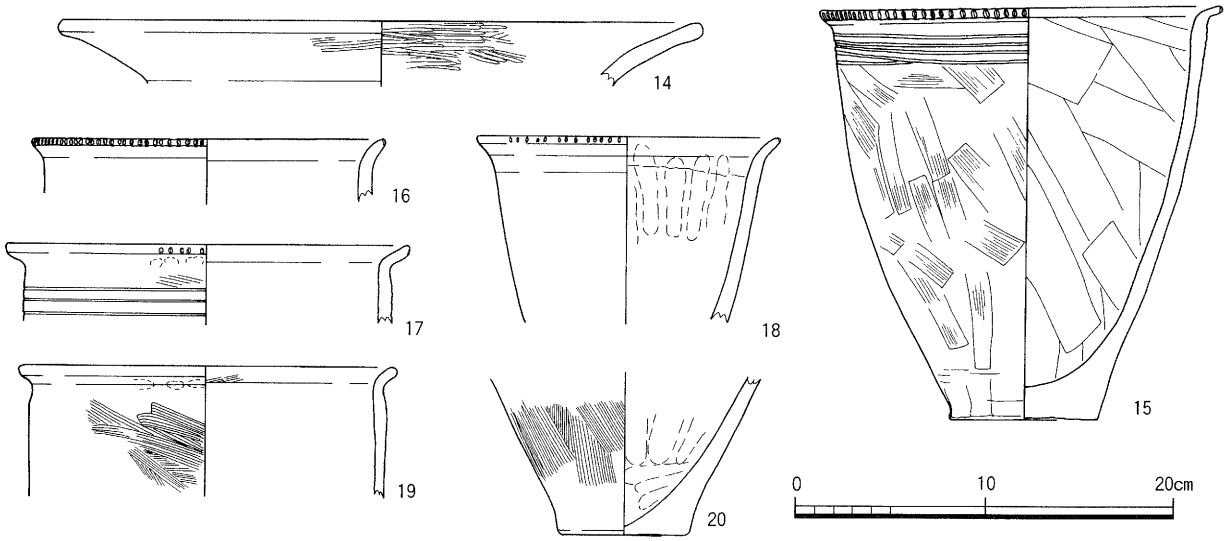
２Ｂ地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅5.6m、南北1.68m、深さ0.11mを測る。埋土はN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土している。１点（13）を図化した。13は小形の壺と考えられるが類例に乏しく不明な点が多い。復元口径8.5cmを測る。張りの少ない球形の体部から口縁部が小さく外反して伸びる。外面の体部上位と中位付近に細い棒ないしは竹を使用した刺突文が水平方向に施文されている。色調は灰白色。非生駒西麓産。弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階<河内Ⅰ－４様式>）に比定される。

ＳＫ－８

２Ｂ地区で検出した。溝状を呈し、北西－南東に直線的に伸びる。検出長6.4m、幅0.9m前後、深さ0.08mを測る。埋土はN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生



第10図　ＳＫ－８、ＳＫ－９平断面図



第11図　ＳＫ－８出土遺物実測図

土器類およびサヌカイトの剥片等が少量出土しており、なかでも南東部付近からは集中して出土している。弥生土器７点（14～20）を図化した。15以外は小破片である。壷は１点（14）を図化した。14は広口壷の口縁部の小破片である。復元口径33.5cmを測る。色調は褐灰色。胎土中に0.5～３mm大の長石・角閃石を多く含有する。生駒西麓産。甕は６点（15～20）を図化した。口縁部が残存する15～19は倒鐘形で口縁部が小さく外反する如意形口縁を呈するもので、有文の15～18と無文の19がある。有文のうち、15～18は口縁端部に刻目、そのうち15・17は体部上位にヘラ描き沈線文を施す。15はほぼ完形で口径21.1cm、器高21.7cm、底径7.5cmを測るもので甕の中では中形に分類される。器面調整は板ナデないしはハケが多用されている。20は底部が残存している。底径6.8cmを測る。器面調整は外面がハケ、内面は指ナデを行う。15～20の色調は褐灰色で胎土中に角閃石を含有する生駒西麓産である。時期的には弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階＜河内Ⅰ－４様式＞）に比定される。

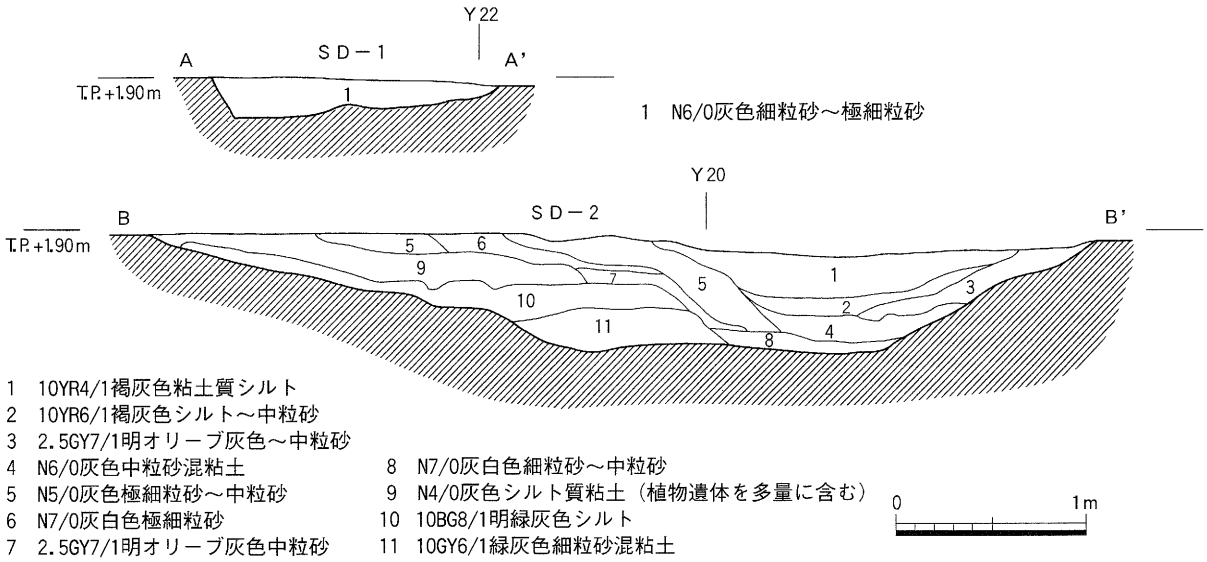
ＳＫ－９

ＳＫ－８の北側に近接している。不整の長方形を呈するもので、ＳＫ－８と同様、北西－南東に伸びる。検出長2.08m、幅0.8m、深さ0.08mを測る。埋土はN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土しているが図化し得たものはない。

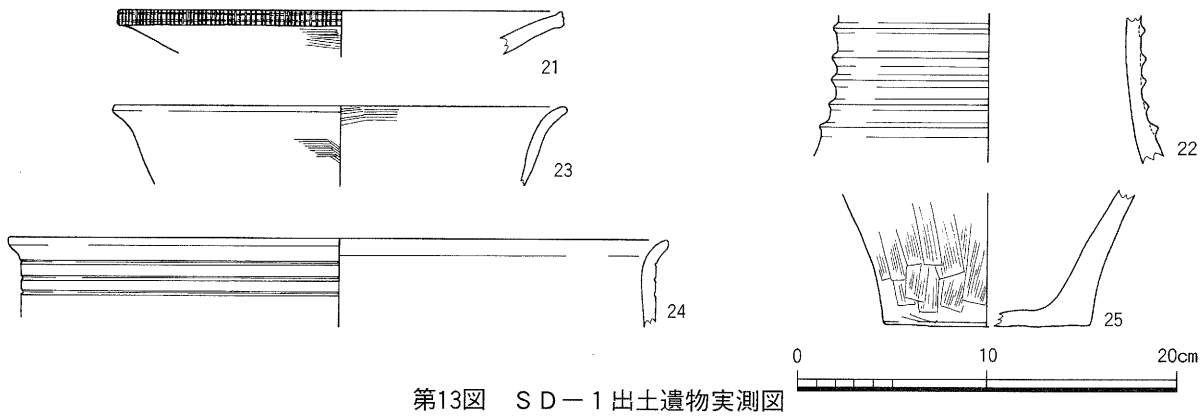
溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査地の南東部で検出した。北東－南西に伸びるもので、検出長8.7m、幅1.8～5.02m、深さ0.2m前後を測る。埋土はN6/0灰色細粒砂～極粗粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土している。弥生土器５点（21～25）を図化したが全て小破片で全容を知りえたものは無い。21・22は広口壷である。21は口縁部の小破片で復元口径23.1cmを測る。口縁端面に２本の沈線とそれに直交する形の格子状文が施文されている。22は広口壷の頸部で断面三角形状の突帯が巡る。23～25は甕である。23・24は口縁部の小破片でヘラ描き沈線文を施文する24と無文の23がある。25は底部で復元底径11.0cmを測る。21～25の色調は褐灰色。全て生駒西麓



第12図　ＳＤ－１、ＳＤ－２断面図



第13図　ＳＤ－１出土遺物実測図

である。時期的には弥生時代中期前半（第Ⅱ様式<河内Ⅱ－１様式>）に比定される。

ＳＤ－２

ＳＤ－１の西に0.5～1.0mの間隔を有し、並行して伸びるものである。検出長14m、幅４～6.5m、深さ0.7m以上を測る。南壁面の堆積状況から見て、南西部のテラス状の部分が集落が存続していた段階の流路で、廃絶後流路の中心が東に移動したことが窺える。埋土は11層から成り、１層～８層においては粘土質シルト～中粒砂が顕著であり、９層～11層にかけては、シルト～シルト質粘土が断面形状に沿って堆積している。遺物は南部のテラス状を呈する部分（９層）を中心として弥生時代前期後半の弥生土器類、石器類がコンテナ４箱程度出土している。

弥生土器58点（26～83）、石器１点（84）の計59点を図化した。弥生土器類は完形に復元可能な一部を除けば細片で出土したものが大半を占めた。壷類は15点（26～40）で全て広口壷に分類されるもので、頸部が太頸の26を除けば細頸で長頸傾向を示すものが大半を占めた。前期新段階の広口壷の器形につては佐原真氏（佐原1966）により二つの細分区分が提示されている。それによれば、腹径が大きく発達し器高と腹径がほぼ等しいａ形態と球形に近い器体の上に長い頸部と大きく開く口縁部をもち、器高は腹径をしのぐｂ形態に区別されており、ａ形態は中段階の壷の形態を受けつぐもの、ｂ形態が第Ⅱ様式に受けつがれる形態であるとされている。これらの分類に従えば、ａ形態が31～33、ｂ形態が36にあたる。

26は太い頸部を持つもので、復元口径29.8cmを測る。頸部にヘラ描き沈線文が３条巡る。色調は淡赤褐色。生駒西麓産。27～30は頸部上半から口縁部にかけて資料である。無文の27・28と有文の29・30がある。復元口径は大形の28が37.4cm、そのほかは23.5cm前後を測る。29は口縁端面の中央部に１条の沈線と更に上下に刻目、頸部に綾杉文を施文している。30は頸部にヘラ描き沈線を施文している。27～30の色調は褐灰色で全て生駒西麓産。31は頸部中位以下が残存している。体部最大径31.8cm、底径10.4cmを測る。ヘラ描きによる沈線文が体部中位に６本、頸部で８本以上が施文されている。色調は褐灰色。生駒西麓産である。32は頸部中位以下が完存している。体部最大径22.8cm、底径7.0cmを測る。体部外面の器面調整はハケを多用している。ヘラ描きによる沈線文が体部中位に密に14本、頸部で８本以上が施文されている。色調は褐灰色。生駒西麓産である。33は大形品で頸部中位以下が残存している。体部最大径43.1cm、底径11.4cmを測る。外面には布巻棒圧痕を伴う貼り付突帯を体部中位に７条、頸部に４条と体部上位にヘラ描き沈線文を二段（上段８条、下段７条）に施文している。色調は淡橙色～灰白色。胎土中に１～４mm大の長石・石英・チャートを多く含む。非生駒西麓産である。34・35は共に頸部の資料である。頸部外

面の装飾は34にはヘラ描きによる３条を一単位とする沈線文を上下に施文しその間に斜格子文、35では上面に刻目を伴う貼り付け突帯７条を巡らす。色調は共に褐灰色。生駒西麓産。36は口頸部が長い丈高の器形で頸部外面には14条のヘラ描き沈線文が施文されている。色調は褐灰色。生駒西麓産。広口壷の底部は４点（37～40）図化した。底径は7.2～9.5cmを測る。色調は37・39が灰白色。38・40が褐灰色で前者が非生駒西麓産。後者が生駒西麓産である。

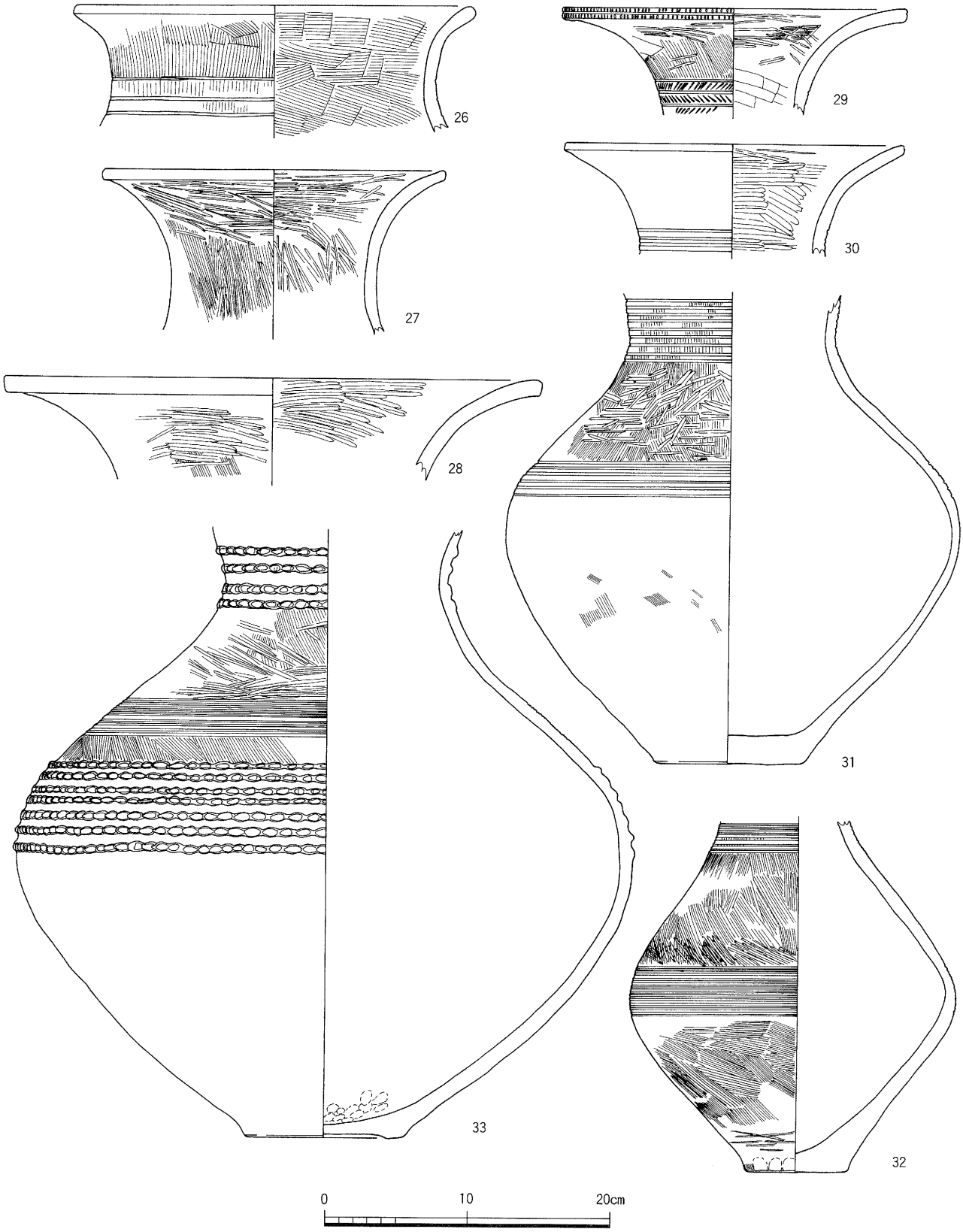
甕は39点（41～79）図化した。器形の特徴としては、倒鐘形の体部から小さく外反する如意形口縁を呈するもので、有文のものと無文のものがある。

有文のものは14点（41～54）でそのうち、口縁部内面に棒状工具による刺突文、端部に刻目、体部上位に７条のヘラ描き沈線文とヘラ先による列点文を施文するものが１点（41）、口縁端部に刻目と体部上半に３～９条のヘラ描き沈線文を施すものが10点（42～51）、口縁端部に刻目を施文するものが２点（52・53）、口縁端部に刻目、体部上位に刻目を伴う張り付け突帯を施文するもの１点（54）がある。41は小形品でほぼ完形品である。口径16.0cm、器高15.2cm、底径5.4cmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産である。42～45、47～50・53は中形品で口径19.6～24.7cmを測る。器面調整は体部外面では左上がりのハケ、内面では板ナデを多用するものが多い。45の体部中位から上位にかけて１条の沈線で区画した上下にヘラ状工具による弧状の文様が施文されている。色調は褐灰色。全て生駒西麓産である。46・51・52は大形品で、46については図上で完形に復元が可能で、口径34.5cm、器高33.8cm、底径8.9cmを測る。51・52は46に比してやや口径が小さいもので、51が26.8cm、52が28.4cmを測る。体部の器面調整は外面が縦位ないしは左上がりのハケ、内面は左上がりの板ナデを施す。色調は３点ともに褐灰色で生駒西麓産である。54は大形品で復元口径35.7cmを測る。色調は淡褐灰色。胎土中に0.5～３mm大の長石・石英・チャートを多く含む。非生駒西麓産である。

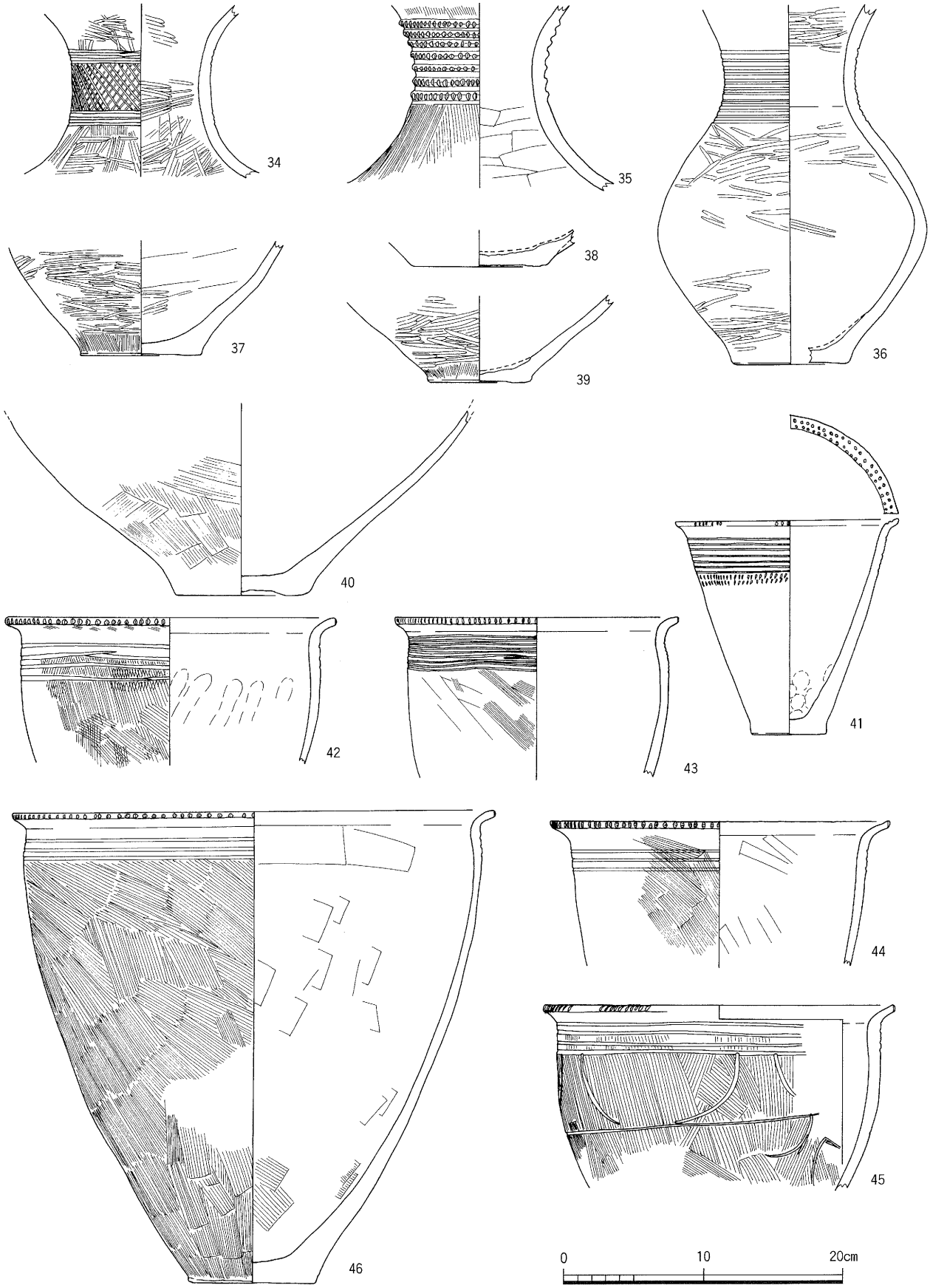
無文のものは14点（55～68）である。復元口径の数値では19cm以下の55・59・66と、口径19.6～24.4cmに分類が可能である。口縁部の形態では口縁部が小さく外反し如意形口縁を呈するものが大半を占めるが、65～67のように強く外折し内面に明瞭な稜線を持つものがある。体部の形状では体部中位がやや張り出す68以外は倒鐘形のものが多い。色調は暗褐灰色～褐灰色で生駒西麓産の鉱物組成に通有な角閃石を多量に含んだ胎土が使用されている。

69～79は甕の底部である。そのうち78・79は底部に穿孔を持つ。全て水平な底部から体部が斜上方に直線的に伸びるもので、底径の法量では6.5～7.5cmを測る小形の69・70・73・76・78と8.0～9.4cmを測る中形の71・72・75・77・79と11.5cmを測る大形の74に区別できる。器面調整としては体部外面に縦位のハケ、内面に板ナデおよび指ナデを多用している。穿孔を穿つ78・79のうち、78が焼成後の穿孔で１孔、79が焼成前の穿孔で２孔ありその内の１孔は貫通していない。69～74の色調は赤褐色～暗褐色で、全て生駒西麓産である。

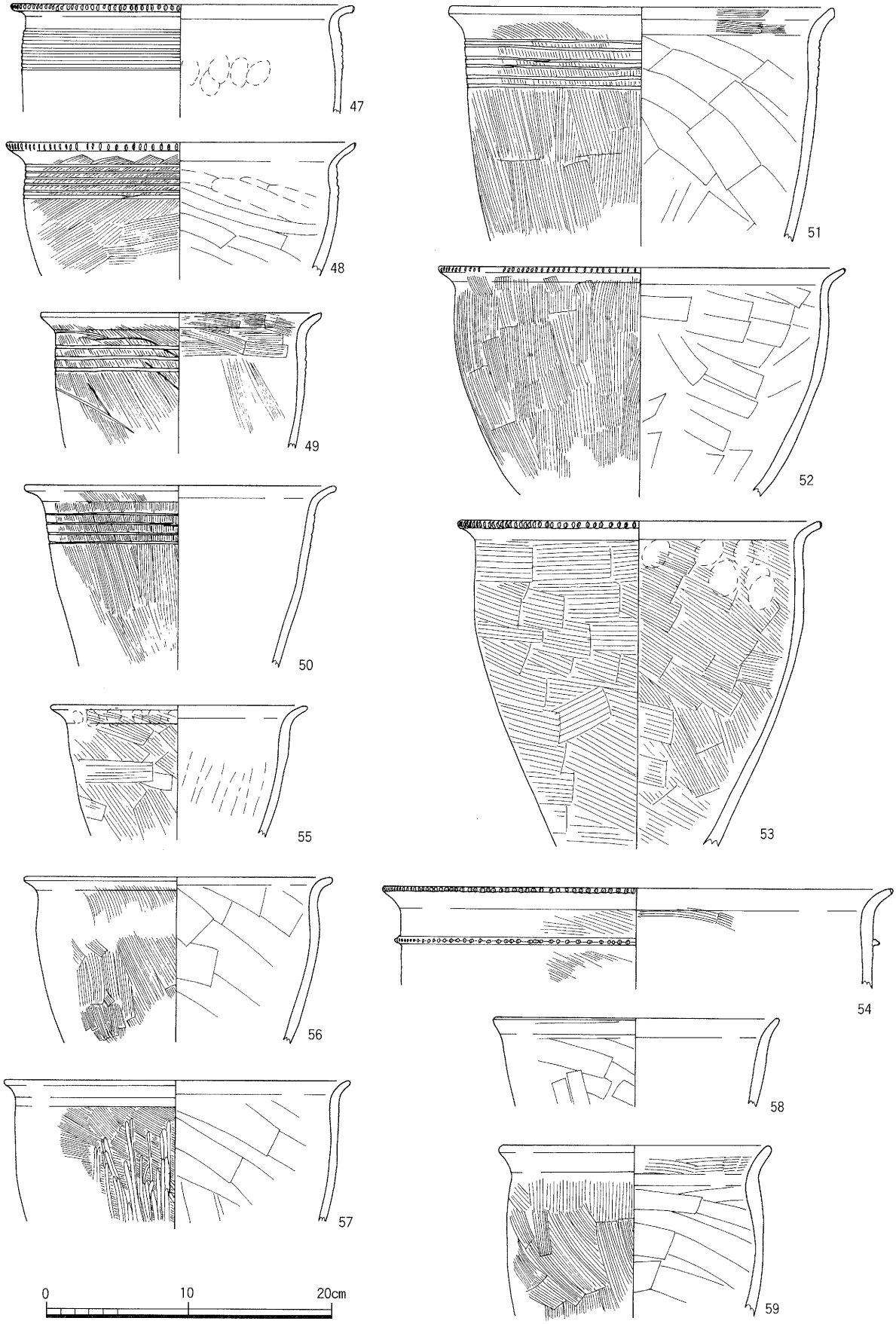
蓋は４点（80～83）で甕蓋２点（80・81）と壷蓋２点（82・83）がある。甕蓋２点は共に笠形で、上部端が小さく外反し斜上方に張り出す81と平坦な面を持つ80がある。80が口径22.3cm、器高10.5cm、上部径4.8cm、81が口径22.1cm、器高9.5cm、上部径6.8cmを測る。器面調整は80の体部外面が縦位のハケ、体部内面は上位が板ナデ、中位以下が指ナデ、81は体部外面が指ナデ、体部内面は横位のハケを施す。色調は共に褐灰色。生駒西麓産。壷蓋の２点82・83は共に笠形のもので、82には中凹みの環口状つまみが付く。83には焼成前に穿たれた紐孔２個がある。色調は共に



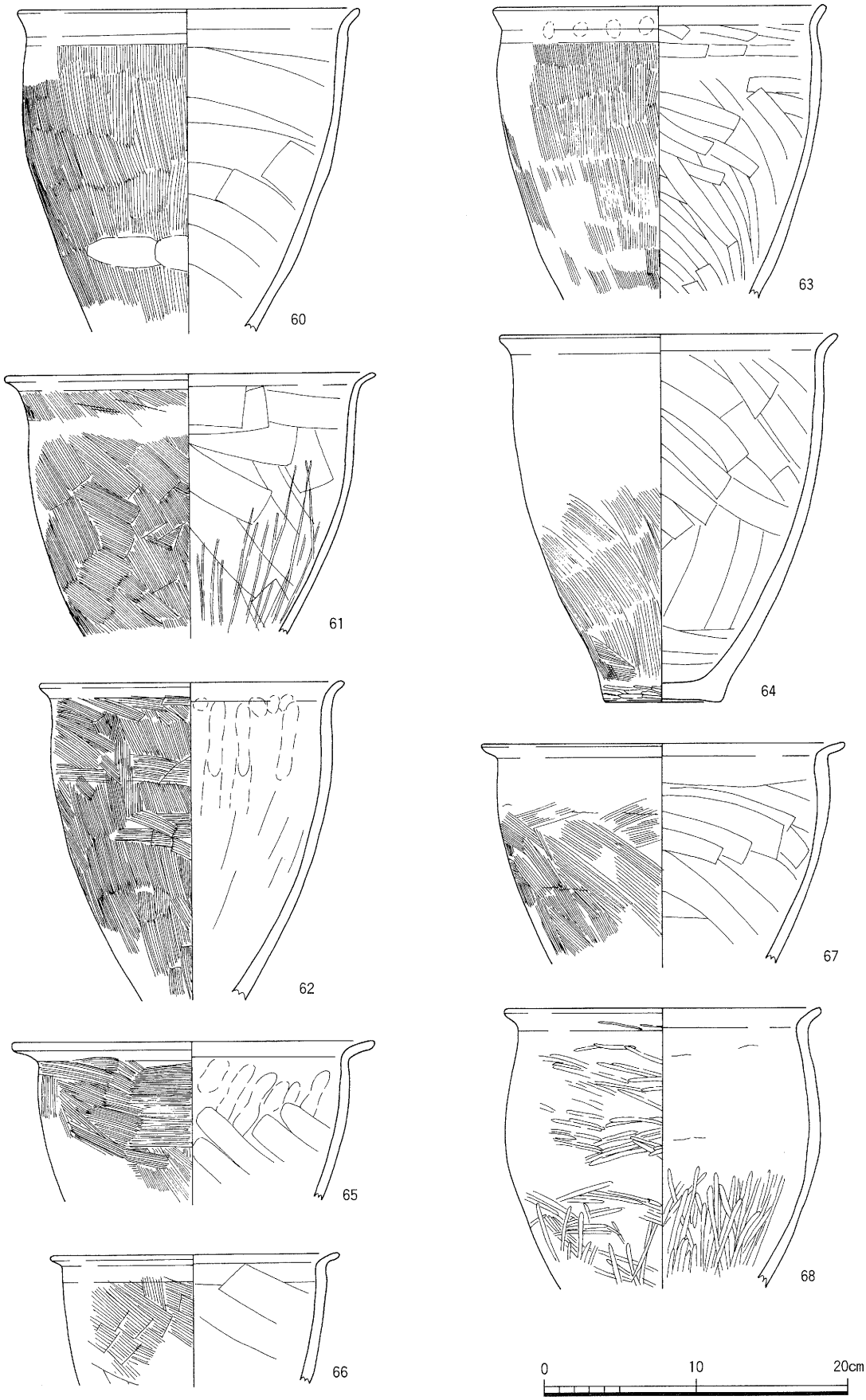
第14図　ＳＤ－２出土遺物実測図－１



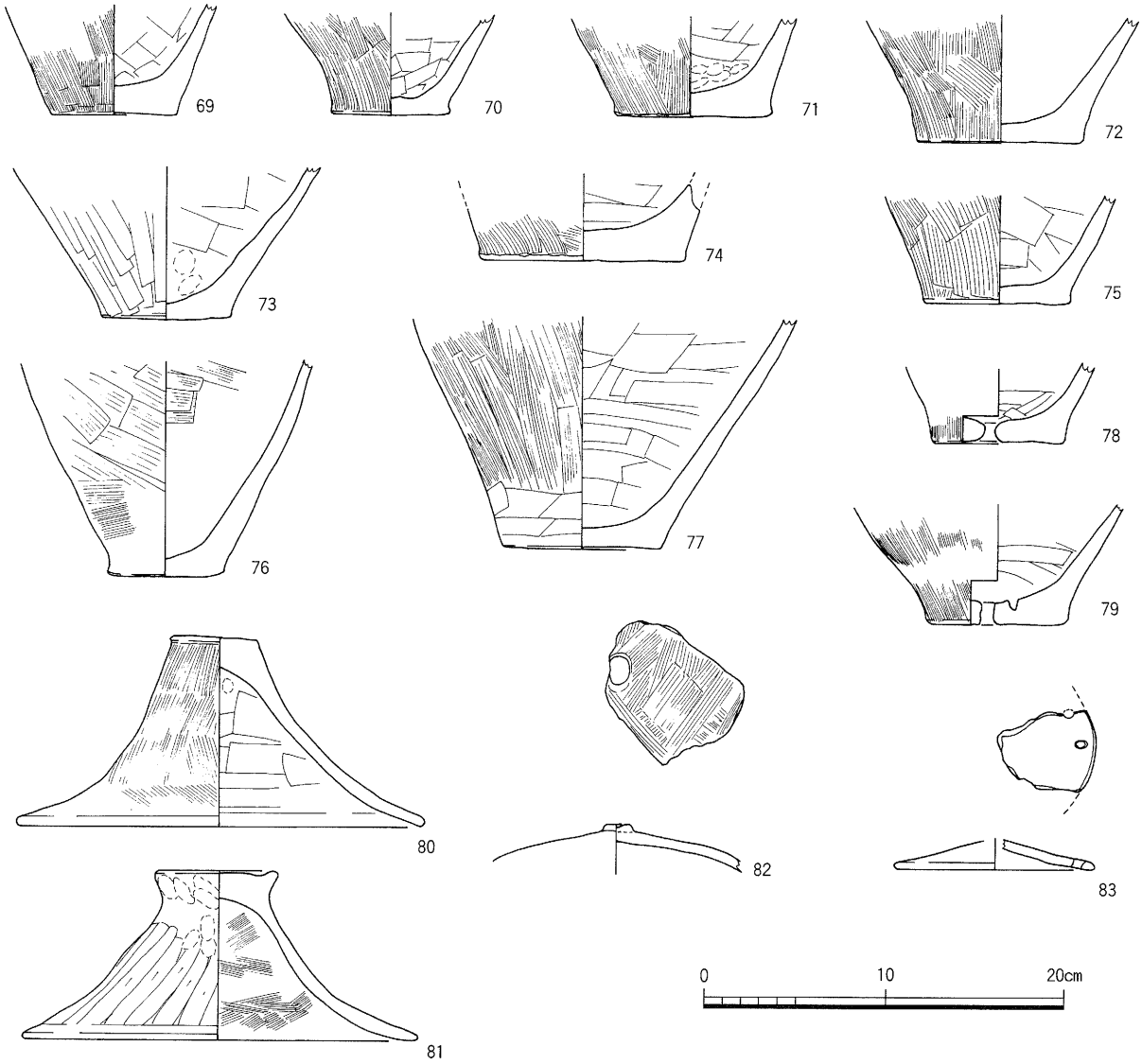
第15図　ＳＤ－２出土遺物実測図－２



第16図　ＳＤ－２出土遺物実測図－３



第17図　ＳＤ－２出土遺物実測図－４

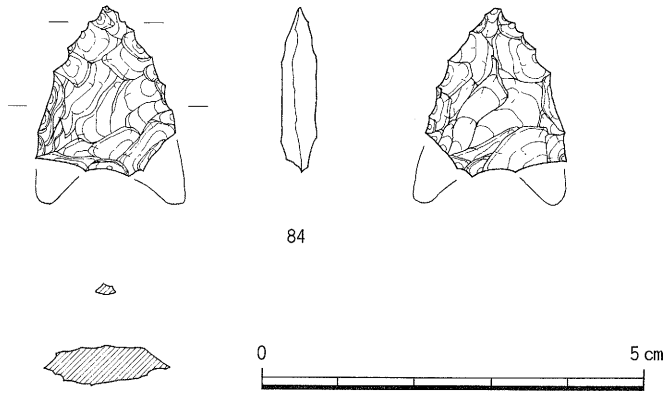


第18図　ＳＤ－２出土遺物実測図－５

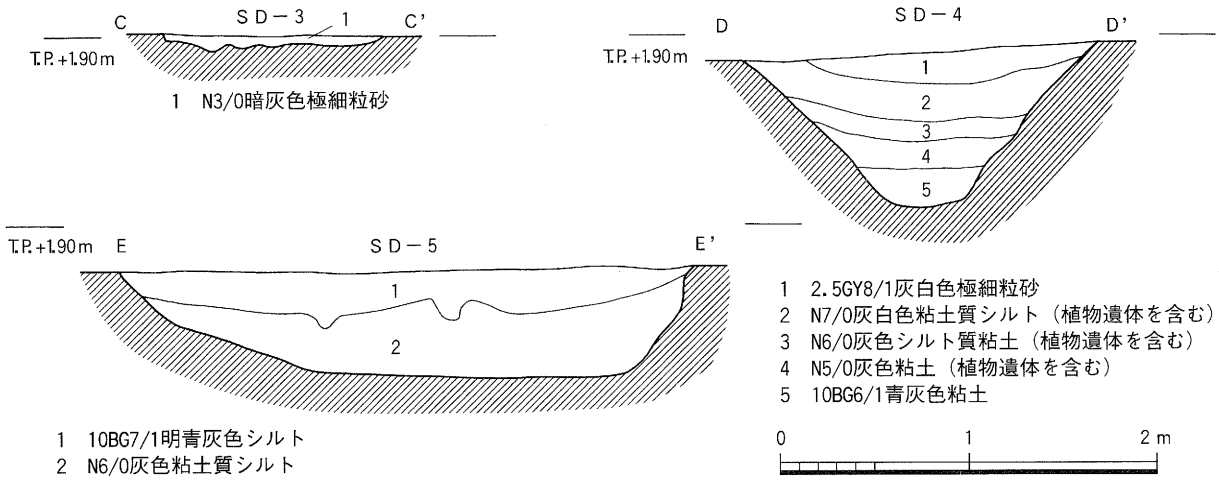
褐灰色。生駒西麓産である。

石器類は石鏃１点（84）を図化した。84は凹基無茎に分類される石鏃で、サヌカイト製である。両基部は欠損している。

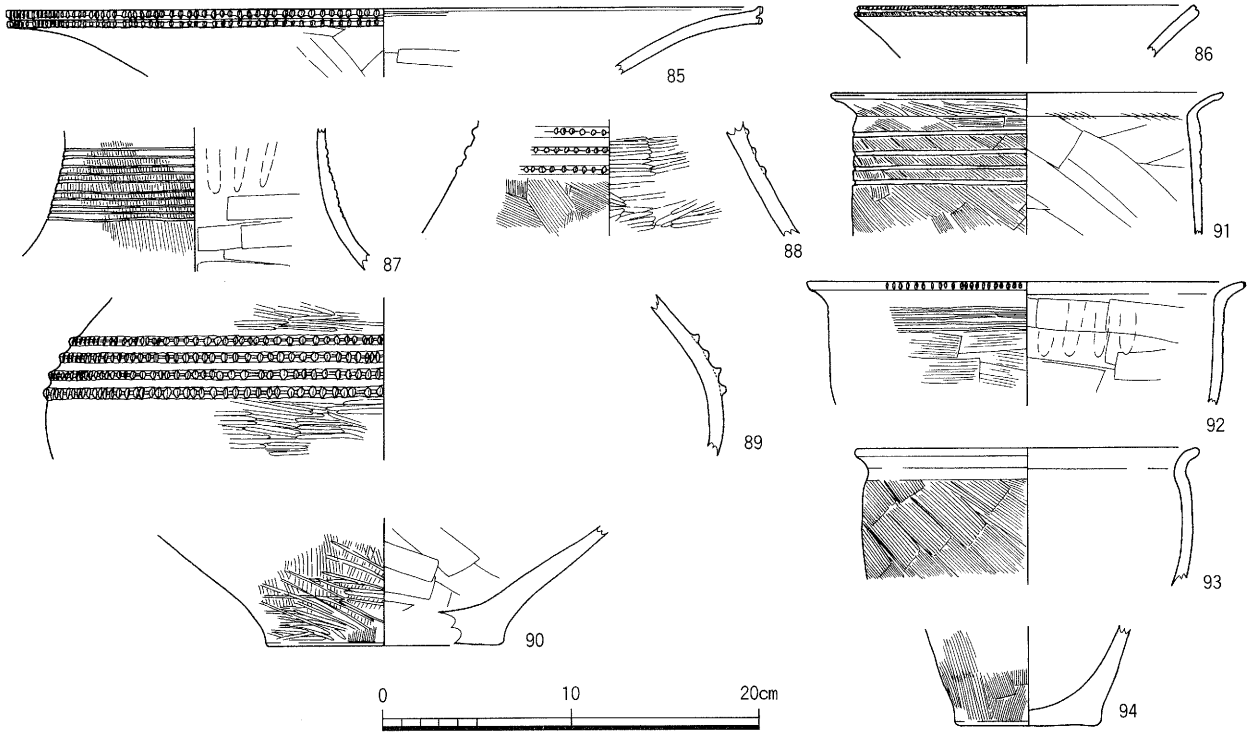
出土遺物から遺構の帰属時期は弥生時代前期後半（第Ｉ様式新段階＜河内Ｉ－４様式＞）に比定される。



第19図　ＳＤ－２出土遺物実測図－６



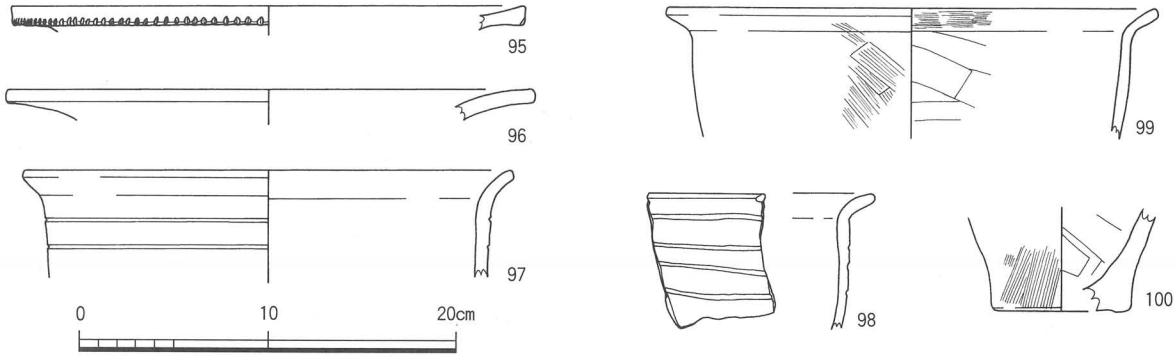
第20図　ＳＤ－３～ＳＤ－５断面図



第21図　ＳＤ－３出土遺物実測図

ＳＤ－３

調査地の南西部で検出した。北西－南東に伸びるもので、北西端はＳＤ－４に切られており、南東端はＳＤ－２と合流している。検出長８ｍ、幅0.56～1.5m、深さ0.18mを測る。埋土は炭を含むN3/0暗灰色極細粒砂の単一層である。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土している。10点（85～94）を図化した。いずれも小破片で全容を知り得たものはない。壷は６点（85～90）で広口壷に分類される。85・86は口縁端面に一条の沈線をひきその上下に細かい刻目を入れるもので、85が大形品で復元口径40.0cm、86が小形品で17.8cmを測る。87～89は頸部片でヘラ描き沈線文を施文する87と上面に刻目を持つ貼り付け突帯の88・89がある。90は底部片で復元底径12.5cmを測る。壷類の色調は褐灰色。生駒西麓産である。91～94は甕である。91～93は口縁部から体部上半にかけてのもので、有文の91・92と無文の93がある。91は体部上位に４条から成る



第22図　ＳＤ－５出土遺物実測図

ヘラ描き沈線文、92は口縁端部に刻目を施す。94は甕底部で底径7.5cmを測る。甕類の色調は暗褐灰色～褐灰色。生駒西麓産である。時期的には弥生時代前期後半～中期前半（第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式＜河内Ⅰ－４～Ⅱ－１様式＞）に比定される。

ＳＤ－４

調査地の西部で検出した。包含層である第15層を切っている。北東－南西方向に伸びる「Ｖ」字溝で、検出長14m、幅1.7～2.3m、深さ0.8mを測る。埋土は５層から成り、最上層が灰白色極細粒砂であるが、以下は植物遺体を多く含む不均質な粘土が堆積している。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土しているが図化し得たものはない。なお、中期前半（第Ⅱ様式＜河内Ⅱ－１様式＞）の遺物を含むＳＤ－３を切っていることから、時期的には中期前半（第Ⅱ様式）以降が考えられる。

ＳＤ－５

調査地の北西部で検出した。包含層である第15層を切っている。北西－南東に伸びるもので、検出長5.7m、幅0.8～1.5m、深さ0.58mを測る。埋土は３層から成る。遺物は弥生時代前期後半の弥生土器類が少量出土している。６点（95～100）を図化した。壷は２点（95・96）で口縁端部下面に刻目を持つ95と無文の96がある。復元口径は95が27.0cm、96が27.8cmを測る。色調は95が褐灰色、96が暗褐灰色である。共に生駒西麓産。97～100は甕である。体部上位にヘラ描き沈線文を施文する97・98と無文の99がある。100は甕底部で復元底径7.0cmを測る。時期的には弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階＜河内Ⅰ－４様式＞）に比定される。

小穴（ＳＰ）

小穴は総数で21個（ＳＰ－１～ＳＰ－21）を検出した。分布状態は散発的であるが、２Ｂ地区および３Ｂ地区で一部集中する部分が認められた。平面の形状では、円形および楕円形のものが大半を占める。規模は径0.15～0.72m、深さ0.04～0.50mを測る。埋土は１層ないしは２層から成るが、上層は一様にN3/0暗灰色極細粒砂の堆積が認められた。なお、ＳＰ－１からは長さ0.48m、径0.11mを測る柱根が検出されているが、建物を想定さ

写真１　ＳＰ－１柱根検出状況（西から）

せる配置関係は見出せなかった。遺物はＳＰ－８・ＳＰ－10から弥生時代前期後半の弥生土器類の小片が極少量出土している。

第１表　ＳＰ－１～ＳＰ－21法量表（単位ｍ）

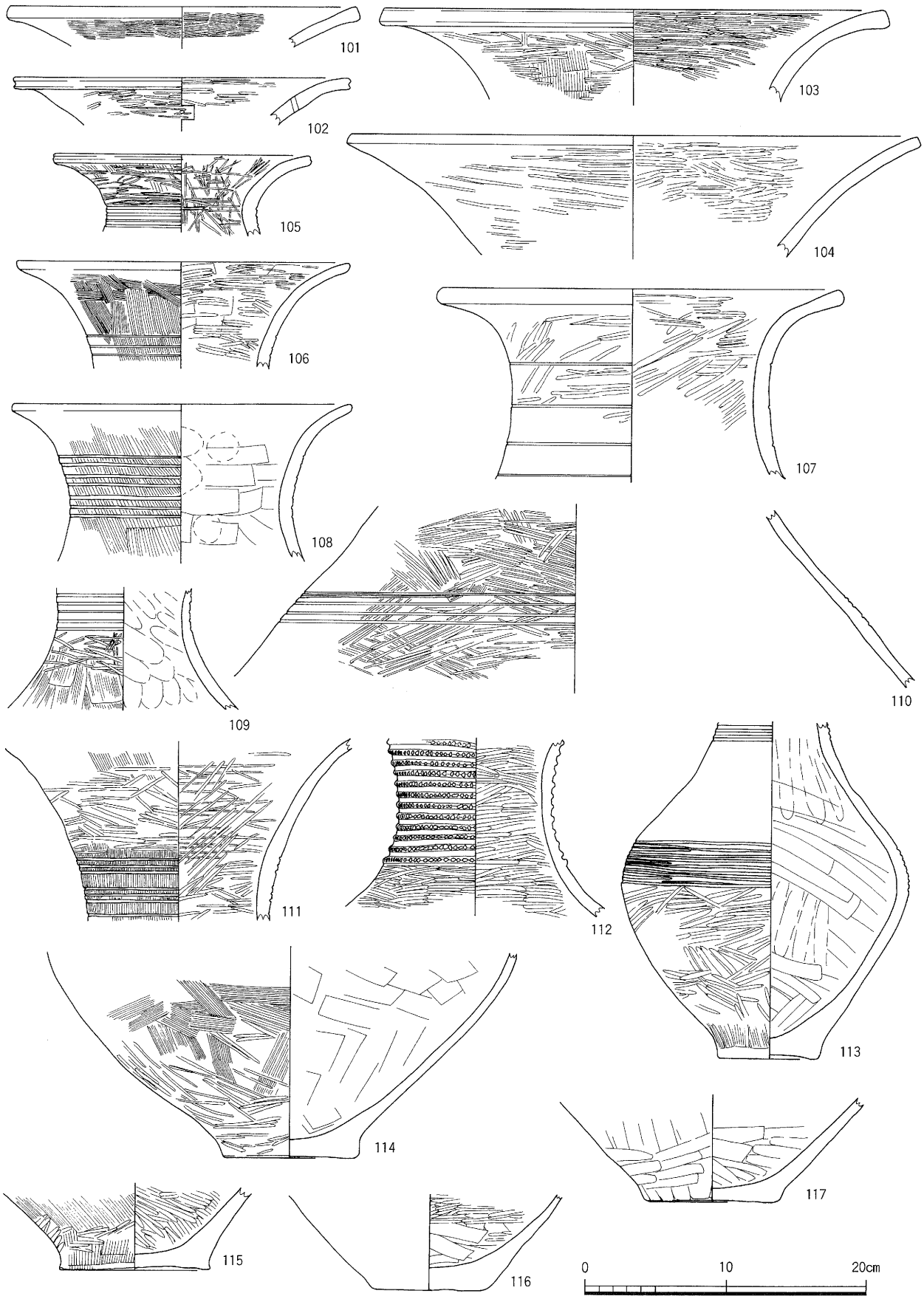
遺構番号	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋　　土	出土遺物
ＳＰ－１	２Ａ	円形	0.15	0.15	0.50	N3/0暗灰色極細粒砂	柱根
ＳＰ－２	３Ｂ	円形	0.20	0.18	0.05	〃	
ＳＰ－３	３Ｂ	円形	0.21	0.20	0.08	〃	
ＳＰ－４	２・３Ｂ	不定形	0.60	0.47	0.10	〃	
ＳＰ－５	３Ｂ	楕円形	0.45	0.22	0.04	〃	
ＳＰ－６	３Ｂ	円形	0.23	0.22	0.09	N3/0暗灰色極細粒砂　7.5Y6/2灰オリーブ色シルト	
ＳＰ－７	３Ｂ	楕円形	0.72	0.43	0.13	N3/0暗灰色極細粒砂	
ＳＰ－８	３Ｂ	円形	0.36	0.36	0.11	〃	弥生土器
ＳＰ－９	３Ｂ	円形	0.31	0.29	0.14	〃	
ＳＰ－10	３Ｂ	円形	0.25	0.25	0.08	〃	弥生土器
ＳＰ－11	２Ｂ	円形	0.25	0.24	0.09	〃	
ＳＰ－12	２Ｂ	円形	0.25	0.25	0.11	N3/0暗灰色極細粒砂　10BG6/1青灰色シルト	
ＳＰ－13	２Ｂ	楕円形	0.28	0.20	0.09	N3/0暗灰色極細粒砂	
ＳＰ－14	２Ｂ	円形	0.15	0.14	0.07	N3/0暗灰色極細粒砂　10BG6/1青灰色シルト	
ＳＰ－15	２Ｂ	円形	0.21	0.21	0.12	〃	
ＳＰ－16	２Ａ	円形	0.18	0.15	0.08	〃	
ＳＰ－17	２Ａ	方形	0.25	0.18	0.06	N3/0暗灰色極細粒砂	
ＳＰ－18	２Ｂ	隅丸方	0.26	0.20	0.09	〃	
ＳＰ－19	２Ｂ	円形	0.30	0.30	0.13	〃	
ＳＰ－20	２Ｂ	楕円形	0.38	0.30	0.11	〃	
ＳＰ－21	２Ｂ	円形	0.28	0.28	0.12	〃	

２）遺構に伴わない出土遺物

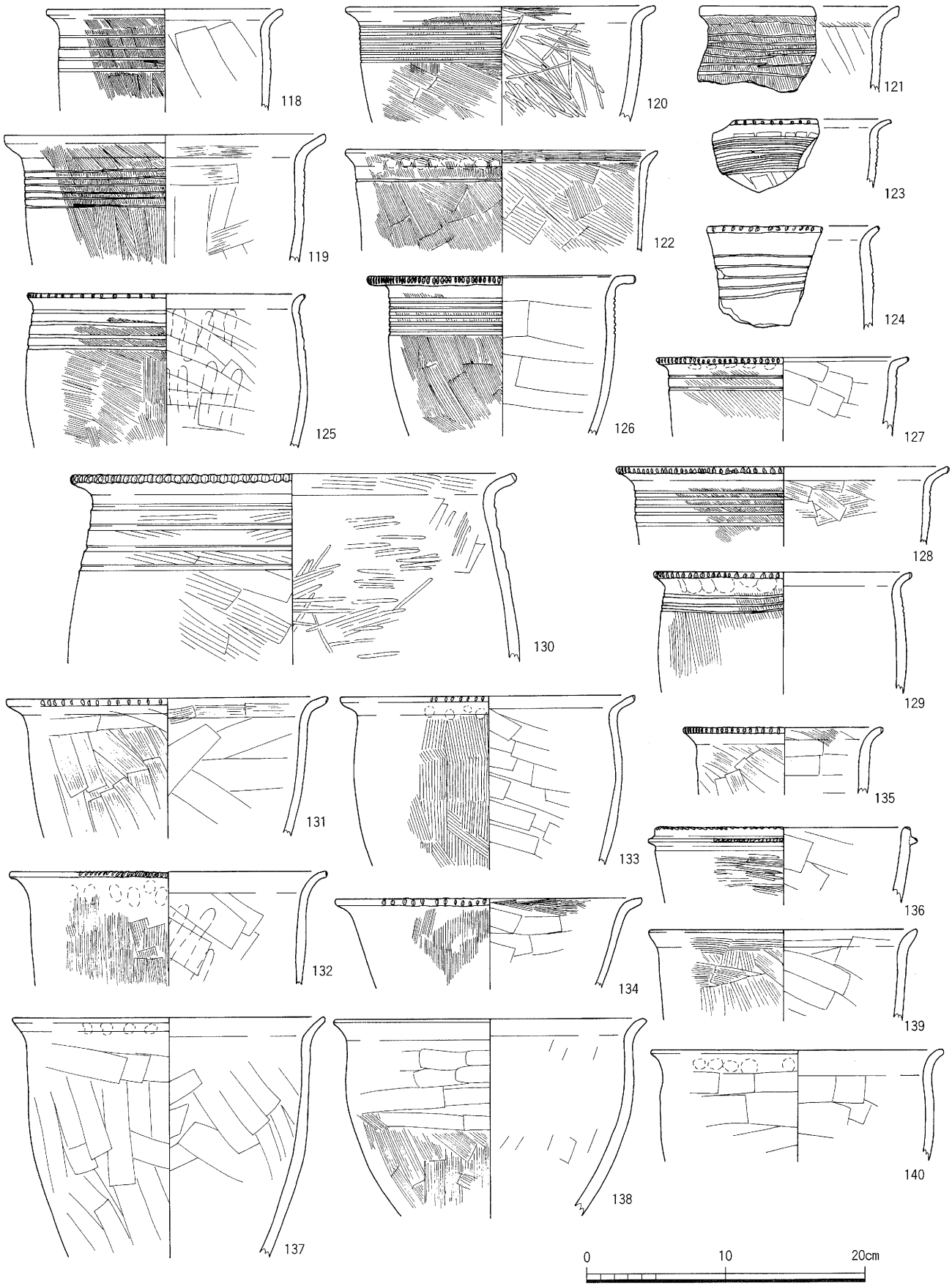
・第15層出土遺物

２・３Ａ～Ｃ地区を中心として弥生時代前期後半～中期前半（第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式）に比定される弥生土器類、石器類がコンテナに約６箱程度出土している。土器類では全容を知り得たものは無く、細片化したものが大半を占めた。土器の産地別では図化した55点（101～155）中４点の非生駒西麓産（いわゆる「低湿泥地産」を含む）以外は、閃緑岩質岩を起源とする角閃石を多量に含む生駒西麓産の土器胎土組成を持つものが51点で86.2％を占めている。石器類では図化した５点（156～160）以外では、破片・剥片を含めて15点程度しか出土しておらず土器量に比して微量である。

弥生土器は55点（101～155）を図化した。壷類は17点（101～117）で全て広口壷である。そのうち口縁部が残存する101～108の形態は、口縁部が頸部から大きく外反して開くもので、口縁端部は垂直方向ないしは外傾する幅広の面を形成している。復元口径が18.3cmを測る小形の105、23.6～24.8cmを測る中形の101・102・106・108、28.5～40.5cmを測る大形の103・104・107に分類される。施文を確認できたものは５点（102・105～107）で、口縁端部にヘラ描き沈線文を施文する102、口縁端部と頸部にヘラ描き沈線文を施文する105、頸部に多条の沈線文を施文する106～108がある。102は部付近に焼成前に穿たれた紐孔が認められる。器面調整は基本的にはハケを縦位に、



第23図　第15層出土遺物実測図－1



第24図　第15層出土遺物実測図－２

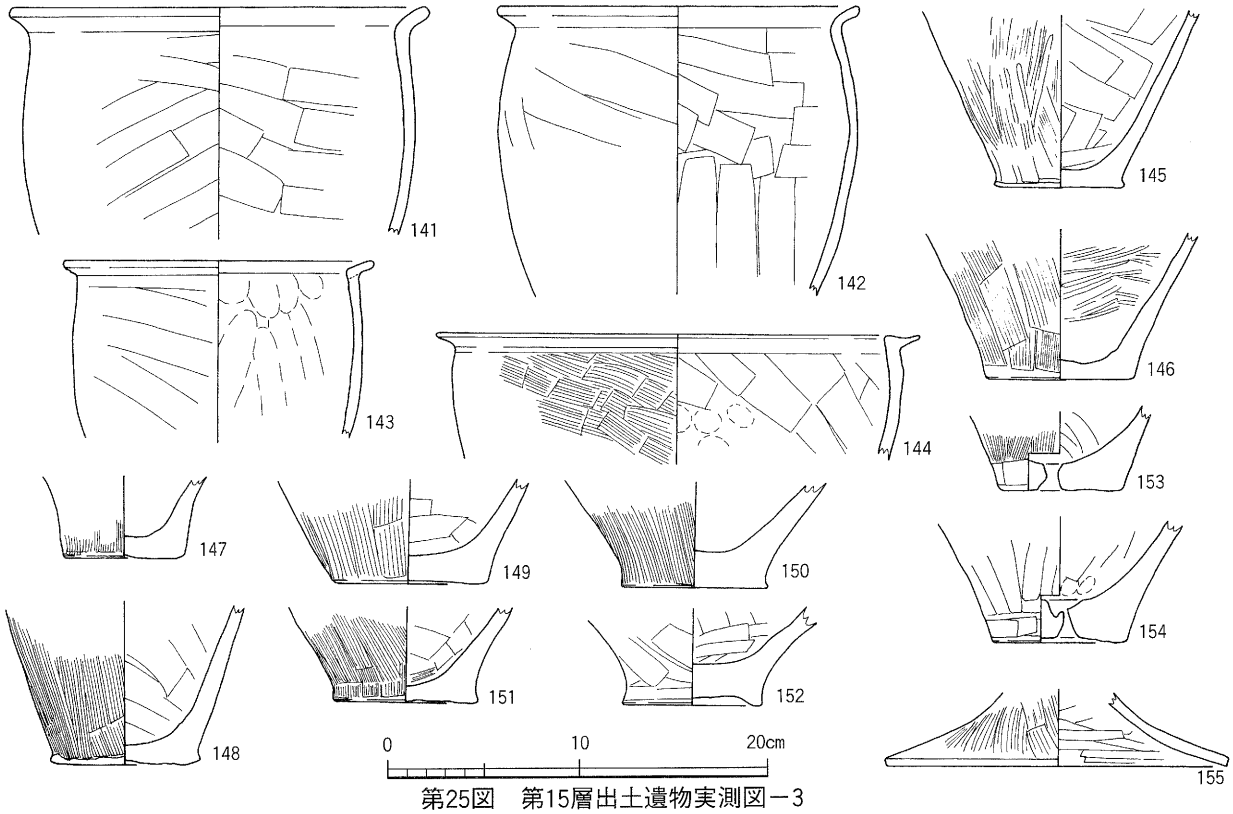
ヘラミガキを横位に使用しており、外面については一次調整としてハケ、二次調整としてヘラミガキを行うものと、一次調整のハケのみを行うものがある。色調は赤褐色～褐灰色。全て生駒西麓産である。105が１Ａ地区、101・106～108が２Ｂ地区、103・104が２Ｃ地区、102が３Ａ地区出土。109～112の４点は頸部ないしは頸部から体部上半の資料である。４点共に有文で頸部にヘラ描き沈線文を施文する109・111、上面に刻目を伴う貼り付け突帯を多条に巡らす112がある。大形品で体部が大きく張る110の体部上位には５条のヘラ描き沈線文が施文されている。色調は橙色～暗褐灰色。全て生駒西麓産。110が２Ａ地区、109・111が２Ｃ地区、112が３Ｂ地区出土。113は頸部中位以下が残存している。体部最大径20.5cm、底部径7.2cmを測る。ヘラ描きによる沈線文が体部中位に８本、頸部に３本以上が施文されている。色調は褐灰色。胎土は粗く0.5～２㎜の長石・角閃石を多量に含む。生駒西麓産。２Ｃ地区出土。

壷底部は４点（114～117）図化した。４点とも底部は完存しており、底径8.0～11.0cmを測る。底部の形状は突出ないしは小さく突出する114・115・117と突出しない116がある。色調は褐灰色～暗褐灰色。生駒西麓産である。114が２Ａ地区、115が２Ｂ地区、117が２Ｃ地区、116が３Ｂ地区出土。

甕は37点（118～154）を図化した。136を除けば倒鐘形の体部に如意形の口縁部が付く。器面調整は体部内外面ともに縦位ないしは左上がりのハケ、および板ナデが多用されており、ヘラミガキは部分的に認められる程度である。口縁部から体部が残存する資料の中で有文のものが19点（118～136）、無文のものが８点（137～144）である。

有文は４タイプ（①～④）に分類される。①が体部上半にヘラ描き沈線文を施文するもので５点（118～122）を数え122の１条を除けば４～８条の沈線文が施文されている。色調は褐灰色～暗褐灰色。全て生駒西麓産。120・121が２Ｃ地区、118・119が３Ａ地区、122が３Ｂ地区出土。②は口縁端部に刻目、体部上半にヘラ描き沈線文を施文するもので８点（123～130）がある。そのうちの130が大形品で復元口径31.5cmを測る。ヘラ描き沈線文は２～８条を数える。色調は130が灰白色、他は褐灰色～暗褐灰色。大形品の130が非生駒西麓産の他は生駒西麓産。123が２Ａ地区、124・127が２Ｂ地区、125・126、128～130が３Ｂ地区出土。③は口縁端部に刻目を施文するもので、５点（131～135）がある。色調は134が淡赤褐色、他は褐灰色～暗褐灰色。うち134が非生駒西麓産、他は生駒西麓産である。135が２Ａ地区、133が２Ｃ地区、131・132が３Ｂ地区出土。④は口縁端部に刻目と体部上位に上面に刻目を持つ突帯が付くもので136の１点のみがある。生駒西麓産である。３Ｂ地区出土。

無文のものは８点（137～144）である。口縁部の形態から２タイプ（⑤・⑥）に区別できる。⑤は如意形の口縁部を形成しているもので６点（139～142）を数える。色調は褐灰色～暗褐灰色。生駒西麓産。139が１Ｃ地区、141が２Ｂ地区、142が２Ｃ地区、140が３Ａ地区出土。⑥は口縁部が逆Ｌ字形を呈するもので２点（143・144）がある。共にいわゆる「朝鮮系無文土器」・「擬朝鮮系無文土器」に分類されるものである。143は体部上端に上面が内傾する面を持つ口縁部を貼り付けるもので、端部付近では粘土紐を内側に巻き込む形がとられている。体部の器面調整は外面がナデ、内面は指ナデを施す。色調は褐灰色。胎土中に２㎜以下の長石・チャートの他、スコープにより角閃石の含有を認める。生駒西麓産。３Ｂ地区出土。144は口縁部が水平方向に貼り付けられており、上面は僅かに窪んでいる。体部の器面調整は外面が左上がりのハケ、内面は左上が



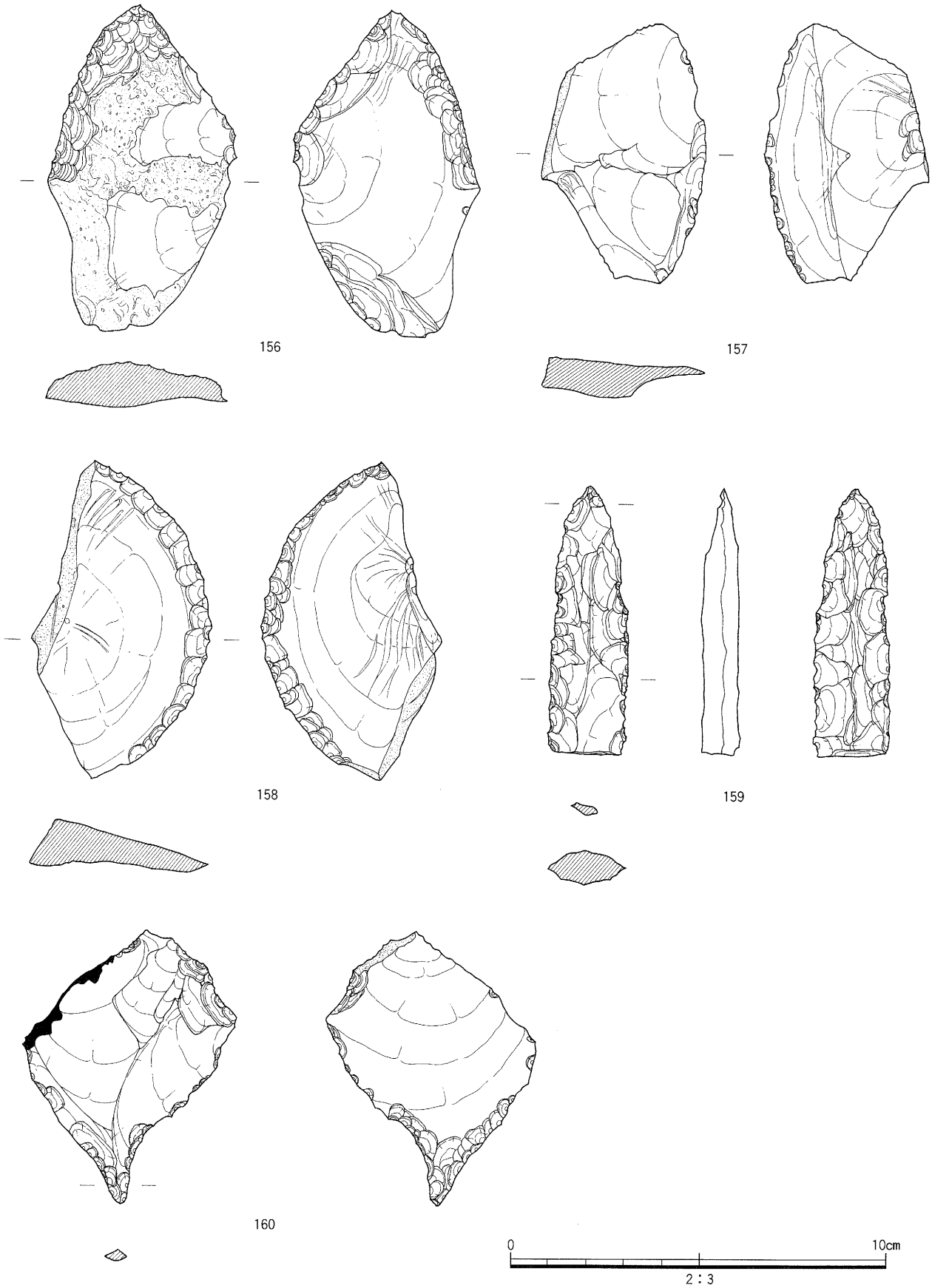
第25図　第15層出土遺物実測図－3

りの板ナデである。色調は褐灰色。胎土中に１㎜以下の長石が散見される他、スコープにより角閃石の含有を認める。生駒西麓産。３Ｂ地区出土。中河内地域での「朝鮮系無文土器」・「擬朝鮮系無文土器」の出土例としては、高井田遺跡（東大阪市）、森の宮遺跡（大阪市）、美園遺跡（八尾市）等での出土例が報ぜられており、いずれも、弥生時代前期後半（第Ⅰ様式新段階）～中期前半（第Ⅱ様式）のものとされており、本資料とも時期的に矛盾するものでない。

甕の底体部片は10点（145～154）図化した。そのうち底部に穿孔を穿つものが２点（153・154）である。145を除けば底部が完存しており、底径6.4～8.0cmを測る。底部形状では平底のもの145～150・153、上げ底のものが151・152・154である。底部に穿孔を持つ153・154は共に孔が焼成後に穿たれており、154については穿孔が貫通したものと未貫通のものがある。色調は淡赤褐色のものが150・151、その他が褐灰色～暗褐灰色である。前者が非生駒西麓産。後者が生駒西麓産である。145が２Ａ地区、147・148が２Ｂ地区、150・152・153は２Ｃ地区、146・149・151・154が３Ｂ地区出土。

蓋は１点（155）図化した。小破片のため全容は明確でないが残存部分の形状から甕蓋と推定される。復元口径18.0cmを測る。口縁部の内外面に煤の付着が認められる。色調は暗褐灰色。生駒西麓産。３Ｂ地区出土。

石器類は５点（156～160）図化した。全てサヌカイト製の石製品である。156は横長剥片を素材とした石刀状の石製品である。両側縁部の上半部分に両面から剥離を施すことで刃部を形成しているが、横長剥片の末端部の調整は打面側と比べ、細かな剥離で仕上げている。表面に大きく自然面を残す。１Ｂ地区出土。157・158は横長剥片を素材とした削器である。157は裏面のほぼ中央から抉るように剥離を施して刃部を形成している。158の刃部は両面からのやや大きめの剥離で形成されている。157は表面に158は両面に自然面を残す。157が１Ｂ地区、158が１・２Ｃ地区出土。159は石槍で、基端部が欠損している。両面ともに深形の細部調整により形作られる



第26図　第15層出土遺物実測図－4

が、裏面の調整の方が丁寧である。また両側縁末端部には微細な剥離による調整が若干認められる。１・２Ｃ地区出土。160は縦長剥片を素材とした石錐である。刃部は両側縁部からの細かい剥離を両面から施すことで形成している。また刃部先端は使用による磨耗が認められる。裏面に自然面を残す。３Ｂ地区出土。

参考文献

・佐原　真　1967「山城における弥生文化の成立－畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置－」『史林』50－５
・田辺昭三・佐原　真　1966「弥生文化の発展と地域性－近畿」『日本の考古学Ⅲ』
・中西靖人・西口陽一・宮野淳一・上西美佐子　1984『山賀（その３）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・上西美佐子　1984「付章　Ⅲ山賀遺跡（その３）出土の弥生土器について」『山賀（その３）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
・寺沢　薫・森井貞雄　1989「２各地域の様式編年　１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
・福岡澄男　1991「近畿地方における朝鮮無文土器問題」『韓式系土器研究Ⅲ』韓式系土器研究会
・國分政子　1991「大阪府美園遺跡の「大陸系土器」の再検討」『韓式系土器研究Ⅲ』韓式系土器研究会
・田中清美　1991「森の宮遺跡出土の弥生前期の特異な甕」『韓式系土器研究Ⅲ』韓式系土器研究会

第3章　まとめ

今回の調査では、弥生時代前期新段階～中期前半の居住域を構成する遺構および遺物を検出した。八尾市域内の山賀遺跡では、近畿自動車道建設に伴う発掘調査のなかで、萱振町７丁目を中心に、昭和55～57年に行なわれた山賀遺跡（その３）の発掘調査において、弥生時代前期中段階～新段階に比定される集落が検出されている。さらに、昭和63年度には、山賀遺跡（その３）の調査地から東100m地点（新家町５丁目14－１）で、八尾市教育委員会が行なった倉庫建設に伴う発掘調査（62－543）で、弥生時代前期新段階の遺構・遺物が検出されている。今回の調査地点は、八尾市教育委員会調査地から約300m東に位置していることから、山賀遺跡の集落範囲が東方へ大きく広がっていたことが確認された。

一方、北に第２寝屋川を挟んで隣接する東大阪市域の山賀遺跡内においては、発見の契機となった昭和46年の楠根川改修工事、昭和47年の大阪府教育委員会による楠根川と第２寝屋川の合流地点の調査、昭和53・55年の東大阪市遺跡保護調査会による若江中学校敷地内の調査、昭和54・55年に行なわれた東大阪市遺跡保護調査会による公共下水道工事に伴う調査で東大阪市若江南５丁目を中心に弥生時代前期中段階～新段階の集落が確認されている。

今回の調査成果と既往調査の成果を総合すれば、現時点で推定される山賀遺跡の弥生時代前期の集落範囲が東西方向においては約600m以上、南北方向においては約500m以上を測ることが確認された。ただ、これらの遺構群が同じ領域を共有する一元的な集落に伴うものか、分村的な性格を有するものかといった不確定な要素が内在しており、今後の調査による資料増加を待って、これらの諸問題を明らかにする必要があろう。

参考文献

・中西靖人・西口陽一・宮野淳一・上西美佐子　1984『山賀（その３）』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

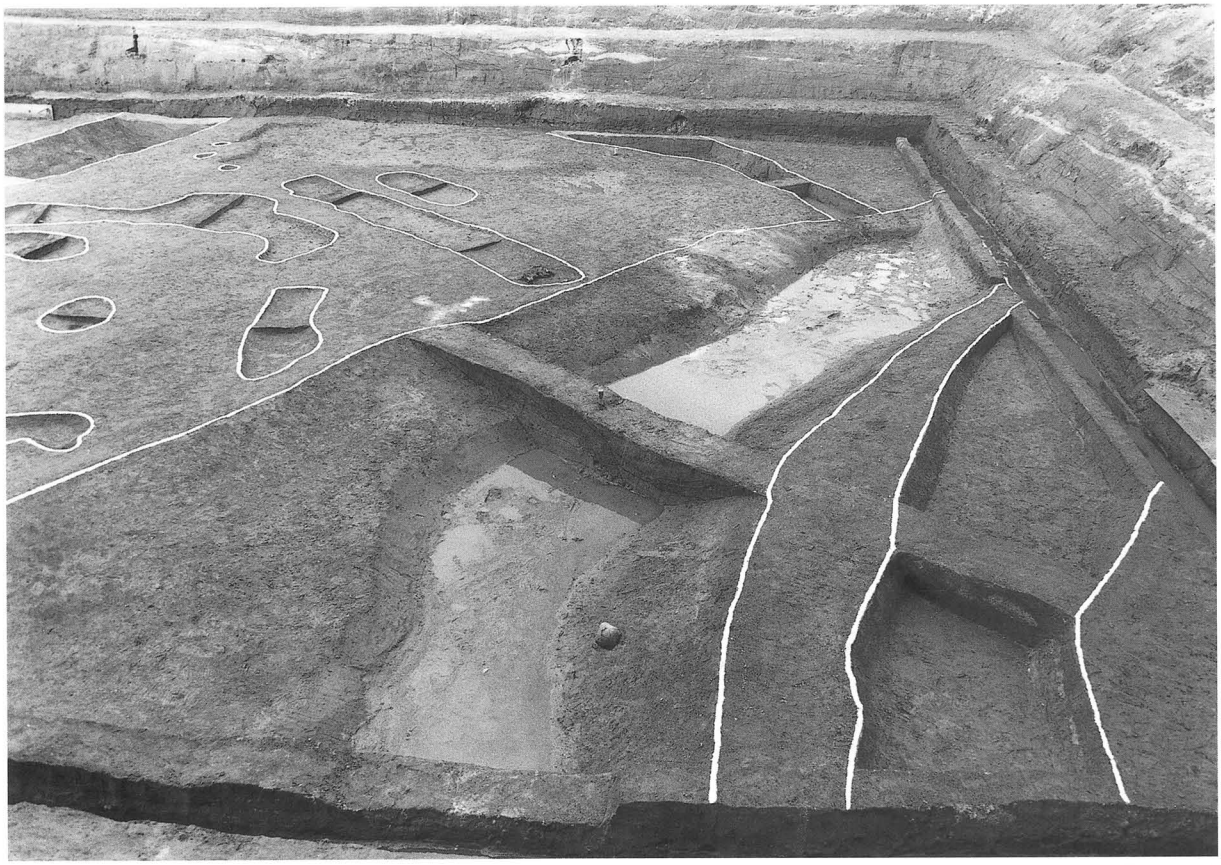
・近江俊秀　1989「６．山賀遺跡（62-543）の調査」『八尾市文化財報告19』八尾市教育委員会

・芋本隆裕　1981「山賀遺跡発掘調査概報－昭和54・55年度－」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会

・阿部嗣治他　1981「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会

図　　版

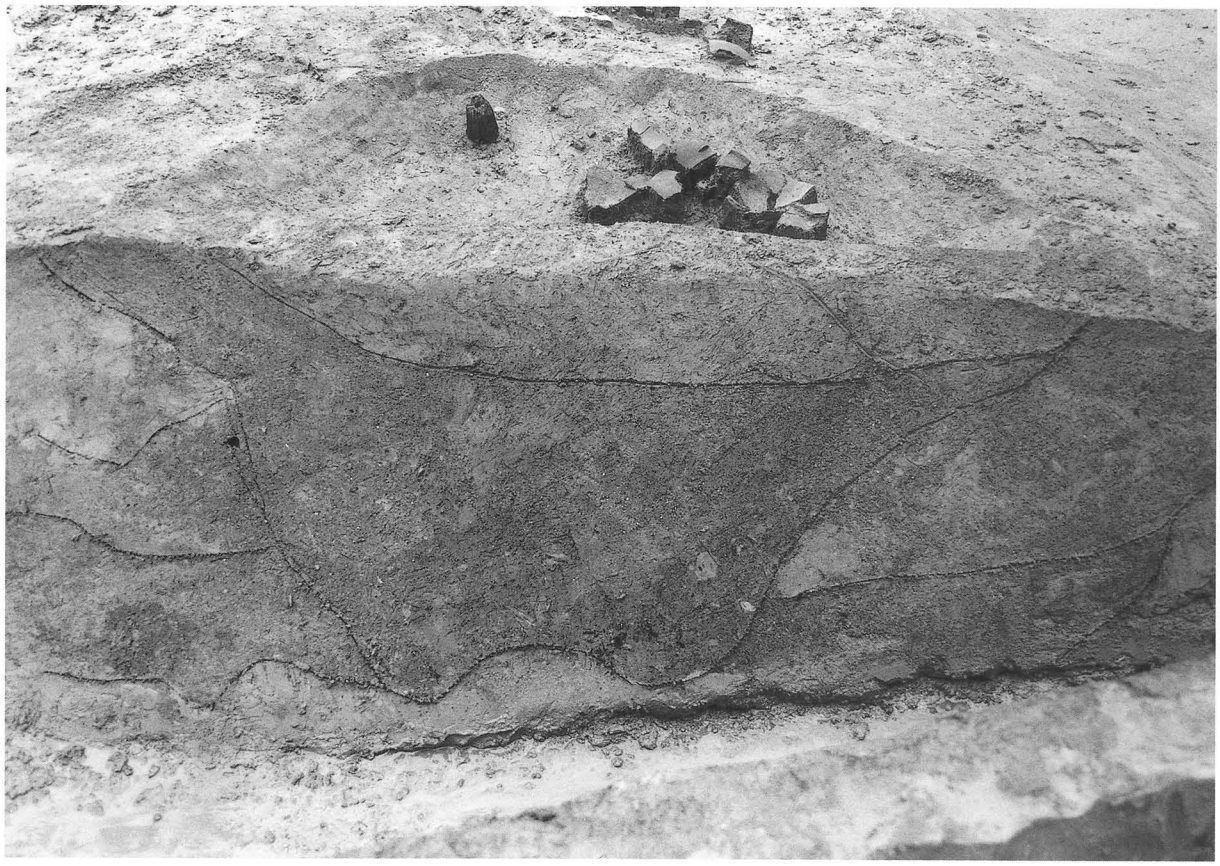
調査区全景（西から）



調査区東部遺構検出状況（南から）

図版二

ＳＫ－１検出状況（東から）



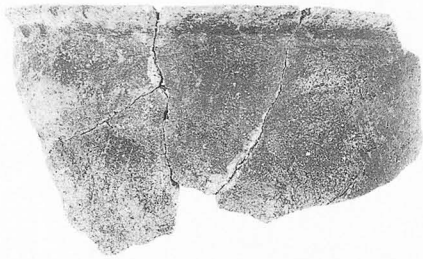
同上　断面（西から）

ＳＤ－２断面（北から）

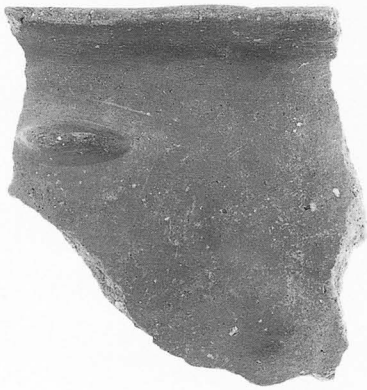
ＳＤ－４断面（南から）

図版四

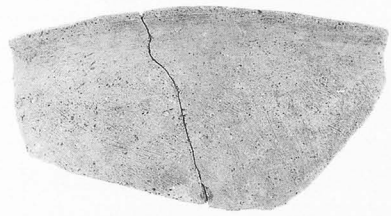
1


5

6


7

10

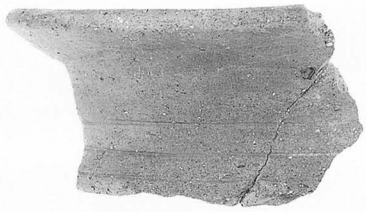

11

12

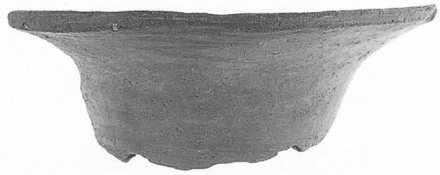
13

15

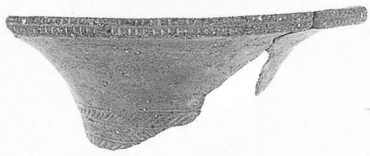
ＳＫ－１（１・５・６・７）、ＳＫ－５（10～12）、ＳＫ－７（13）、
ＳＫ－８（15）出土遺物



26



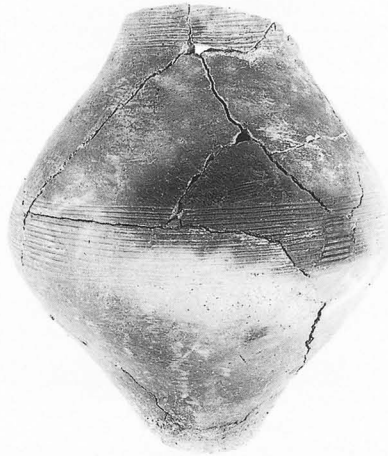
30



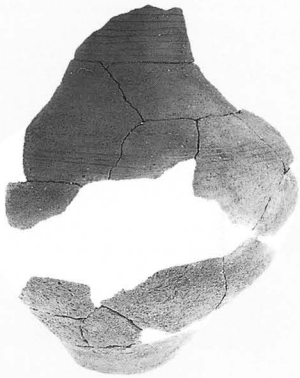
29

34

35



32



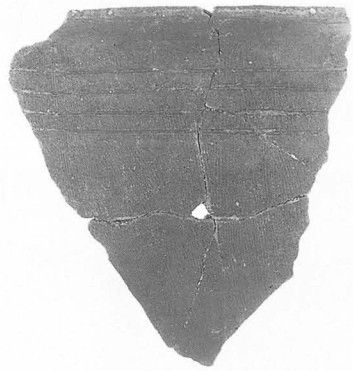
31

33

36

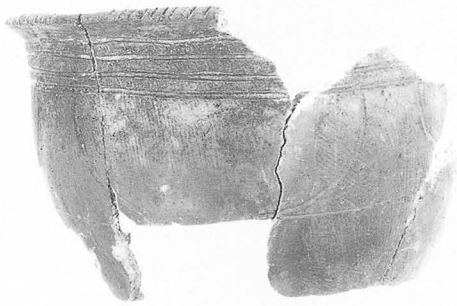
ＳＤ－２（26・29～36）出土遺物

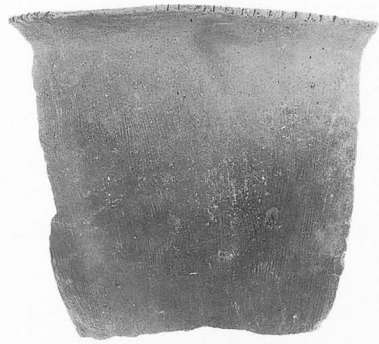
42


50

44

51


45

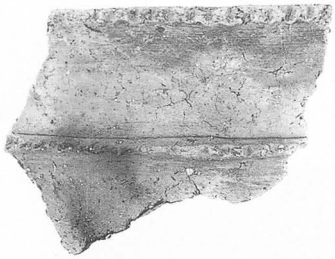

52

37

46

40

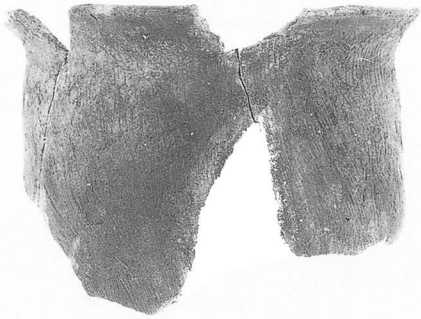
ＳＤ－２（37・40・42・44～46・50～52）出土遺物



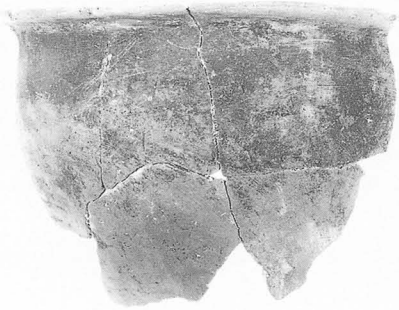
54

53

56

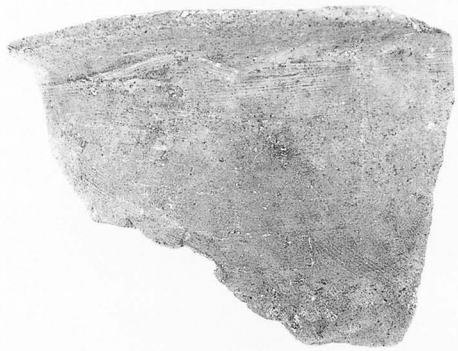


59



67

61



65

60

62

ＳＤ－２（53・54・56・59～62・65・67）出土遺物

68

69

70

71

72

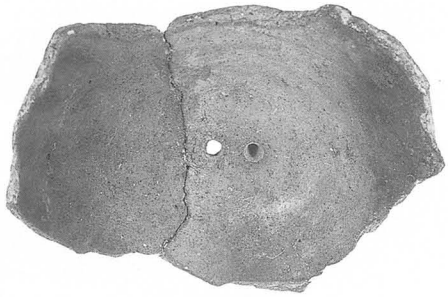
73

75

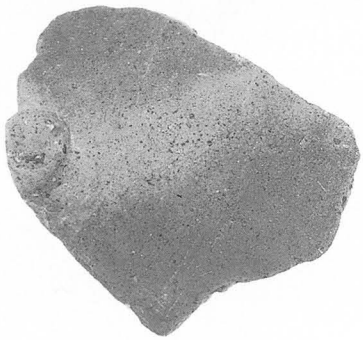
77

78

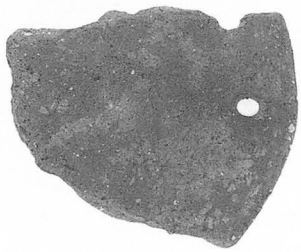
ＳＤ－２（68～73・75・77・78）出土遺物



79



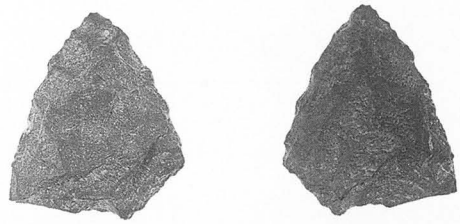
82



83

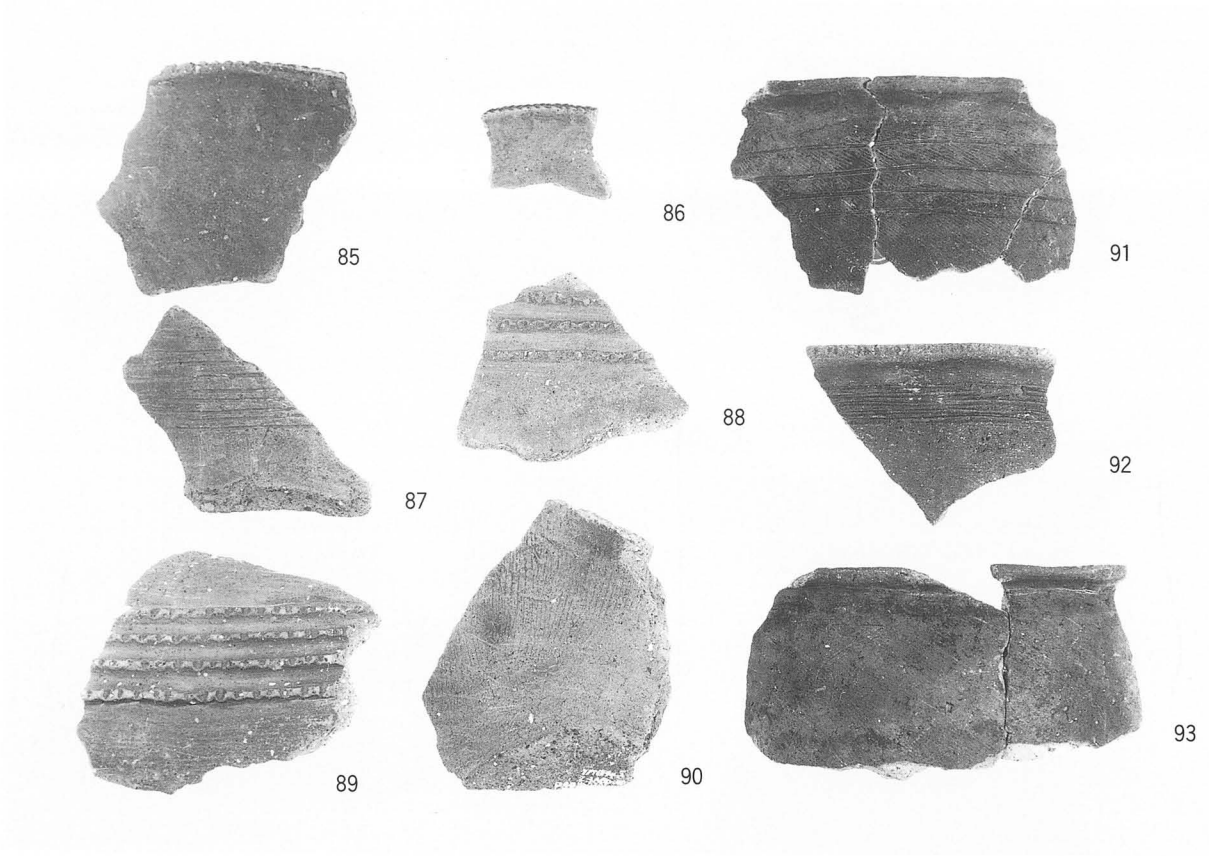
80

81

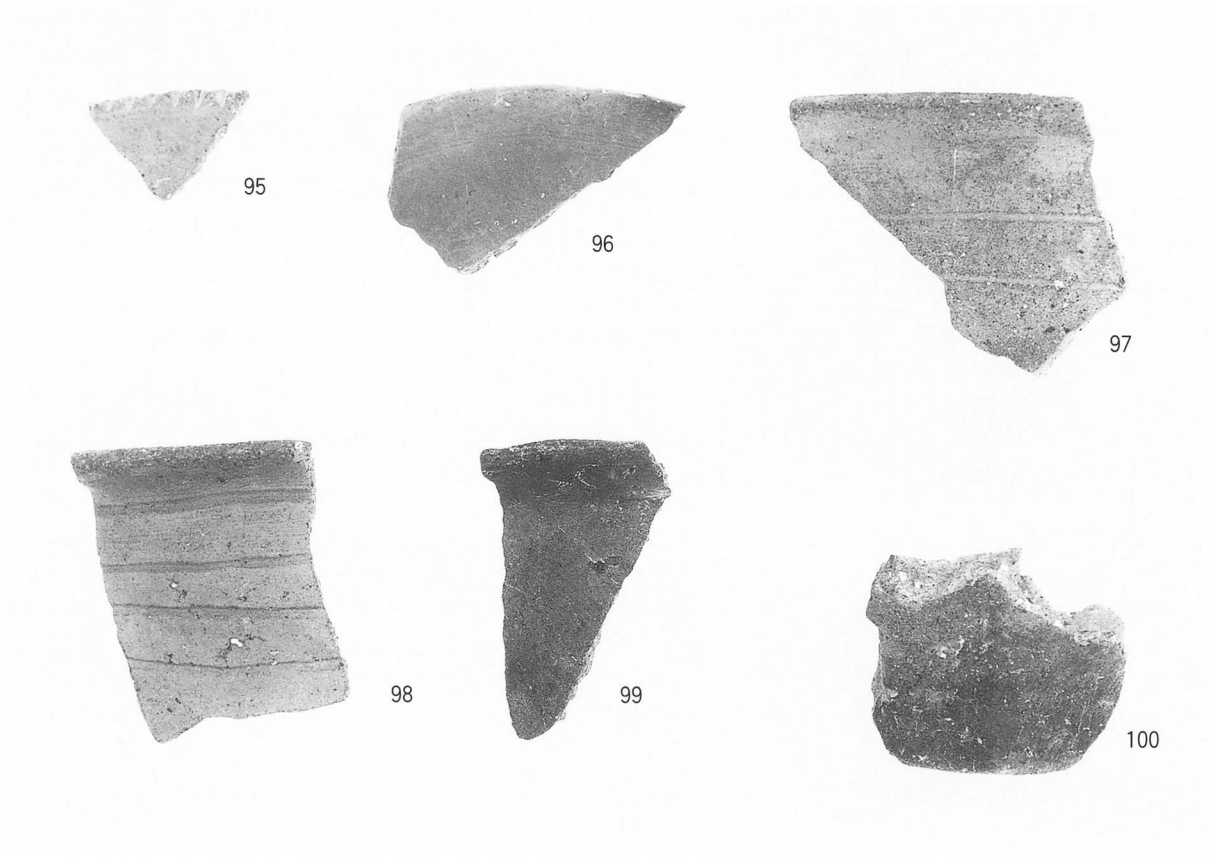


84

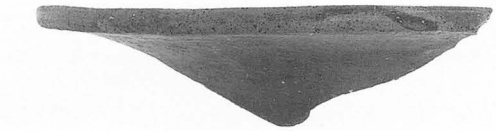
ＳＤ－２（79～84）出土遺物

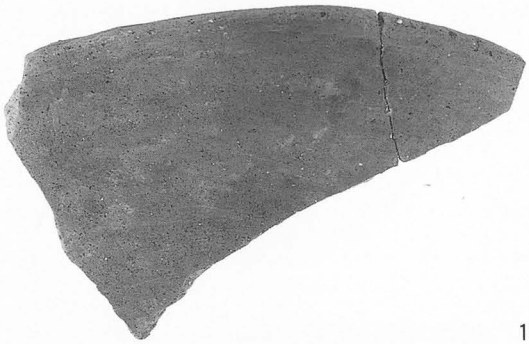


ＳＤ－３（85～93）出土遺物



ＳＤ－５（95～100）出土遺物


103

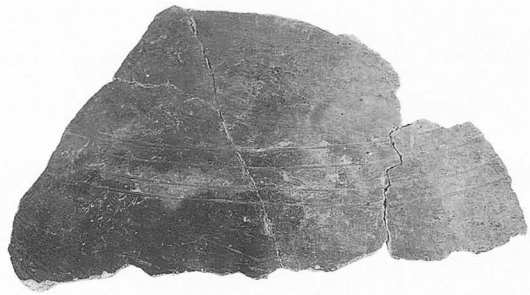

104

106

107

108

109

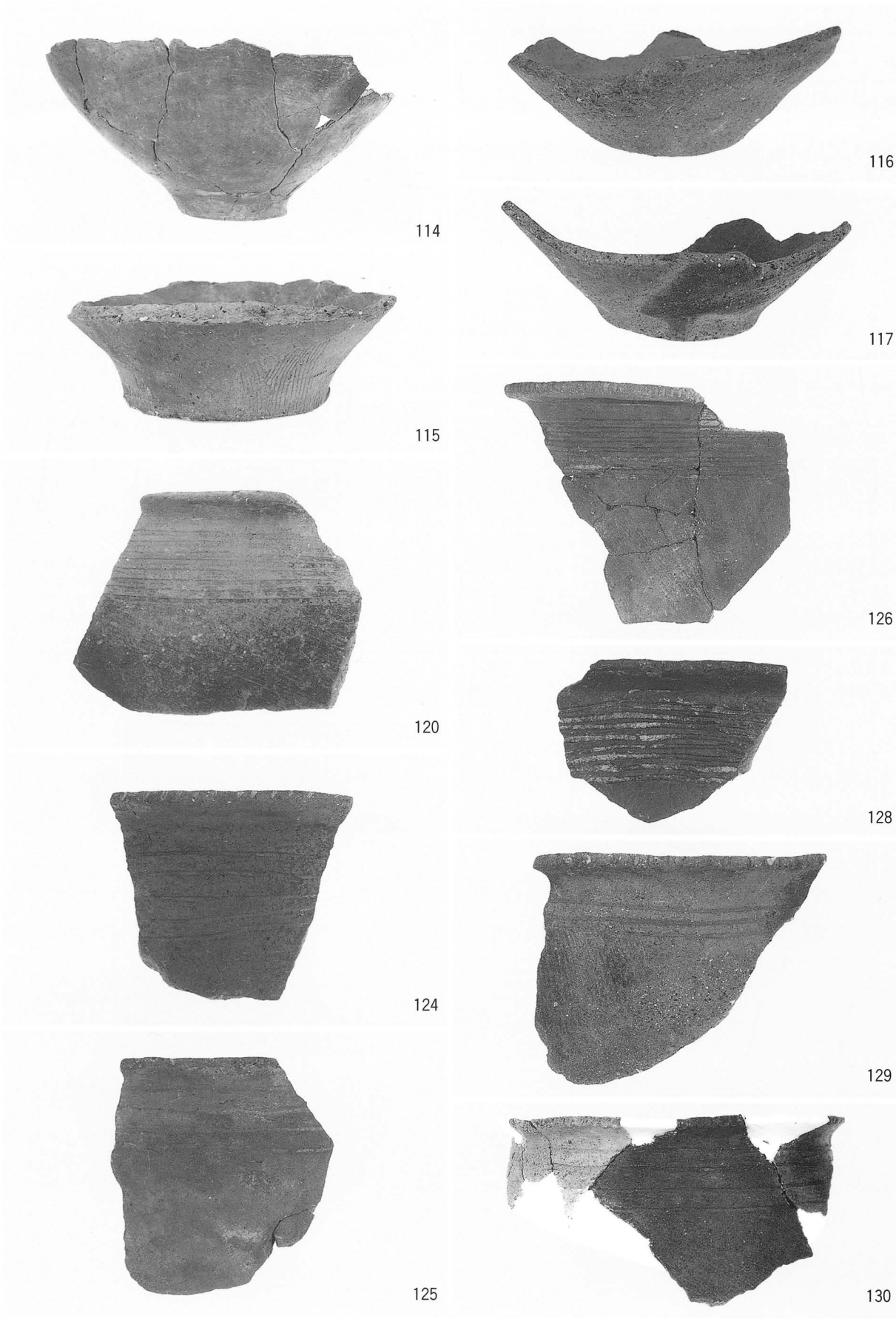

110

111

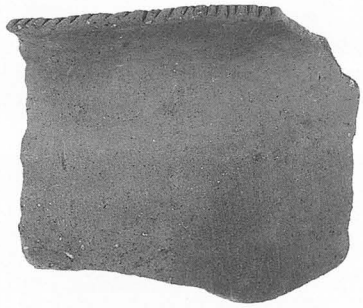
112

113

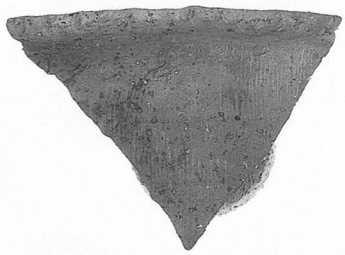
第15層（103・104・106～113）出土遺物



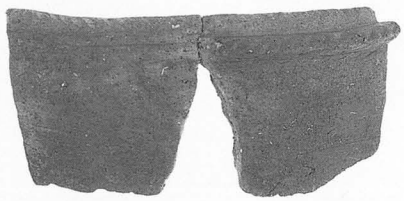
第15層（114～117・120・124～126・128～130）出土遺物



132

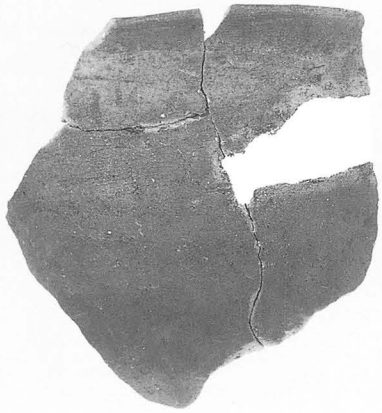


134



136

137



138

142

143

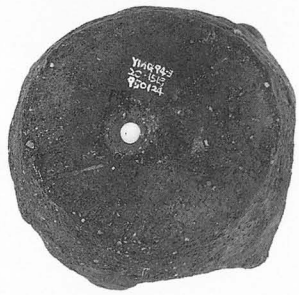
144

146

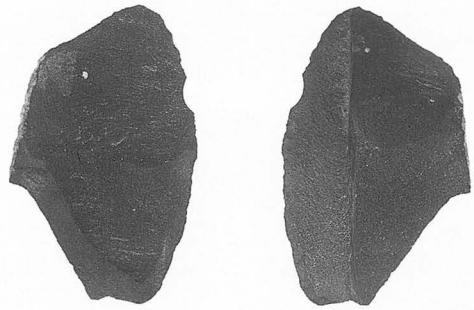
150

第15層（132・134・136～138・142～144・146・150）出土遺物

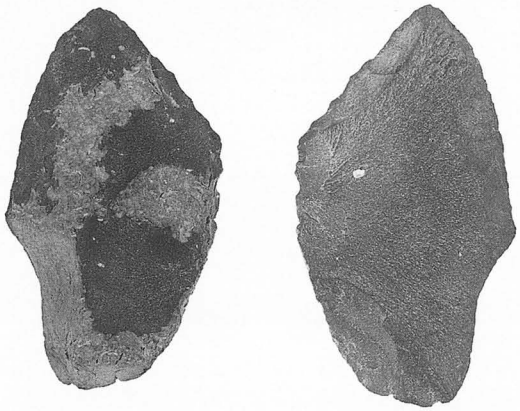
154



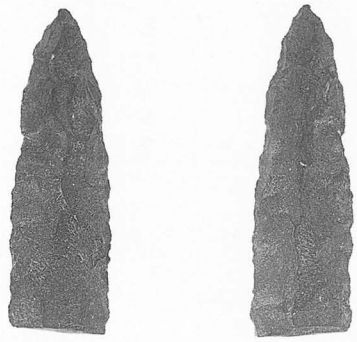
153



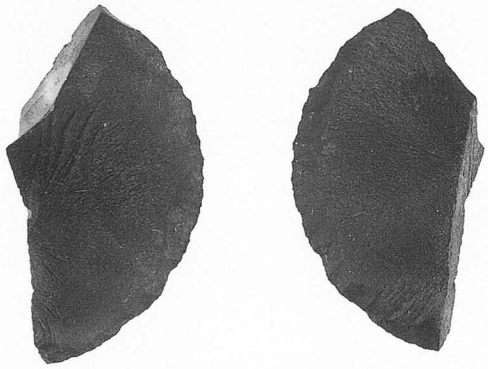
157



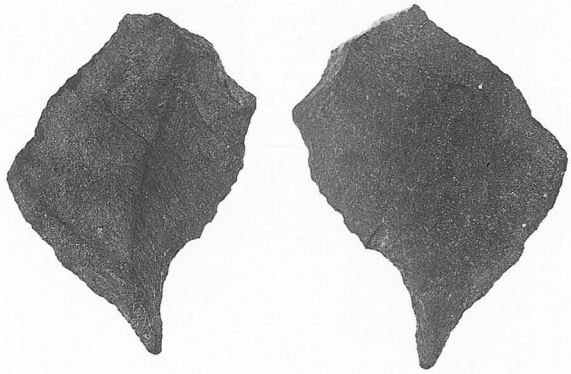
156



159



158



160

第15層（153・154・156～160）出土遺物

II　跡部遺跡第23次調査（ＡＴ96－23）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市春日町４丁目４番で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第23次調査（ＡＴ96－23）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋580－６号　平成９年３月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が浦上市太郎氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年２月21日～３月31日（実働24日）にかけて原田昌則が担当した。調査面積は約308㎡である。現地調査においては、垣内洋平・岸田靖子・北原清子・中前和代が参加した。

1．整理業務は、現地調査終了後、随時実施し平成16年９月30日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤静江・岩沢玲子・加藤邦枝・竹田貴子・田島宣子・永井律子・中村百合・村井俊子・村田知子・吉川一栄・若林久美子、図面トレース－北原、図面レイアウト・遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。
亀井　聡((財)大阪府文化財センター)、杉本厚典((財)大阪市文化財協会)、高松建設(株)、(株)アート

1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

本　文　目　次

第１章　はじめに……29
第２章　調査概要……30
　第１節 調査の方法と経過……30
　第２節 基本層序……31
　第３節 検出遺構と出土遺物……32
第３章　まとめ……59

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図 …… 29
第２図　調査区設定図 …… 30
第３図　基本層序模式図 …… 31
第４図　ＳＥ－１平断面図 …… 32
第５図　検出遺構平面図 …… 33
第６図　ＳＥ－１出土遺物実測図 …… 34
第７図　ＳＫ－１出土遺物実測図 …… 35
第８図　ＳＫ－２平断面図 …… 35
第９図　ＳＫ－２出土遺物実測図－１ …… 36
第10図　ＳＫ－２出土遺物実測図－２ …… 37
第11図　ＳＫ－３平断面図 …… 39
第12図　ＳＫ－４平断面図 …… 39
第13図　ＳＫ－３出土遺物実測図 …… 39
第14図　ＳＫ－５平断面図 …… 40
第15図　ＳＫ－６平断面図 …… 40
第16図　ＳＫ－４、ＳＫ－５、ＳＫ－６、ＳＫ－７出土遺物実測図 …… 41
第17図　ＳＫ－７平断面図 …… 41
第18図　ＳＫ－８、ＳＫ－９平断面図 …… 42
第19図　ＳＫ－８出土遺物実測図 …… 42
第20図　ＳＫ－９出土遺物実測図 …… 43
第21図　ＳＫ－11、ＳＫ－12平断面図 …… 44
第22図　ＳＫ－12出土遺物実測図 …… 44
第23図　ＳＫ－13平断面図 …… 45
第24図　ＳＫ－13出土遺物実測図 …… 46
第25図　ＳＷ－１出土遺物実測図 …… 47
第26図　ＳＤ－１平断面図 …… 48
第27図　ＳＤ－１、ＳＤ－２出土遺物実測図 …… 48
第28図　ＳＤ－３（５区）平断面図 …… 49
第29図　ＳＤ－３出土遺物実測図－１ …… 50
第30図　ＳＤ－３出土遺物実測図－２ …… 51
第31図　ＳＤ－３出土遺物実測図－３ …… 54
第32図　ＳＤ－９、ＳＤ－10平断面図 …… 55
第33図　ＳＤ－４、ＳＤ－10出土遺物実測図 …… 55
第34図　ＳＰ－８平断面図 …… 56
第35図　第９層出土遺物実測図 …… 57

図　版　目　次

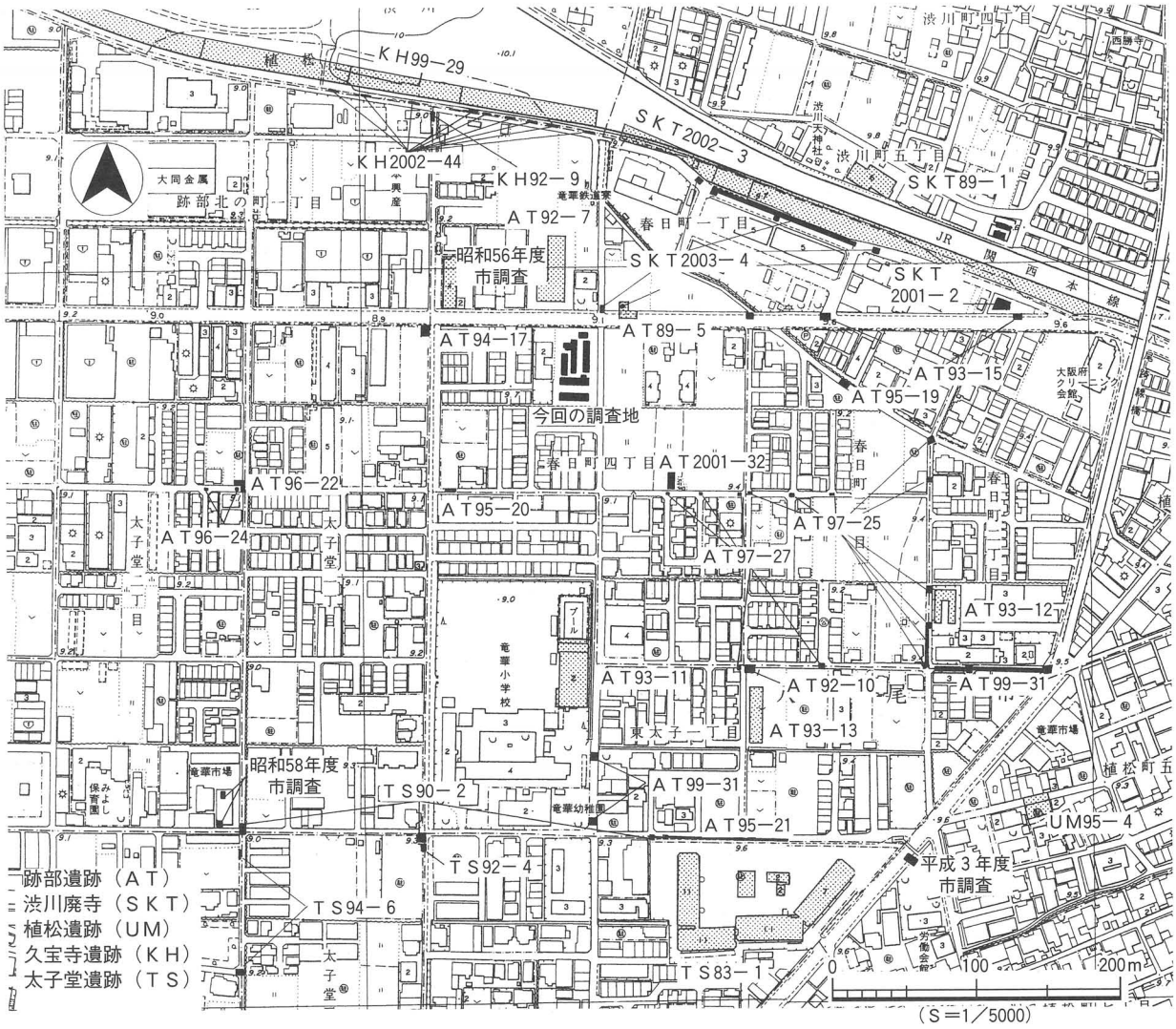
図版一　１区全景
　　１区ＳＫ－１、ＳＤ－２検出状況
図版二　１区ＳＤ－１検出状況
　　１区ＳＫ－２検出状況
図版三　２区全景
　　２区ＳＤ－５検出状況
図版四　３区全景
　　３区ＳＫ－５検出状況
図版五　３区ＳＫ－６検出状況
　　３区ＳＫ－７検出状況
図版六　４区全景
　　４区ＳＫ－８検出状況
図版七　５区全景
　　５区ＳＫ－11・12、ＳＰ－６・７
　　検出状況
図版八　５区ＳＫ－12検出状況
　　５区ＳＫ－13検出状況
図版九　５区ＳＤ－３検出状況
　　５区ＳＤ－３銅鏃出土状況
図版一〇　５区ＳＫ－13、ＳＥ－１検出状況
　　５区ＳＥ－１検出状況
図版一一　５区ＳＰ－８検出状況
　　同　上　断面
図版一二　６区全景
　　１区調査風景
図版一三　ＳＥ－１出土遺物
図版一四　ＳＥ－１、ＳＫ－１、ＳＫ－２
　　出土遺物
図版一五　ＳＫ－２出土遺物
図版一六　ＳＫ－２出土遺物
図版一七　ＳＫ－２出土遺物
図版一八　ＳＫ－３、ＳＫ－４、ＳＫ－６、
　　ＳＫ－７出土遺物
図版一九　ＳＫ－８、ＳＫ－９、ＳＫ－12
　　出土遺物
図版二〇　ＳＫ－13、ＳＷ－１出土遺物
図版二一　ＳＤ－３出土遺物
図版二二　ＳＤ－３出土遺物
図版二三　ＳＤ－３出土遺物
図版二四　ＳＤ－３、ＳＤ－10、第９層
　　出土遺物
図版二五　第９層出土遺物
図版二六　第９層出土遺物

第１章　はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町１～４丁目、跡部北の町１～３丁目、跡部南の町１・２丁目、春日町１～４丁目、太子堂１・２丁目、東太子１丁目、安中町３丁目付近の東西1.4km、南北0.5～１kmに展開する弥生時代前期～鎌倉時代の複合遺跡である。

地理的には長瀬川左岸の三角州状の微高地に位置し、現地表面の海抜高はT.P.＋9.0～9.9mを測る。当遺跡の周辺には、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡が位置している。

跡部遺跡は、昭和53年に八尾市教育委員会が春日町１丁目地内の旧国鉄職員寮建設工事の際に弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦を検出したことにより遺跡として認知された。その後昭和56年以降、八尾市教育委員会、当調査研究会により数十次におよぶ発掘調査ならびに遺構確認調査が行なわれており、弥生時代前期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも、遺跡範囲東部の春日町２～４丁目で行なわれた第12次調査（ＡＴ93－12）、第27次調査（ＡＴ



第１図　調査地周辺図

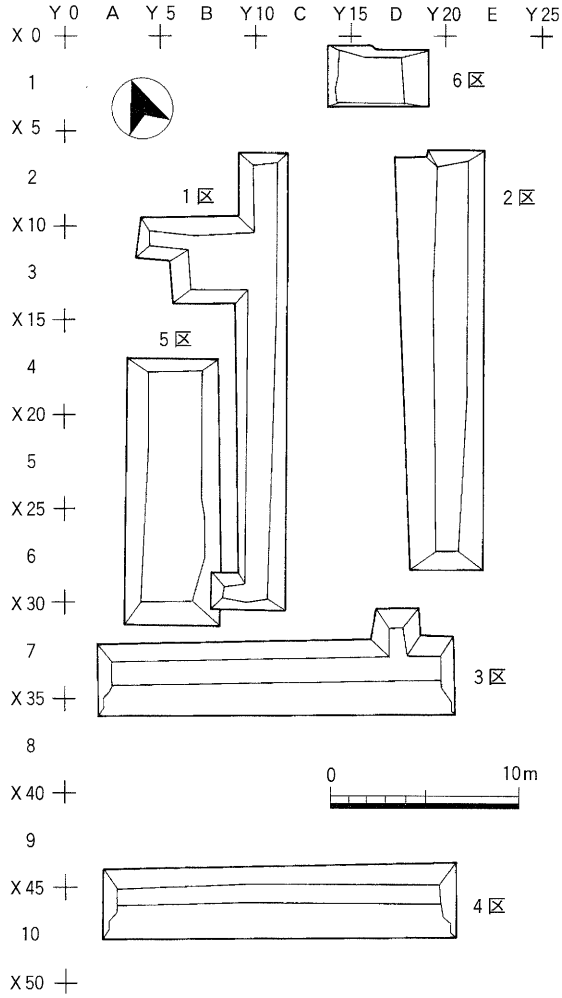
97－27）を中心とする一帯では、弥生時代前期新段階に成立し、弥生時代後期にかけて継続して集落が営まれたれており、弥生時代中期段階には、多条の環濠を有し第５次調査（ＡＴ89－５）出土の「跡部銅鐸」が示すように、銅鐸の保有が可能な構成員を具備した大規模な拠点集落を形成していたことが看取される。続く古墳時代初頭（庄内式期）～古墳時代前期（布留式期）においても遺跡範囲のほぼ全域にわたって居城域を中心とする遺構が検出されており、北側の久宝寺遺跡内で検出されている同時期の生産域を含めて集落範囲が広範囲におよぶことが想定される。

今回の調査地である八尾市春日町４丁目付近一帯は跡部遺跡範囲の東部に位置し、平成元年に春日町１丁目45－１で行われた公共下水道工事に伴う第５次調査（ＡＴ89－５）では、弥生時代後期末以前に埋納された銅鐸埋納土坑が検出され、「跡部銅鐸」として学史にその名を残す結果となった。今回の調査地である春日町４丁目４番地は、第５次調査地（ＡＴ89－５）とは道路を挟んで南西部に隣接する関係から、銅鐸埋納土坑の集落内における位置関係や埋納地点の地形的環境を探る上でも重要な地点と考えられた。

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅の建設に先立って実施したもので、建物の基礎構築部分に合わせて６箇所（１区～６区）の調査区を設定した。１区（2.5×24ｍ、一部拡張部分あり）・２区（2.5×22ｍ）・５区（５×15ｍ）が南北方向、３区（18×２ｍ、一部拡張部分あり）・４区（18×２ｍ）が東西方向に伸びるトレンチ調査、６区がグリッド（2.5×2.5ｍ）調査で総調査面積は308m²を測る。ただし、１区調査時点で法面の崩壊が相次いだ為、以後の調査区については、安全面に考慮して上面幅を拡大し法面の保全に配慮する調査方法をとった。掘削に際しては、現地表下1.3～1.5ｍ前後までを機械掘削した後、以下0.3～0.4ｍについては、人力掘削を行ない遺構・遺物の検出に努めた。



第２図　調査区設定図

調査地の地区割については、調査

地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西25m、南北50mにわたって設定した。一区画の単位は５m四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｅ）、南北方向は算用数字（北から１～10）で示し、地区の表示は１Ａ地区～10Ｅ地区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ50）・南北線（Ｙ０～Ｙ25）の交点の数値を使用した。調査では１区→２区→４区→３区→５区→６区の順で調査を実施した。

調査の結果、各地区の現地表下1.6～1.8m（T.P.＋7.3～7.0m）付近に存在する第10層上面で、弥生時代後期末、古墳時代初頭前半（庄内式古相）～古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される井戸１基（ＳＥ－１）、土坑14基（ＳＫ－１～ＳＫ－14）、溝10条（ＳＤ－１～ＳＤ－10）、小穴10個（ＳＰ－１～ＳＰ－10）を検出した。遺物は遺構内および包含層から弥生時代前期～平安時代に比定される土器類・木製品・金属製品などがコンテナ25箱程度出土している。

第２節　基本層序

第０層　客土と現作土。層厚20～40cm。上面の標高はT.P.＋8.8m前後。

第１層　10BG4/1暗青灰色砂質シルト。旧作土。層厚10～20cm。

第２層　10BG7/1明青灰色砂質シルト。床土。層厚10～20cm。

第３層　5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト。層厚10～20cm。

第４層　2.5Y7/2灰黄色中粒砂混じり砂質シルト。層厚15～20cm。酸化鉄・マンガンが斑点状に付着。平安時代の遺物を含む。

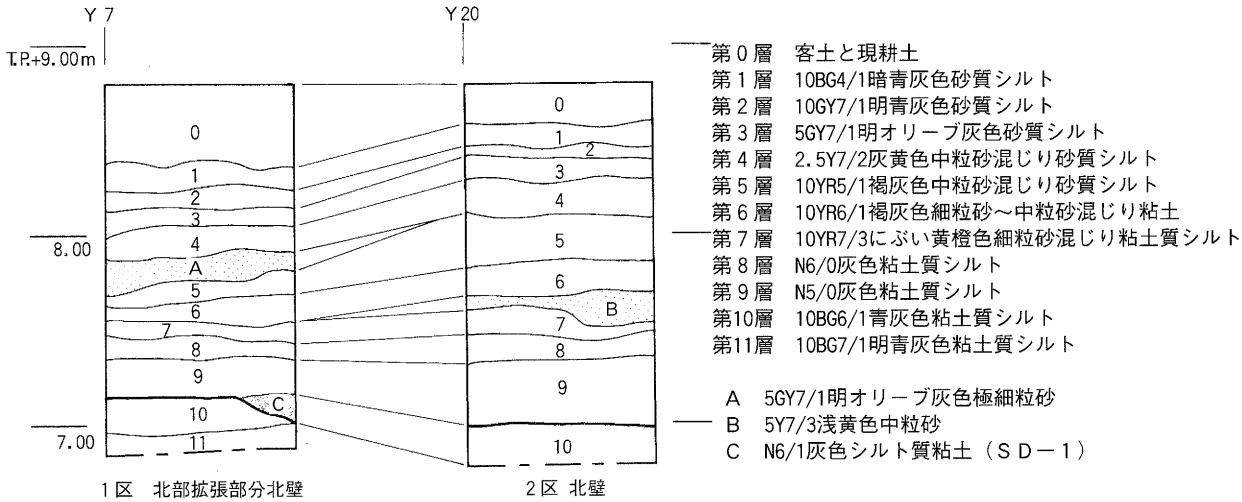
第５層　10YR5/1褐灰色中粒砂混じり砂質シルト。層厚15～30cm。マンガンが斑点状に付着。

第６層　10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂混じり粘土。層厚10～20cm。

第７層　10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂混じり粘土質シルト。層厚15cm前後。マンガンが斑点状に付着。１区および５区のみで確認。

第８層　N6/0 灰色粘土質シルト。層厚10～20cm。古墳時代前期前半（布留式古相）の遺構ベース面。

第９層　N5/0 灰色粘土質シルト。層厚10～40cm。弥生時代後期～古墳時代前期前半（布留式



第３図　基本層序模式図

古相）の遺物を含む。古墳時代初頭前半（庄内式古相）～古墳時代初頭後半（庄内式新相）の遺構ベース面。

第10層　10BG6/1青灰色粘土質シルト。層厚20cm前後。弥生時代後期の遺構ベース面。

第11層　10BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚15cm前後。

第３節　検出遺構と出土遺物

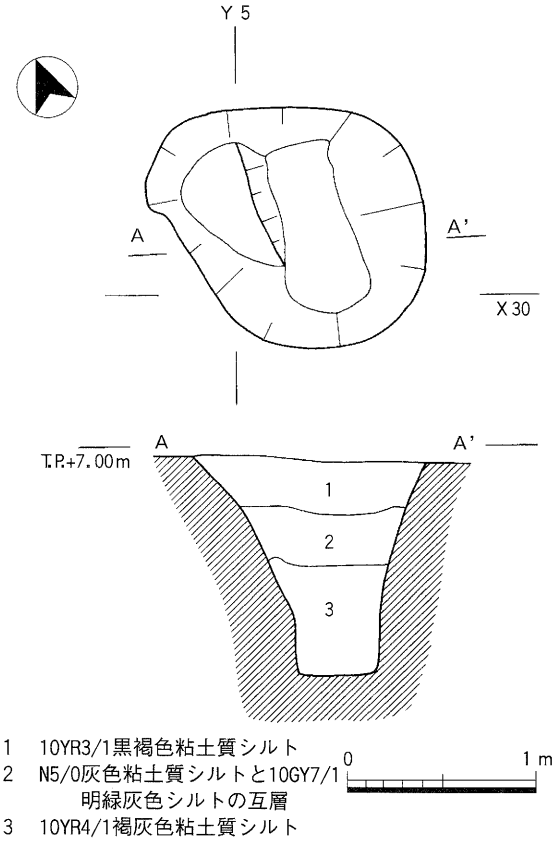
調査においては第10層上面（T.P.＋7.3～7.0m）で、弥生時代後期末、古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）、古墳時代前期前半（布留式古相）の３時期の遺構を捉えたが、第10層を構築面とするのは、弥生時代後期末の遺構群で、古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）、については第９層、古墳時代前期前半（布留式古相）については第８層が本来の構築面であったと推定される。そのうち帰属時期を確定し得たものは、弥生時代後期末では、１区・５区のＳＤ－３、４区のＳＫ－８・ＳＫ－９、６区のＳＫ－14、古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）では１区のＳＫ－１・ＳＫ－２・ＳＷ－１・ＳＤ－１・ＳＤ－２、２区のＳＤ－４、３区のＳＫ－５～ＳＫ－７、５区のＳＫ－12・ＳＫ－13、古墳時代前期前半（布留式古相）では１区のＳＫ－３、２区のＳＫ－４、４区のＳＤ－10、５区のＳＥ－１である。以下、遺構毎に概説する。

井戸（ＳＥ）

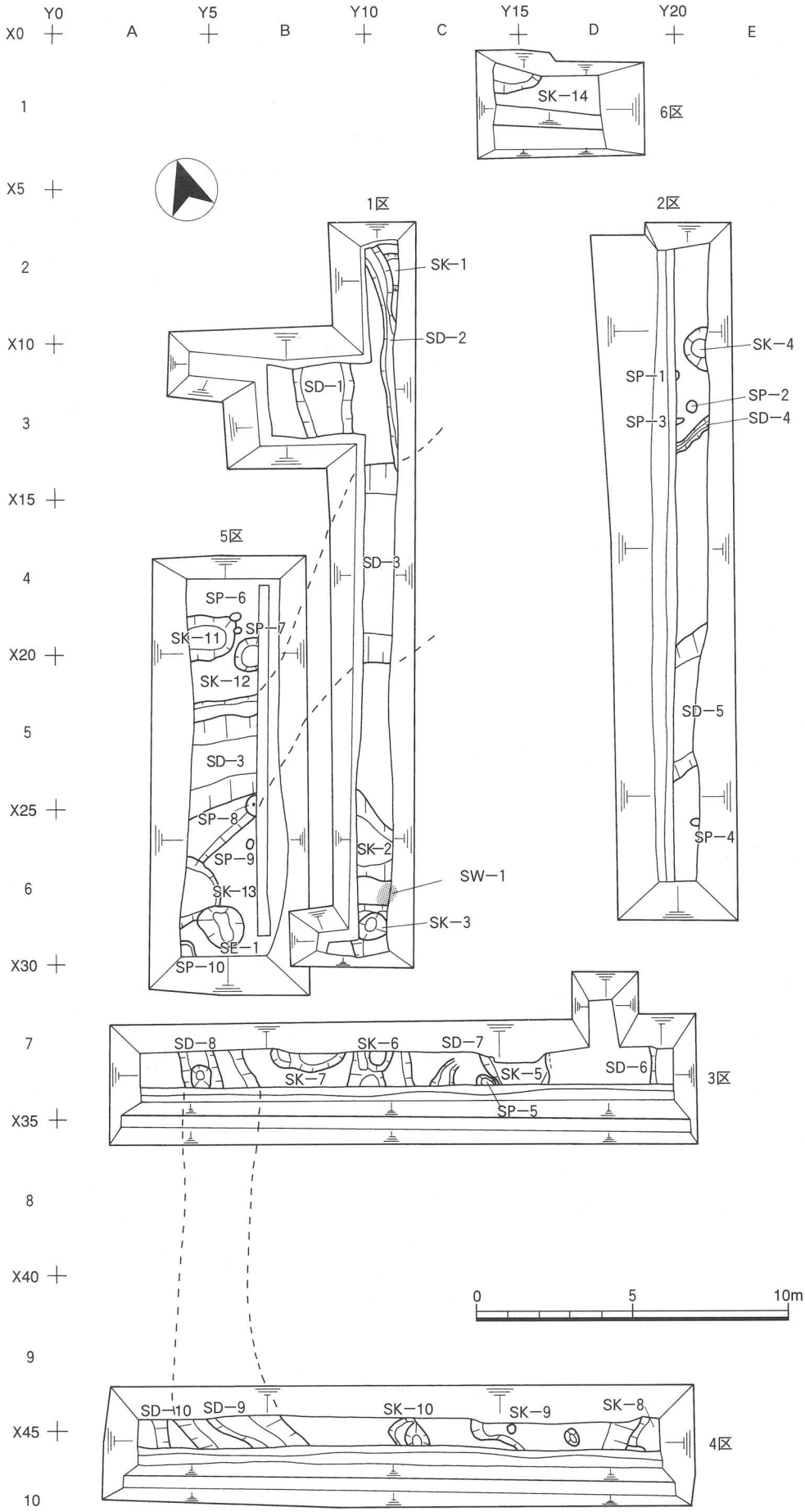
ＳＥ－１

５区南部の６ＡＢ地区で検出した。上面の形状が不整隅丸方形を呈し、断面形が逆台形を呈する素掘り井戸で、北西部分でＳＫ－13を切っている。東西幅1.45m、南北幅1.25m、深さ1.1mを測る。埋土は断面形状に沿ってほぼ水平に３層（１～３層）が堆積していた。いずれも、粘土質シルトおよびシルトを主体とする不均質な層相で、最下層の３層には植物遺体が多量に含まれていた。遺物は各層から古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器類が出土している。

12点（１～12）を図化した。１・２は精製の小形丸底壷である。口径が体部最大径よりやや大きい１と大きく凌駕する２がある。器面調整は全体に丁寧で外面の口縁部および体部には共に横位の密なヘラミガキを多用するが１については一次調整の縦位のハケが認められる。内面は口縁部および体部にヨコナデを行う１と横位のヘラミガキを行い更に口縁部のみに放射状ヘラミガキを施す２がある。色調は共に淡赤褐色で外面全面に煤の付着が認められる。３は大形直口壷の口頸部である。口径16.7cm、器高9.1cmを測る。色調は淡灰褐色。胎土は精良であるが

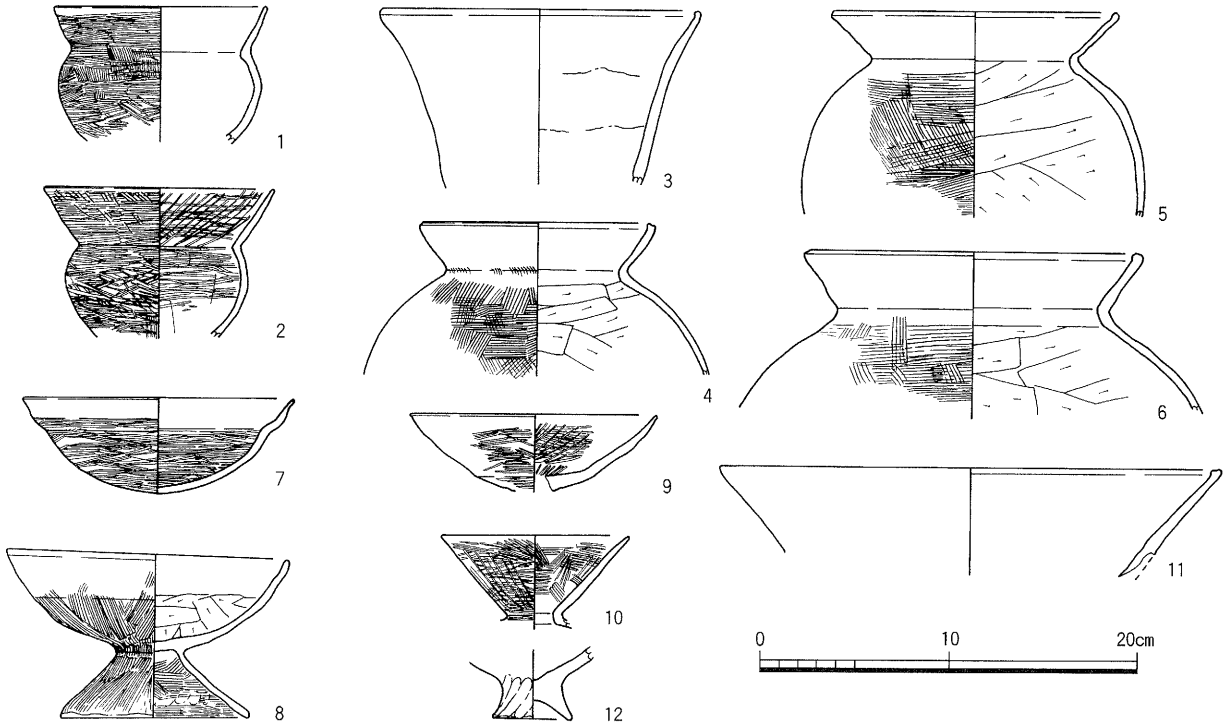


第４図　ＳＥ－１平断面図


Y0
Y5
Y10
Y15
Y20
Y25
X0
X5
X10
X15
X20
X25
X30
X35
X40
X45
A
B
C
D
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
SK－14
6区
1区
2区
SK－1
SD－2
SD－1
SD－3
SK－4
SP－1
SP－2
SP－3
SD－4
SD－5
SP－4
5区
SP－6
SK－11
SP－7
SK－12
SD－3
SP－8
SP－9
SK－13
SE－1
SP－10
SK－2
SW－1
SK－3
SD－8
SK－6
SD－7
SK－7
SK－5
SD－6
SP－5
3区
SD－10
SD－9
SK－10
SK－9
SK－8
4区
0
5
10m

第５図　検出遺構平面図

0.5～4㎜大の長石・チャートが散見される。4～6は布留式甕である。3点共に丸味を持つ屈曲部から口縁部が「く」の字形に屈曲して伸びるもので口縁端部は内側に肥厚して終る。体部外面のハケ調整は縦位が主であるが、体部上半には横位にハケ調整が行われている。体部内面のヘラケズリは屈曲部の直下以下に行われている。色調は4が褐灰色、5・6が淡灰褐色である。3点共に0.5～2㎜大の長石・石英・チャートが散見される。7は丸底の体底部に二段に屈曲する口縁部が付く精製の小形鉢である。1/2以上が残存しており口径14.3cm、器高5.0cmを測る。器面調整については底部外面がヘラケズリ、体部内外面は横位のヘラミガキを多用している。色調は淡黄橙色。胎土は精良。8は台付き鉢である。口径15.0cm、器高8.8cmを測る。外面の調整は杯部口縁部がヨコナデ以下は台部下半にかけて縦位のハケを行う。杯部内面は口縁部がヨコナデ、体底部はヘラケズリを行う。台部内面は横位のハケを行う。色調は灰白色。胎土には0.5～4㎜大の長石・石英・黒雲母が散見される。山陰地方からの搬入品と考えられる。9は小形の有稜高杯の杯部片である。復元口径12.9cmを測る。内外面共に横位のヘラミガキを多用するもので、内面はヘラミガキの後、放射状ヘラミガキを施す。色調は赤褐色。10は中空の小形器台である。内外面共に横位のヘラミガキを多用する。色調は橙色。胎土は精良。11は大形鉢の口縁部と考えられるもので口縁端部は内側に肥厚する他、端面に1条の沈線が巡る。色調は赤褐色。胎土中に2㎜以下の長石・石英・チャートを少量含む。12は製塩土器である。台部は完存しており高台径4.2cmを測る。熱変により外面の色調は白色を呈している。出土遺物から遺構の帰属時期は布留Ⅰ期が考えられる。

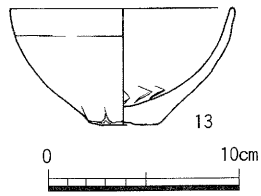


第6図　ＳＥ－１出土遺物実測図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

１区北部の２Ｃ地区で検出した。西部がＳＤ－２に切られ東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.3m、南北幅1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色シルトの単一層である。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される完形の小形鉢を含む土器類が少量出土している。小形鉢1点（13）を図化した。13の小形鉢は平底の底部に椀形の体部が付くもので、口縁部は直口を呈する。完形品で口径11.4cm、器高6.3cm、底径3.5cmを測る。色調は淡灰白色。胎土はやや粗く１～４㎜大の長石・石英・チャートが散見される。

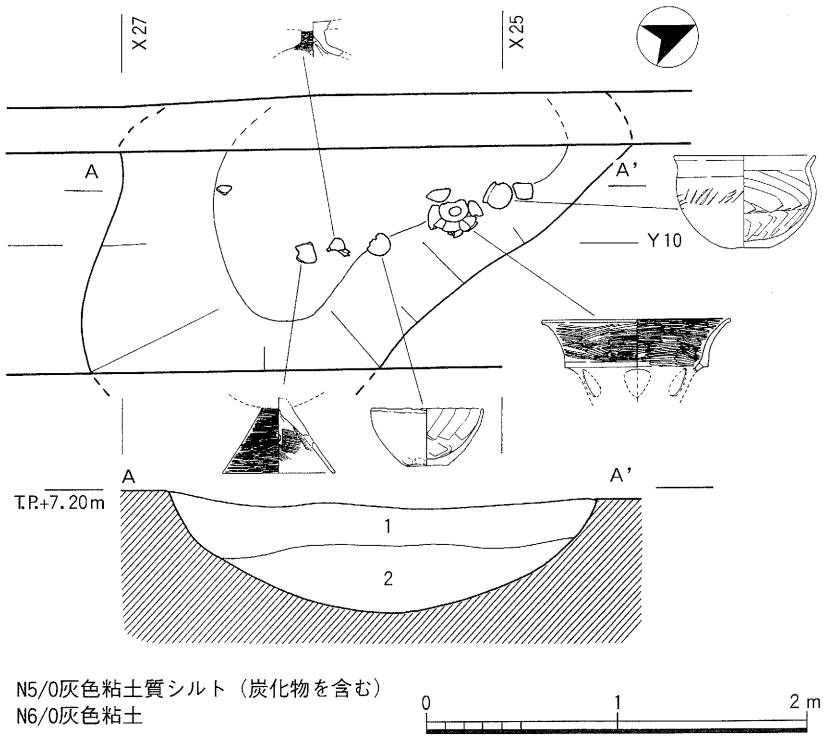


第７図　ＳＫ－１出土遺物実測図

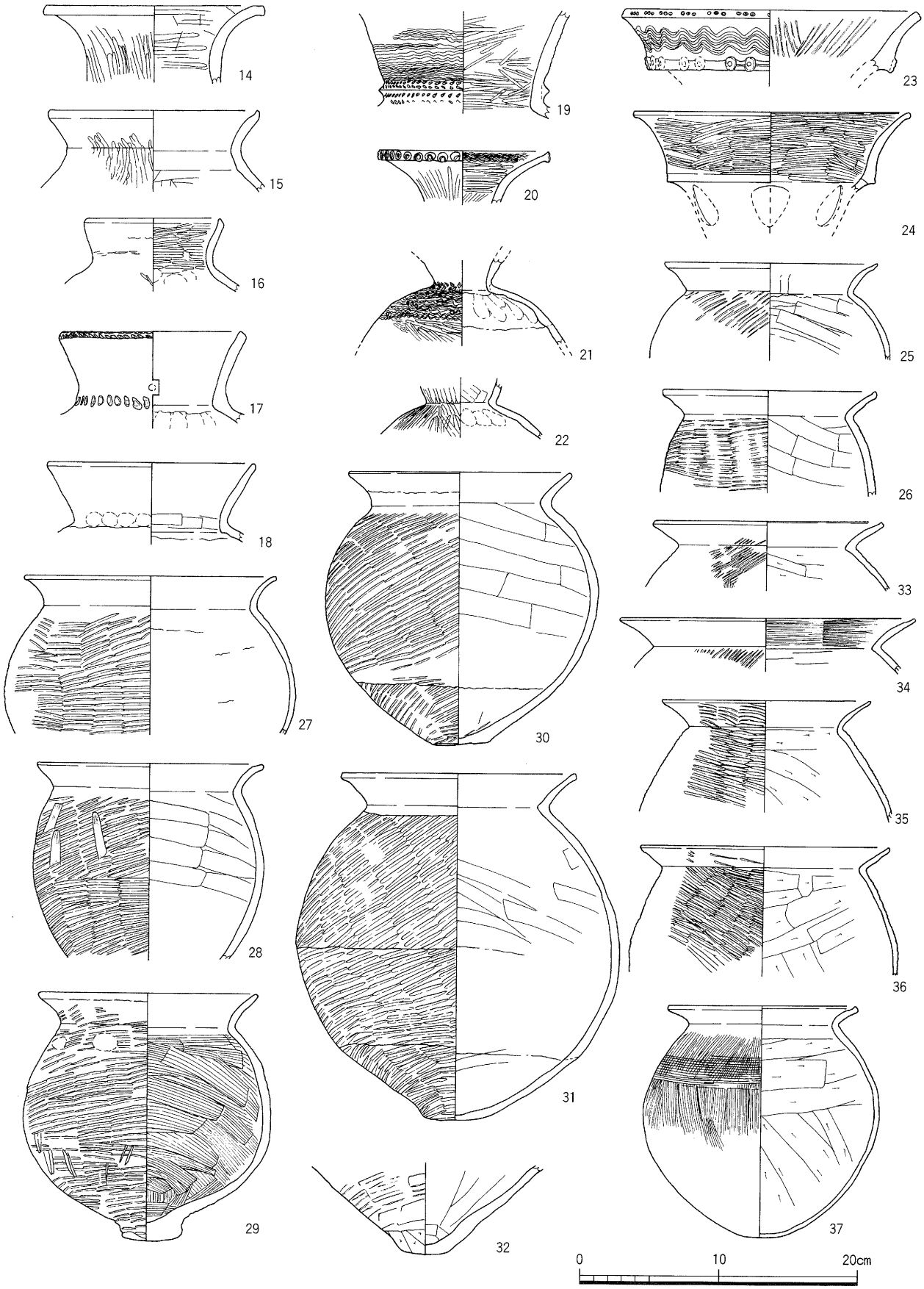
ＳＫ－２

１区南部の５・６ＢＣ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東部および西部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.2m、南北幅2.7m、深さ0.54mを測る。埋土は上層のN5/0灰色粘土質シルトと下層のN6/0灰色粘土の２層である。遺物は各層から古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）に比定される土器類が多量に出土している。

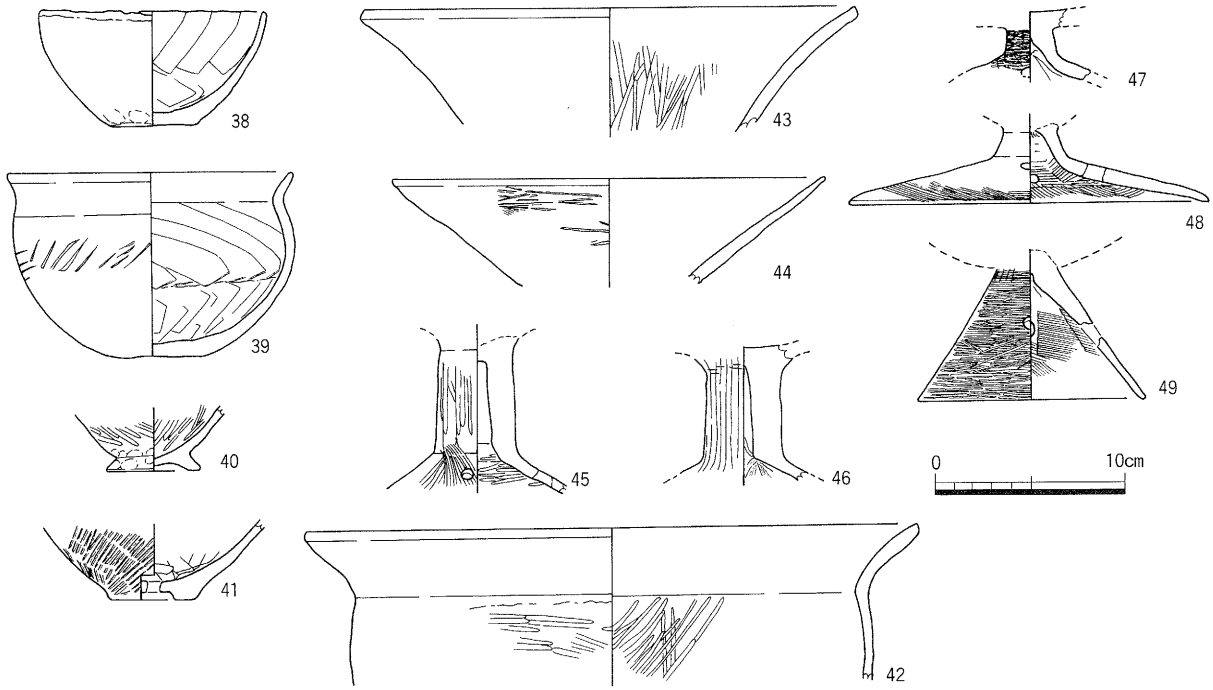
36点（14～49）を図化した。一部を除けば完形ないしは図上で完形に復元できるものは僅かで小破片が大半を占めた。14～23は壷類である。14・15は広口壷で直上方に伸びる頸部から口縁部から大きく外反する14と口頸部が外反する15がある。色調は14が淡灰褐色、15が淡赤褐色である。胎土は14が粗く0.5～５㎜大の長石・石英が多く含まれている他、スコープで角閃石の含有を認める。15は２㎜以下の長石・石英を多量に含有している。16～18は短頸壷である。16はやや小形品で口径9.5cmを測る。口縁端部は外傾し小端面を成す。色調は淡灰褐色。17・18は共に斜上方に直線的に口頸部が伸びるもので、端部は外傾して小端面を成す17と丸く終る18がある。17は口縁端部の上下に小さな列点文と頸部下半にヘラ状工具によるやや大きめ刺突文が施文されている。口径は17が12.5cm、18が14.5cmを測る。色調は17が淡赤褐色、18が淡灰褐色である。胎土は共に粗く長石・石英・チャートを多く含み17については５㎜程度の大粒の花崗岩が散見される。角閃石についてはスコープで少量の含有を認める。19は加飾



第８図　ＳＫ－２平断面図



第９図　ＳＫ－２出土遺物実測図－１



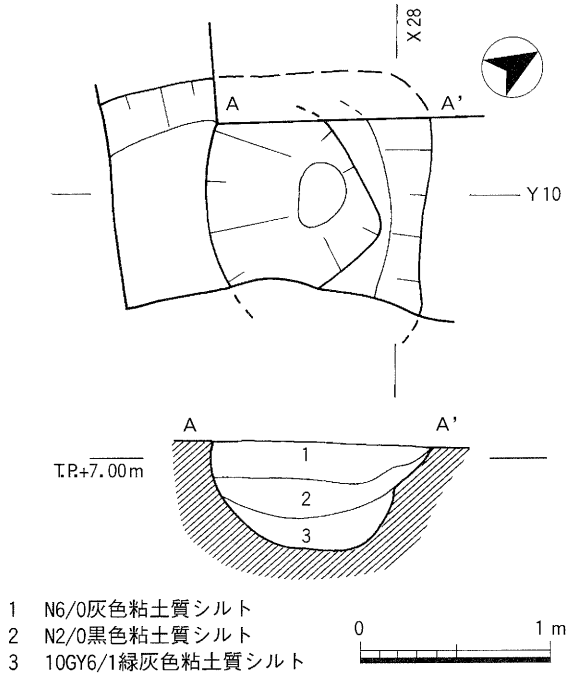
第10図　ＳＫ－２出土遺物実測図－２

された大形の直口壷の口頸部片である。口頸部外面は頸部下部に断面三角形の凸帯の上下に刺突文、それより上部には波長の短い波状文が施文されている。生駒西麓産。20～22は細頸の頸部から口縁部が大きく外反して開くもので、加飾を施す20・21と無文の22がある。20は口縁端部に幅広の端面を形成するものでその部分に竹管押圧円形浮文を全面に貼り付ける他、口縁部内面上部に波状文が施文されている。21の体部外面の施文は最上位が刺突による綾杉状で、以下は体部上位にかけて波長の短い波状文が施文されている。色調は20が淡灰褐色。21・22が褐灰色である。20～22が生駒西麓産。23は複合口縁壷の口縁部片である。口縁端面に３個一対の竹管文、外側面に波状文、下半に２個一対の竹管押圧円形浮文が施文されている。色調は灰褐色。胎土中に１㎜以下の長石・石英とスコープで角閃石の含有を認める。24は二段に拡張する形を持つ北陸系装飾器台の身部の小破片である。口縁部が外反して開くもので、体部には涙滴形の透孔が天地を違えて交互に配されている。全体に整美な作りで、身部口縁の内外面に横位のヘラミガキを施す。復元口径19.5cmを測る。色調は明るい黄橙色。Ｖ様式系甕は８点（25～32）を図化した。そのうち、完形品が１点29で、図上で完形に復元が可能なものは２点（30・31）である。31が大形品で他は中形品に分類される。体部の形態は26・28を除けば球形で口縁部は「く」の字に屈曲する。口縁部の形態は端部が受け口状を呈する25、端部が丸く終る27～30と小端面を成す26・31がある。底部が残存しているもののなかでは、29が突出平底の他は突出しない平底である。体部外面のタタキ調整は二ないしは三分割成形に沿って右上がりないしは水平方向に施されており、タタキ調整後ヘラ状工具によりタタキメをナデ消す28やタタキ原体を使用してナデ消すため太いハケ状の条痕を残す29がある。体部内面は板ナデを多用しており一部29のようにハケ状の条痕を残すものや25のように禾木科植物の茎を使用したナデと推定されるものがある。32は甕の底部で底部外側面はヘラケズリにより成形されている他、体部はタタキ調整の後ヘラ状工具により器面を粗くナデつける調整が行なわれている。色調は淡黄橙色～灰褐色。胎土中に２㎜以下の長石・石英・

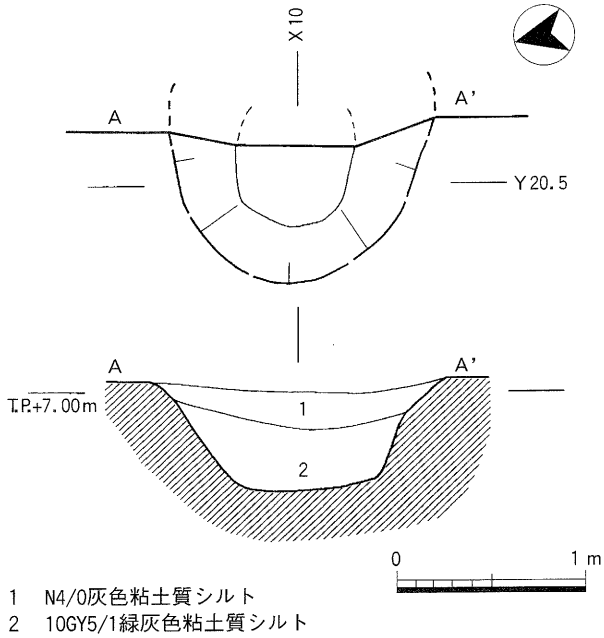
黒雲母を多く含むが、角閃石の含有についてはスコープにおいて確認できる。庄内式甕は４点（33～36）図化した。いずれも口縁部から体部上半にかけての小破片である。「く」の字状に鋭く屈曲する口縁部を持つもので外面のタタキ調整は、33・34が５本/cm程度の細筋で右上り、35・36が４本/cmの左上りで、33・35・36はタタキ調整が口縁部におよぶもので口縁叩き出し技法の痕跡を残している。33・34が生駒西麓産で「河内型庄内式甕」の典型的なタイプ、35・36が在地産に区別される。37は細片化していたがほぼ完形に復元が可能である。小形の甕で口径13.5cm、器高16.5cm、体部最大径16.8cmを測る。体部最大径が中位にある球形の体部から口縁部が外反するもので端部は上方に摘み上げられて外傾する小端面を作る。体部外面は上位から中位にかけて縦位のハケの後、上位よりやや下部に横位のハケを直線的に施す。体部内面は屈曲部のやや下までヘラケズリを行う。色調は灰白色で胎土中に２㎜以下の流紋岩を多量に含む。他地域からの搬入品と考えられる。38・39は小形鉢である。38は平底の底部に椀形の体部が付くもので、口縁端部は未成形で波状口縁を呈する。口径11.8cm、器高6.0cmを測る。色調は淡赤褐色。胎土は粗く２㎜以下の長石・チャート・赤色酸化土粒が多く含まれている。39は平底の底部から内湾して体部が立ち上がるもので、口縁部は小さく外折して斜上方に伸びる。口縁部は楕円形状で口径15.0cm、器高10.0cmを測る。体部外面の上位にクシ状工具による４条を単位とする直線文が施文されている。色調は淡灰褐色。胎土中に２㎜以下の長石・石英を含む。出土例の少ないものである。40は台付き鉢で高台部は完存している。高台径5.0cm、高台高0.7cmを測る。色調は灰褐色。胎土は精良である。41は有孔鉢である。底径4.6cmを測る。穿孔は焼成前で孔径は0.6cmを測る。色調は灰褐色。胎土中に３㎜大の長石が散見される。42は口縁部が斜上方に伸びる大形鉢の小破片である。復元口径32.0cmを測る。色調は淡赤褐色。胎土中に１～４㎜大の長石・石英・チャートを多く含む。高杯は６点（43～48）を図化した。43・44は杯部が斜上方へ外反気味ないしは直線的に大きく開く口縁部を持つ有稜高杯である。口縁部端部は外傾し面を有する43と直口の44がある。器面調整は43が全体に風化が進行しており不明瞭であるが内面に縦位のヘラミガキが確認できる。44には横位のヘラミガキが施されている。色調は赤褐色。45・46は有稜高杯の脚部片である。共に中空で柱状部が直線的に伸びる。45のスカシ孔は３方に穿たれている。色調は45が淡灰褐色、46が淡橙色である。胎土は45が精良、46が粗く３㎜以下の長石・石英・チャートが多量に含まれている。47・48は椀形高杯の脚部である。47は小形品である。スカシ孔は共に４方に穿たれている。器面調整は47の外面が横位のヘラミガキ、48は内外面共にハケを多用する。49は小形器台の脚部でほぼ完存している。脚部径12.0cm、脚部高7.1cmを測る。脚部内面は横位のヘラミガキ、内面はハケ調整が行なわれている。スカシ孔は４方に穿たれている。出土遺物は大半のものが庄内Ⅱ期を中心とするが、37のように庄内Ⅲ期以降に盛行するものが一部含まれている。

ＳＫ－３

１区南端の６ＢＣ地区で検出した。ＳＷ－１の南に隣接している。東部および西部が調査区外に至るため全容は不明である。二段掘方を有するもので、検出部分で、東西幅1.0m、南北幅1.1m、深さ0.58mを測る。埋土は３層から成る。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器類が出土している。５点（50～54）を図化した。50は布留式甕の小破片である。復元口径13.9cmを測る。色調は灰黒色。胎土は粗く0.5㎜以下の長石を多量に含有している。51は東四国系甕に分類される甕で体部中位以下を欠く。復元口径15.0cmを測る。口縁部は「く」の字に屈

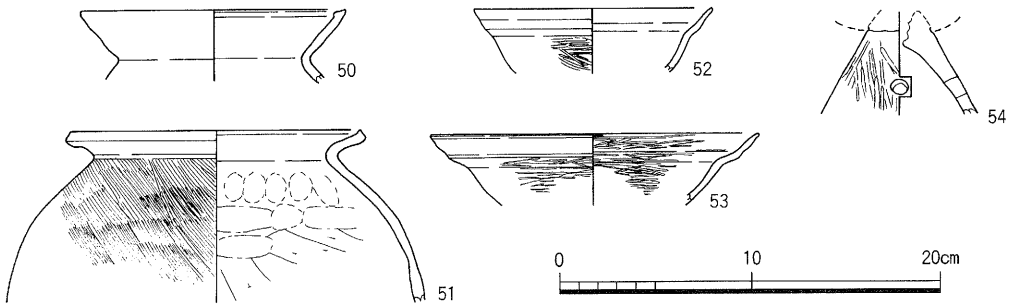


第11図　ＳＫ－３平断面図



第12図　ＳＫ－４平断面図

曲するもので口縁端部は上方に摘み上げられ外傾する小端面を形成するもので、端面に1条の凹線文が巡る。体部外面は左上りのハケ、内面は指頭圧痕が顕著である他、一部ケズリが認められる。色調は灰褐色である。胎土中にスコープで確認できる微細な角閃石が多く含まれていることから東四国系甕の中でも讃岐地方からの搬入品と考えられる。大久保徹也氏編年（1990・1993大久保）の下川津Ⅵ式に対応するものと考えられる。52・53は有段口縁鉢である。共に小破片で復元口径は52が12.4cm、53が17.3cmを測る。52は器面に化粧土が塗布されている。53の口縁部外面には横位の密なヘラミガキ調整が行なわれている。色調は52が橙色。53が淡灰褐色である。54は小形器台の小破片である。色調は黄橙色である。胎土中に0.5mm大の長石が散見される。遺構の帰属時期は布留Ⅰ期である。



第13図　ＳＫ－３出土遺物実測図

ＳＫ－４

２区北部の２・３Ｅ地区で検出した。東部が調査区外に至るもので全容は不明であるが、検出部分からみて、円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.25m、南北幅1.35m、深さ0.43mを測る。埋土は上層のやや不均質のN4/0灰色粘土質シルトと下層の10GY5/1緑灰色粘土質シルトの２層から成る。遺物は上層から古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器

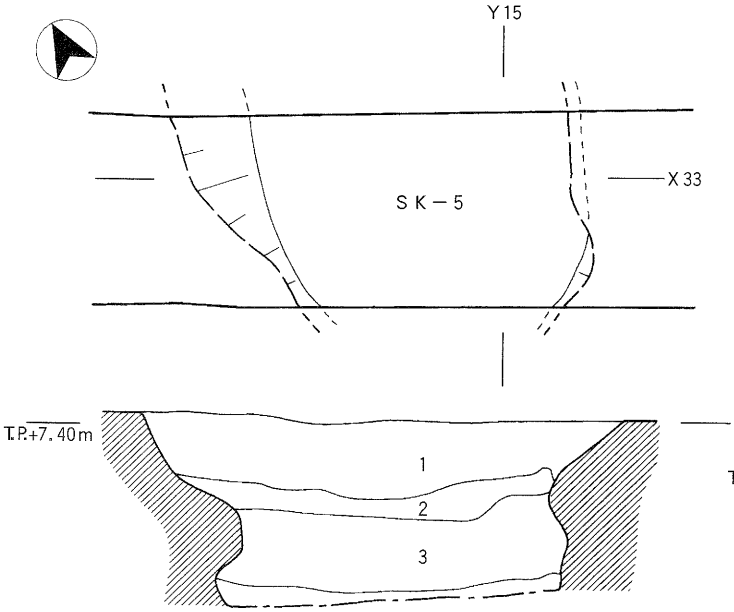
類が少量出土している。甕１点（56）を図化した。56は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く甕である。口径14.0cm、器高19.8cm、体部最大径19.9cmを測る。布留式甕の属性のうちの一つである体部外面にハケ調整を施す特徴を持つもので、布留式傾向甕に分類される。色調は淡褐灰色。胎土中に微細な角閃石を多く含有する。生駒西麓産である。布留Ｉ期に比定される。

ＳＫ－５

３区の７ＣＤ地区で検出した。北部および南部が調査区外に至るため全容は不明である。掘方の断面形状が袋状を呈するもので、検出部分で東西幅2.1m、南北幅1.0m、深さ0.95mを測る。埋土は袋状を呈する断面形状に沿って、粘土～粘土質シルトを中心とする４層が堆積している。遺物は古墳時代初頭（庄内式）に比定される土器類が少量出土している。有段高杯１点（60）を図化した。60は有段高杯の小破片である。杯部内外面は横位のヘラミガキで、杯体部内面には更に放射状のヘラミガキが施されている。色調は赤褐色。胎土は精良である。器種としては庄内Ⅱ～Ⅲ期に盛行するものであるが、出土遺物が少量のため時期は限定できない。

ＳＫ－６

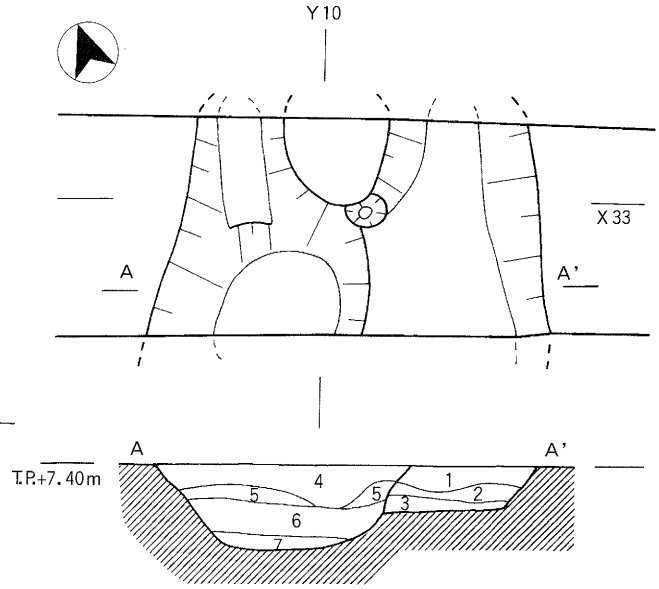
３区の７ＢＣ地区で検出した。検出部分では南北方向に溝状に伸びるもので、南部で深く落ち込む部分がある。検出部分で東西幅2.1m、南北幅1.15m、深さ0.44mを測る。埋土はシルト質粘土が優勢な７層から成る。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される完形の直口壷を含む土器類が出土している。55は精製の直口壷である。体部の一部を欠く以外は完存している。口径13.6cm、器高17.8cm、体部最大径14.0cmを測る。器面調整は全体に丁寧で、外面では口縁部および体部に横位のヘラミガキ、内面にはハケの後、放射状にヘラミガキを施す。色調は淡赤褐色。胎土は精良。58は椀形高杯の杯部片である。口径12.7cmを測る。杯部内外面共に縦位のヘラミガキを多用している。色調は淡黄橙色。胎土中に0.5～２㎜大の長石・石英が散見される。



1　10GY4/1暗緑灰色粘土質シルト
2　10GY8/1明緑灰色シルト質粘土
3　N5/0灰色粘土
4　10GY7/1明緑灰色シルト質粘土

0　1 m

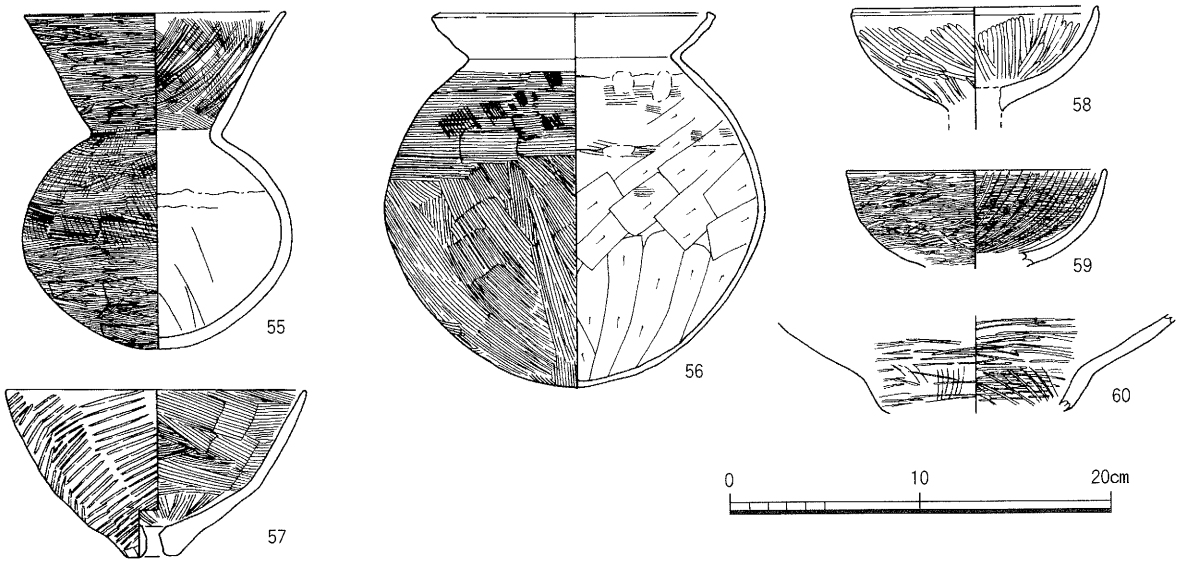
第14図　ＳＫ－５平断面図



1　N4/0灰色シルト質粘土
2　N5/0灰色シルト質粘土
3　2.5GY8/1灰白色シルト質粘土
4　N4/0灰色粘土質シルト
5　10GY5/1緑灰色シルト質粘土
6　N3/0暗灰色粘土
7　N4/0灰色粘土質シルトと10GY7/1明緑灰色粘土質シルトの互層

0　1 m

第15図　ＳＫ－６平断面図

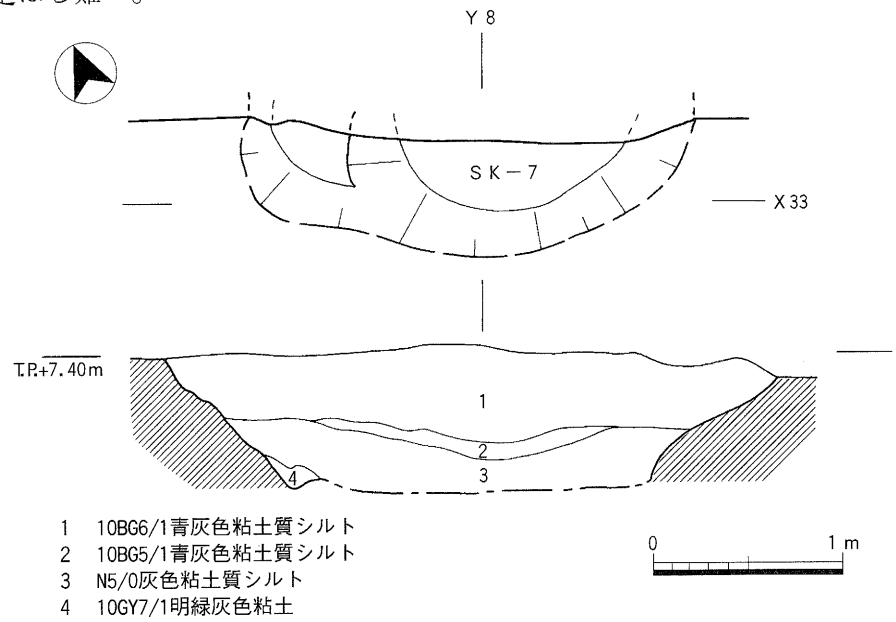


第16図　ＳＫ－４（56）、ＳＫ－５（60）、ＳＫ－６（55・58）、ＳＫ－７（57・59）出土遺物実測図

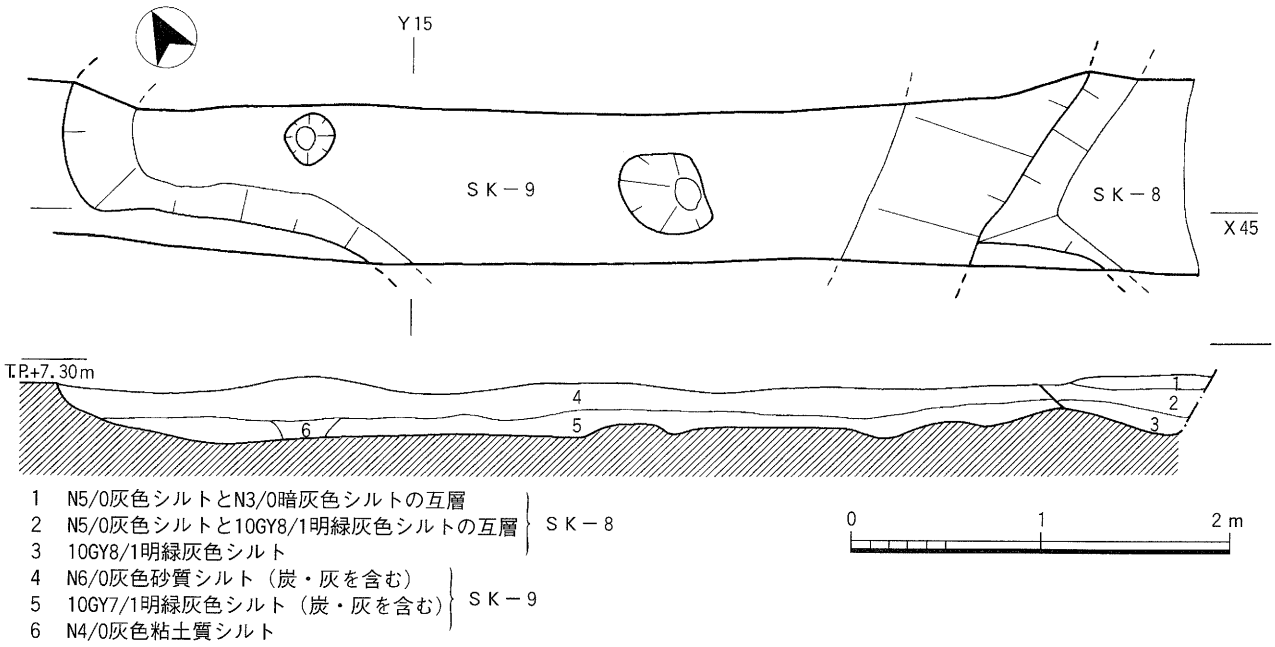
遺構の帰属時期は庄内Ⅱ期である。

ＳＫ－７

３区の７Ｂ地区で検出した。ＳＫ－６の西に隣接する。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅3.7m、南北幅0.6m、深さ0.8mを測る。埋土は逆台形の断面形状に沿って、不均質な粘土質シルトの４層が堆積している。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される完形の有孔鉢を含む土器類が出土している。２点（57・59）を図化した。57は有孔鉢である。完形品で口径15.8cm、器高9.0cm、底径2.8cmを測る。器面調整は外面が右上りのタタキ、内面は下位が放射状、体部は左上りのハケを施している。59は椀形高杯の杯部である。精製品でヘラミガキを主体とする器面調整が丁寧に施されている。庄内Ⅱ～Ⅲ期の範疇と考えられるが出土器種が限られているため限定はし難い。

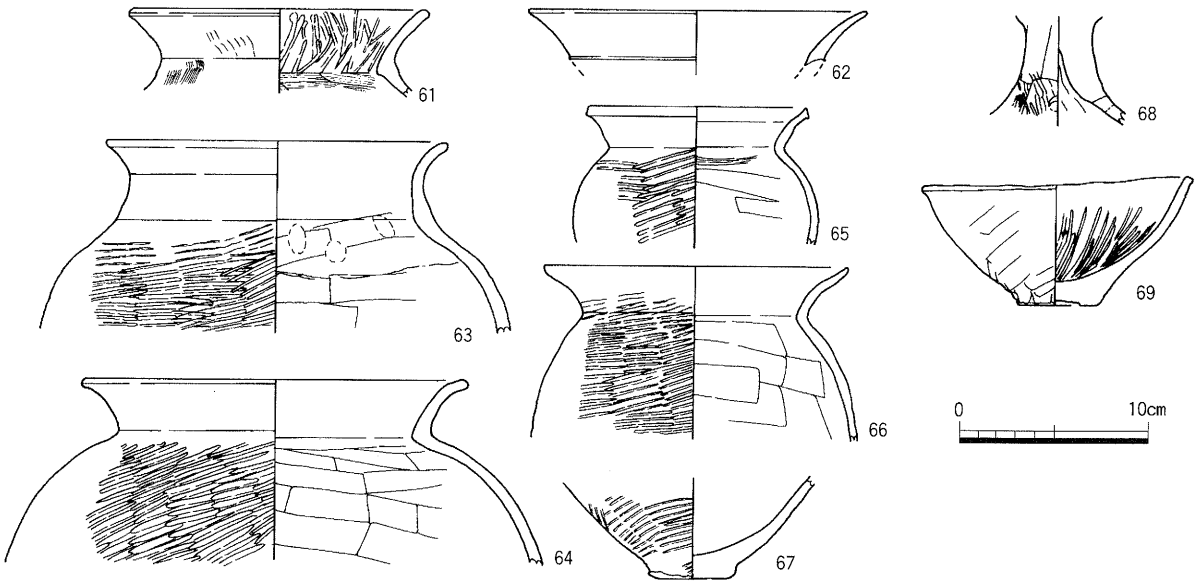


第17図　ＳＫ－７平断面図



1　N5/0灰色シルトとN3/0暗灰色シルトの互層
2　N5/0灰色シルトと10GY8/1明緑灰色シルトの互層　｝SK－8
3　10GY8/1明緑灰色シルト
4　N6/0灰色砂質シルト（炭・灰を含む）
5　10GY7/1明緑灰色シルト（炭・灰を含む）　｝SK－9
6　N4/0灰色粘土質シルト

第18図　SK－8・SK－9平断面図



第19図　SK－8出土遺物実測図

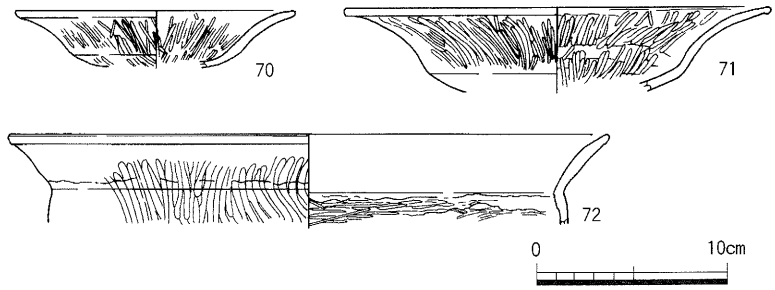
SK－8

4区の東端の9・10D地区で検出した。西部がSK－9を切っているほか、北部と東部が調査区外に至る。検出部分で東西幅1.0m、南北幅1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は3層から成る。遺物は弥生時代後期末に比定される土器類が多量に出土している。9点（61～69）を図化した。61・62は広口壷の口縁部の小破片である。復元口径は61が15.1cm、62が17.5cmを測る。色調は淡黄橙色。胎土は粗く1～2mm大の長石・石英・黒雲母・チャートを多量に含む。63～67はV様式甕である。口縁部が残存している63～66については、口径の法量から大形の63・64、中形の66、小形の65に区別される。63が短い頸部を形成する以外は当該期に通有な「く」の字を呈するもので、口縁端部は丸く終る63・64、尖り気味に終る66と外傾し小端面を成す65がある。体部外面のタタキ調整は右上りで、タタキの単位は64・65が2本/cm、63が3本/cm、66が4本/cmである。体部内面は板ナデにより平滑にされている。67は突出平底の底部である。底径4.5cmを

測る。色調は62～64・66が灰褐色、64・67が赤褐色である。胎土には２㎜以下の長石・石英・黒雲母の他、スコープで角閃石の含有を認める。生駒西麓産。68は有稜高杯の脚部で裾部を欠く。スカシ孔は４方に穿たれている。69は平底で直口の口縁部を有する小形鉢B_1である。完形で口径14.1cm、器高6.9cm、底径4.3cmを測る。底部はわずかに突出するもので裏面はドーナツ底を呈する。体部内面はナデの後放射状ヘラミガキ。色調は黄褐色。胎土には３㎜以下の長石・石英・黒雲母・チャートが散見される。原田編年の様相３（弥生時代後期後半－新相）に比定される。

ＳＫ－９

４区東部の９・10ＣＤ地区で検出した。東西方向に長い遺構であるが、南部および北部が調査区外に至るため全容は不明である。断面形状が浅い逆台形を呈するもので、底部に２個の小穴が存在しているため竪穴住居の可能性がある。検出部分で東西幅5.1m、南北幅1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は断面形状に沿って主に２層が堆積しており、共にシルトを主体とする不均質な土層である。遺物は上層から弥生時代後期末に比定される土器類が出土している。３点（70～72）を図化した。70・71は有稜高杯Ｄ類で共に口縁部が残存している。70は小形で復元口径14.5cm、71は大形で復元口径22.3cmを測る。杯部の器面調整は共に内外面に縦位のヘラミガキを施す。色調は70が淡黄橙色、71が灰褐色である。70が在地産、71が生駒西麓産である。72は大形鉢Ｄの小破片である。復元口径31.3cmを測る。口縁部中位から体部にかけて禾木植物の茎によるものと推定される縦位のナデを施す。色調は淡赤褐色。胎土中に１～２㎜大の長石・石英・黒雲母の他スコープで角閃石の含有を認める。原田編年の様相３（弥生時代後期後半－新相）に比定される。



第20図　ＳＫ－９出土遺物実測図

ＳＫ－10

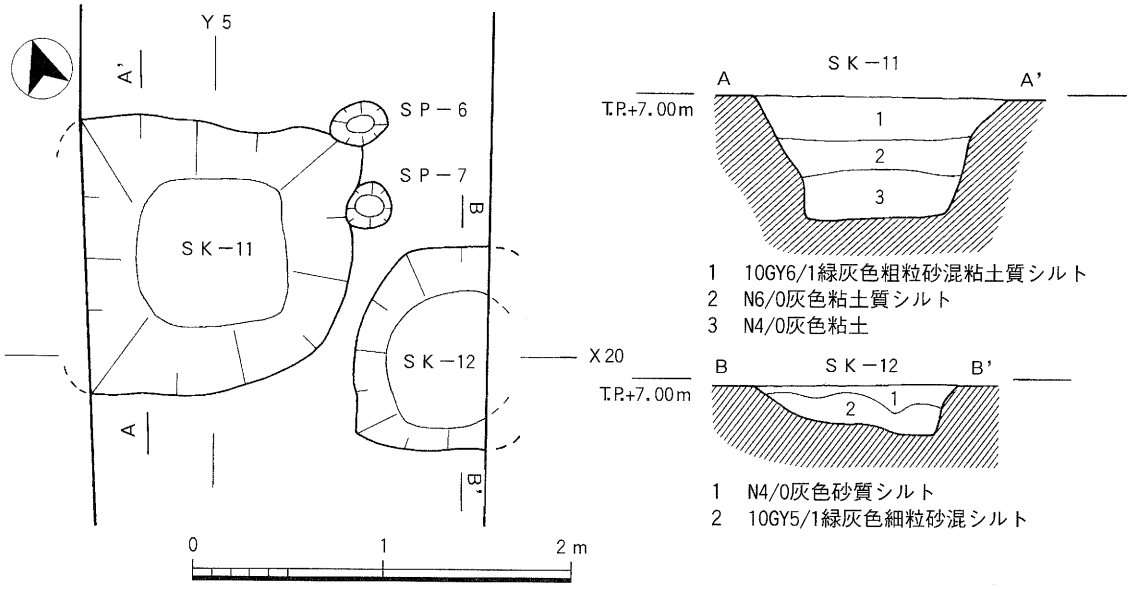
４区の９・10Ｃ地区で検出した。南端が調査区外に至るが、検出した部分からみて、楕円形を呈するものと推定される。二段の掘方を有しており、検出部分では南東部分が一段深くなっている。検出部分で東西幅1.0m、南北幅0.9m、深さ0.22mを測る。埋土は２層から成る。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が少量出土しているが図化し得たものは無い。

ＳＫ－11

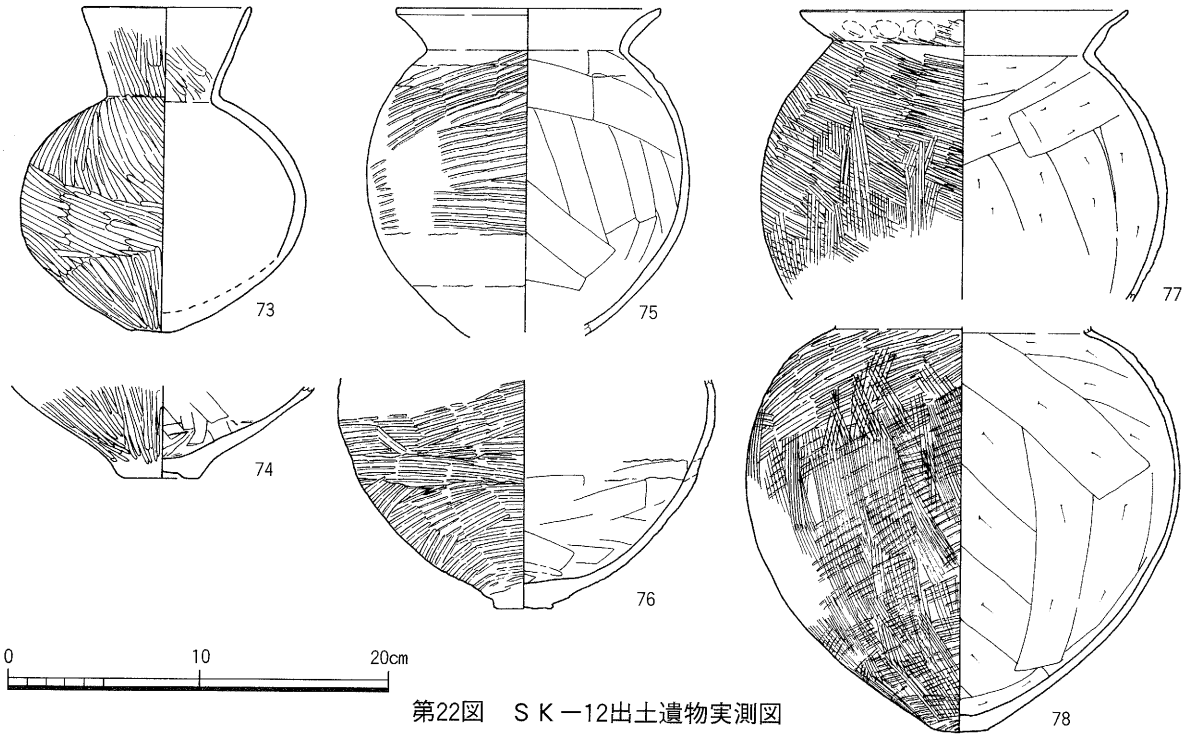
５区北部の４・５ＡＢ区で検出した。西部が調査区外に至るが、検出部分からみて不整方形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.4m、南北幅1.5m、深さ0.64mを測る。埋土は３層が水平に堆積している。遺物は弥生時代後期末に比定される土器類が極少量出土しているが図化し得たものは無い。

ＳＫ－12

ＳＫ－11の東で検出した。東部が調査区外に至るがほぼ方形状を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.7m、南北幅1.1m、深さ0.25mを測る。埋土は上層のN4/0灰色砂質シルト



第21図　ＳＫ－11、ＳＫ－12平断面図



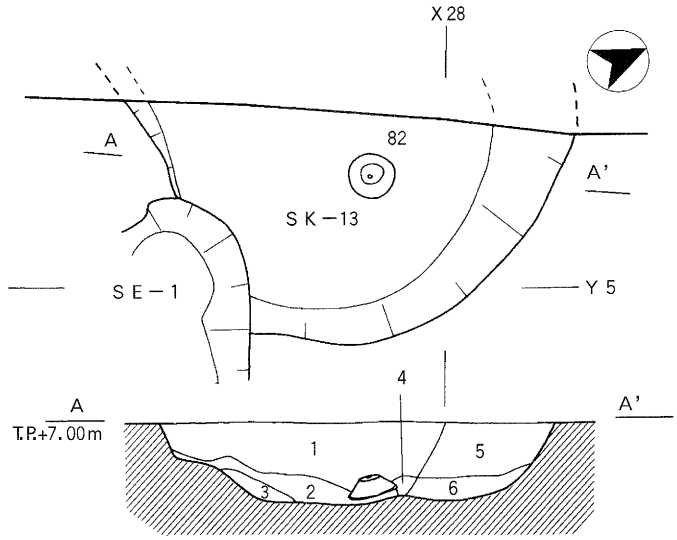
第22図　ＳＫ－12出土遺物実測図

と下層の10GY5/1緑灰色細粒砂混シルトの２層から成る。遺物は上層から古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される完形の直口壷を含む土器類が出土している。６点（73～78）を図化した。73・74は壷である。73は細頸直口壷である。完形品で口径8.6cm、器高17.4cm、底径2.0cmを測る。外面の器面調整は口縁部を除いてヘラミガキを多用している。色調は淡赤褐色。胎土はやや粗く１～４㎜大の長石・石英・花崗岩・チャートを多く含む。74は壷の底部である。底径4.5cmを測る。裏面はドーナツ底を呈する。色調は淡褐灰色。生駒西麓産である。75・76はＶ様式系甕である。75は底部を欠く。体部外面の器面調整は分割整形による上段、中段がタタキ、下段についてはナデが施されている。76は体部中位から底部にかけての資料である。底部は小さく突出した平底で裏面は凹凸面を持つ。色調は２点共に褐灰色。角閃石を含む生駒西麓産である。77・78

は庄内式甕である。77は口縁叩き出し技法により成形されたもので口径17.4cmを測る。体部外面の器面調整は左上りのやや粗いタタキ（３本/cm）の後、縦位にハケを散発的に施してタタキを消している。体部内面のヘラケズリは深くケズリ単位の痕跡が明瞭である。本例は口縁部内面から体部外面にかけて化粧土が塗布されており、その部分は淡橙色を呈するがその他は灰褐色を呈する。胎土中にスコープにより微量の角閃石の含有が認められる。78は口縁部を欠くが小さく形骸化した平底の底部に体部最大径が中位にある球形の体部が付く庄内式甕である。体部外面の器面調整は右上りのタタキを施した後、縦位のハケでタタキを消す等の特徴を持つもので原田分類（原田1993）の甕B_2にあたる。生駒西麓産の胎土を恒常的に使用して量産化を果たした「河内型庄内式甕」の最古型式にあたる。出土遺物から遺構の帰属時期は古墳時代初頭前半（庄内式古相－庄内Ⅱ期）にあたる。

ＳＫ－13

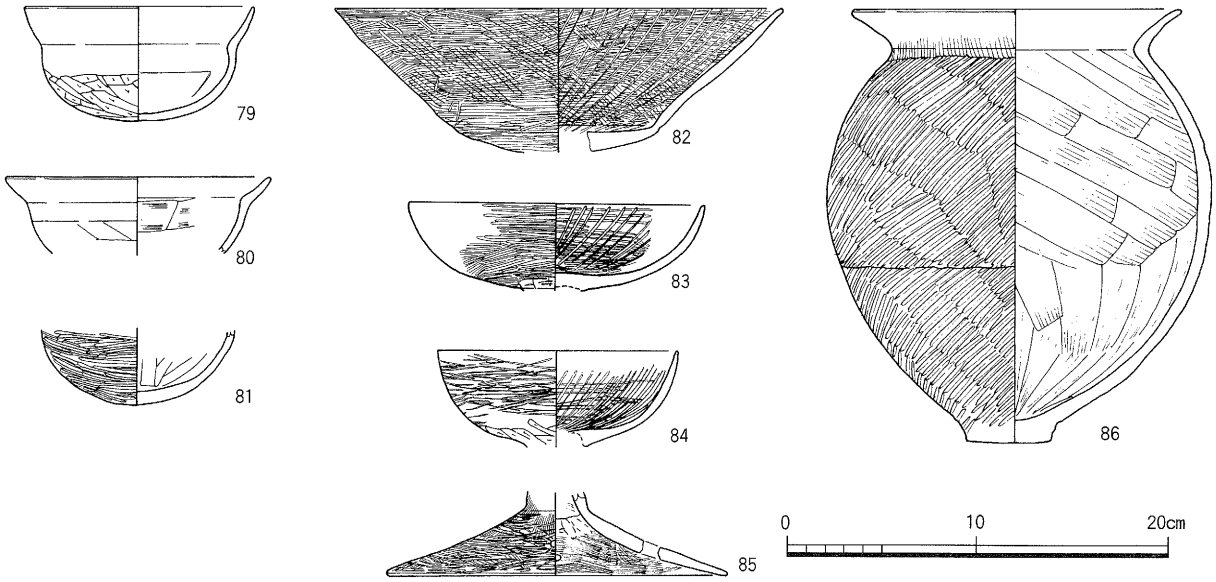
５区南部の６ＡＢ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では半円形を呈し、東西幅1.2m、南北幅2.4m、深さ0.4mを測る。南東部がＳＥ－１に切られている。断面の形状は逆台形で、底部はほぼ水平である。埋土は６層から成る。遺物は古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される土器類が出土している。８点（79～86）を図化した。79・80は小形鉢である。79は1/2が残存しており口径12.0cm、器高6.0cmを測る。体底部は半球形で中位以下に鱗状のヘラケズリを施す。色調は赤褐色。80は79に比してやや短い口縁部を持つ。色調は赤橙色。２点共に胎土は精良である。81は小形丸底壷の体部中位以下が残存している。体部外面はヘラケズリにより平滑にした後、横位のヘラミガキを施す。色調は淡赤褐色で内外面の一部に煤の付着が認められる。胎土は精良。82～85は高杯で82が有稜高杯、83～85が椀形高杯である。82は杯部が完存しており口径23.5cm、稜径10.4cmを測る。全体に作りが丁寧で精美なものである。器面調整は杯部内外面共にハケによる一次調整を施した後横位の密なヘラミガキを多用するもので、内面についてはヘラミガキを放射状に施す。色調は黄橙色。胎土は精良である。83・84は椀形高杯の杯部である。残存率は83が1/4、84が1/3である。復元口径は85が15.4cm、84が12.4cmを測る。杯部の器面調整は共に共通しており外面においては、中位以下をヘラケズリにより平滑にした後、横位のヘラミガキ。内面は横位のヘラミガキの後、放射状ヘラミガキを施す。色調は淡灰褐色を呈するが共に一部に赤褐色を呈する部分があるため本来は化粧土が全面に塗布されていたものと推定される。胎土は精良。85は椀形高杯の脚部の小破片で



1　N4/0灰色シルト質粘土
2　N2/0黒色極細粒砂に10GY8/1明緑灰色シルトのブロック
3　10GY7/1明緑灰色シルト
4　N7/0灰白色極細粒砂
5　10GY8/1明緑灰色極細粒砂～細粒砂
6　10GY7/1明緑灰色極細粒砂にN6/0灰色シルトのブロック

0　1m

第23図　ＳＫ－13平断面図



第24図　ＳＫ－13出土遺物実測図

ある。復元裾径17.8cmを測る。裾部外面はハケ調整の後、横位のヘラミガキ。裾部内面はハケを多用する。色調は淡褐灰色。胎土は精良。86はＶ様式系甕である。1/2以上が残存している。口径17.0cm、器高22.9cm、体部最大径20.0cmを測る。やや長胴の体部は二分割成形によるもので上下共にタタキ調整の方向を右上りに揃えている。体部内面の調整は繊維束を使用したナデ（茎束条痕）である。色調は赤褐色～褐灰色。胎土中に２～４㎜大の長石・石英・チャートが散見される他、スコープで少量の角閃石の含有を認める。庄内Ⅲ期に比定される。

ＳＫ－14

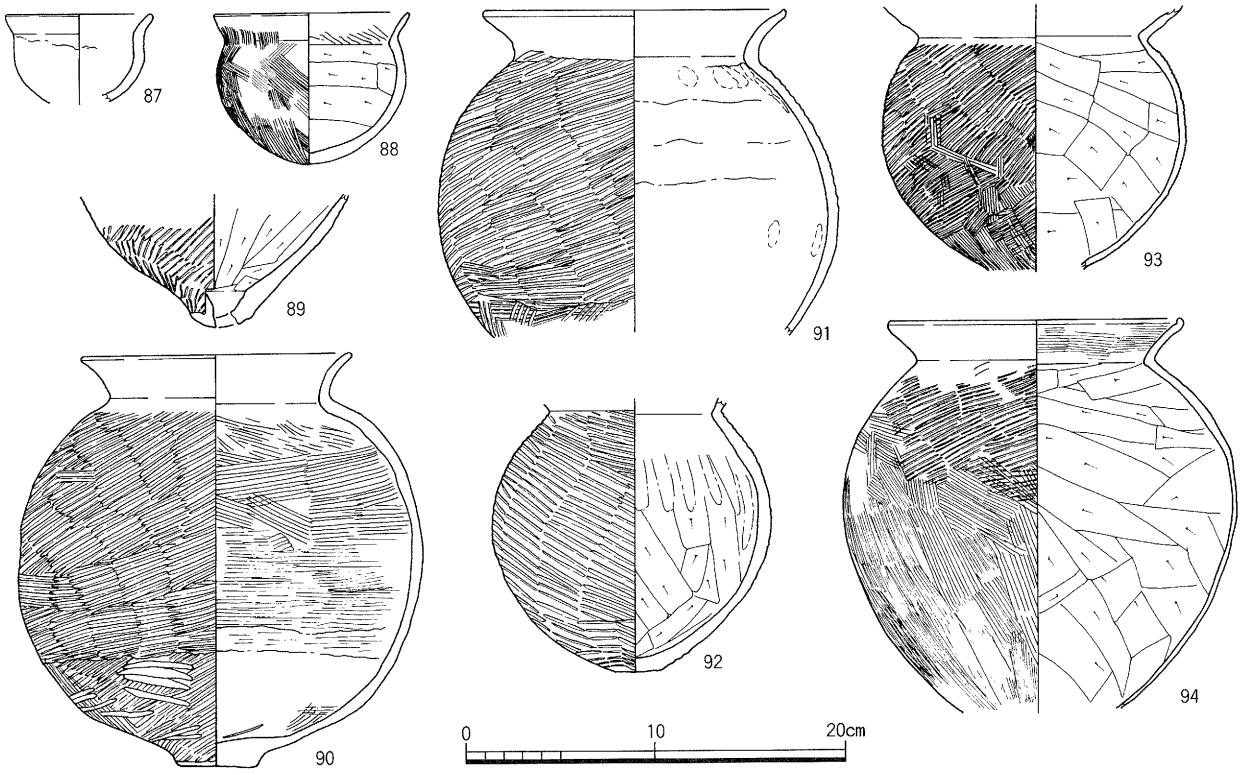
６区北西部の１ＣＤ地区で検出した。北部および西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.4m、南北幅0.95m、深さ0.35mを測る。埋土は２層から成る。弥生時代後期末に比定される土器類が極少量出土しているが図化し得たものは無い。

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ－１

１区南部のＳＫ－２とＳＫ－３に挟まれた地点で検出した。検出部分で東西幅0.6m、南北幅0.7mに広がっており、更に東側に続いている。古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が多量に出土している。

８点（87～94）を図化した。87・88は小形鉢である。87は半球形の体部に小さく屈曲する口縁部が付くもので、復元口径7.6cmを測る。色調は橙色。胎土は精良である。88は尖り底を有する。完形品で口径10.3cm、器高6.0cmを測る。口縁部から底部にかけて縦位のハケを多用する。内面は口縁部付近にハケ、体部にヘラケズリが施されている。色調は淡褐灰色。胎土中に１㎜以下の長石・角閃石を多く含む。89は有孔鉢で底部は焼成前の穿孔時に内面側から押されたため、底部端が出っ張る形となっている。体部外面はタタキ、内面はヘラケズリを多用する。色調は赤褐色。胎土中に２㎜以下の長石・石英・チャートを多く含む。90・91はＶ様式系甕に分類されるものである。90は完形品で体部下半が大きく拡張した球形の体部を有する。口径13.8cm、器高21.09cm、底径4.0cmを測る。底部は小さく突出する平底である。体部は三分割成形に沿ってタタキ調整が



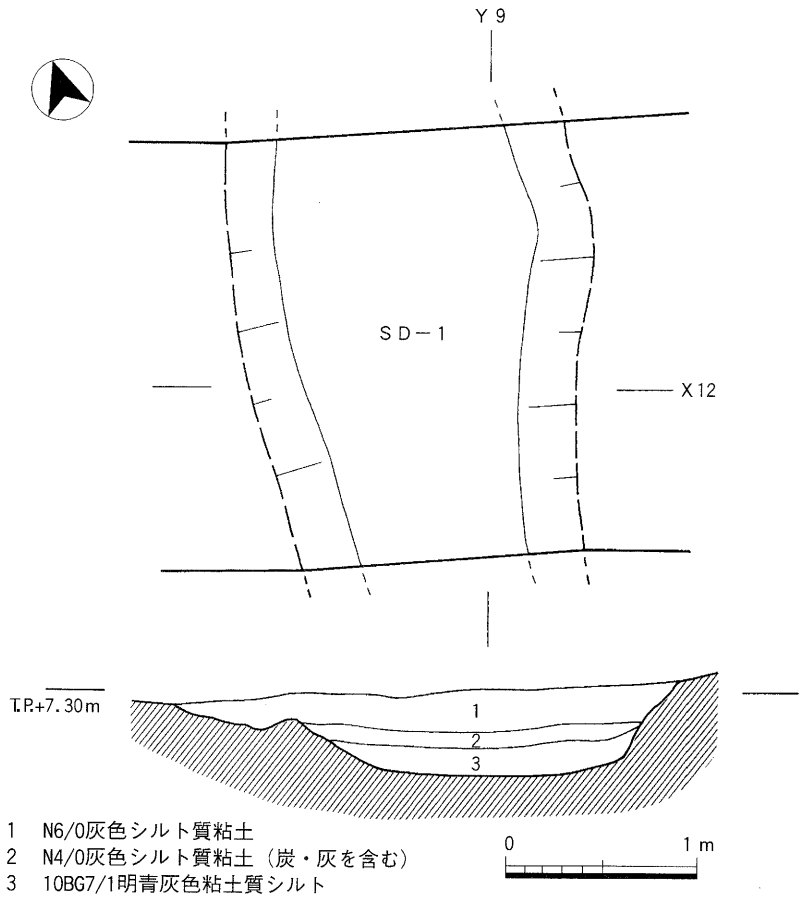
第25図　ＳＷ－１出土遺物実測図

行なわれており、下段についてはタタキの後ヘラ状工具によるミガキ状の条痕が散発的に施されている。体部内面はハケ状の条線が残る板ナデにより平滑にされている。91は体部中位以下を欠く。口径15.8cmを測る。二分割成形に沿ってタタキ調整が行なわれており、上段下部から下段にかけてタタキの後一部ハケでタタキメを消す部分がある。90・91は共に色調は淡黄橙色。胎土中に２㎜以下の長石・石英・チャートを含む。92は口縁部を欠くが底部が突出しない平底の他、屈曲部が「く」の字に鋭く曲る点や体部内面にヘラケズリを使用する点からみて在地産の胎土で作られた庄内式甕である。体部は二分割成形で上段のタタキ方向は中河内地方では少ない左上りである。93・94は生駒西麓産の胎土で作られた河内型庄内式甕である。93は小形の庄内式甕である。体部外面のタタキは右上りで単位は４本/cmである。タタキ調整の後、ハケを縦位に散発的に施している。94は体部最大径が体部の上位にあるもので、体部外面はタタキ調整の後、体部中位以下は縦位のハケでタタキの大半が消されている。93・94共に河内型庄内式甕の古相に位置付けられるが94のように中位以下のタタキメが全面にわたって消されるタイプは庄内Ⅱ期以降の特徴と考えられる。遺構の帰属時期は庄内Ⅱ期に比定される。

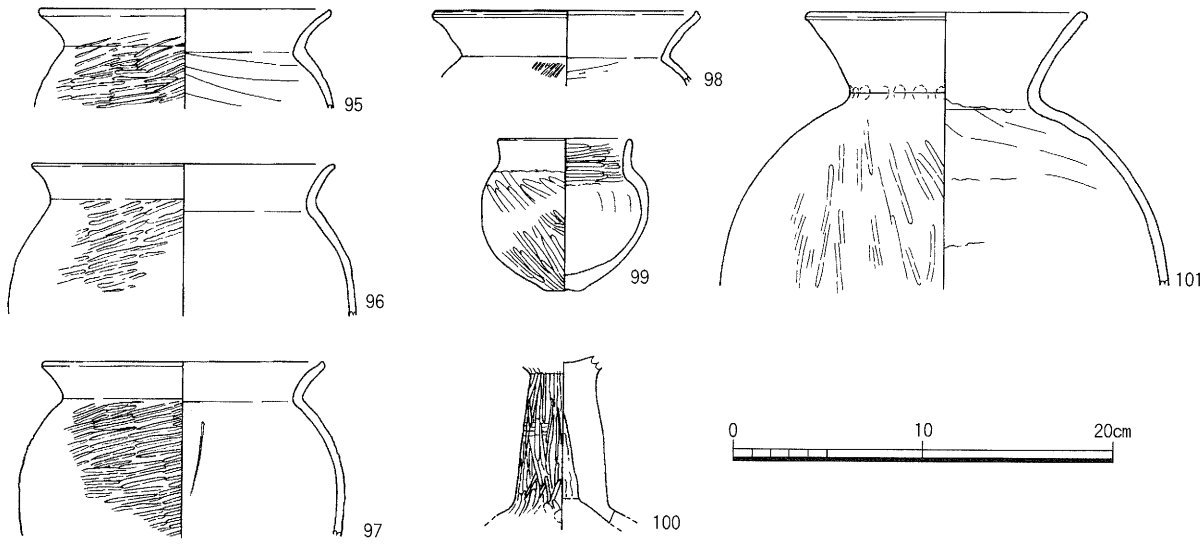
溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

１区北部の３Ｂ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長2.3m、幅1.8m、深さ0.1mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は３層から成る。遺物は２層から古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が出土している。４点（95～97・100）を図化した。95～97はＶ様式系甕である。３点共に口縁部の1/6程度が残存している。口縁部は屈曲外反するもので端部は水平方向に小端面を作る95、丸味を持って終る96、外傾する面を持つ97がある。体部外面上位のタタキは右上りで単位は３本/cmである。色調は95が淡赤褐色、96・97が褐灰色である。３点共にスコープで角閃石の含有を認める。100は有稜高杯の脚部である。柱状部は中空で外面調整には縦位のヘラミガキを多用する。色調は淡灰褐色。胎土中に１～２㎜大の長石・石英・チャートが散見される。古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される。



第26図　ＳＤ－１平断面図



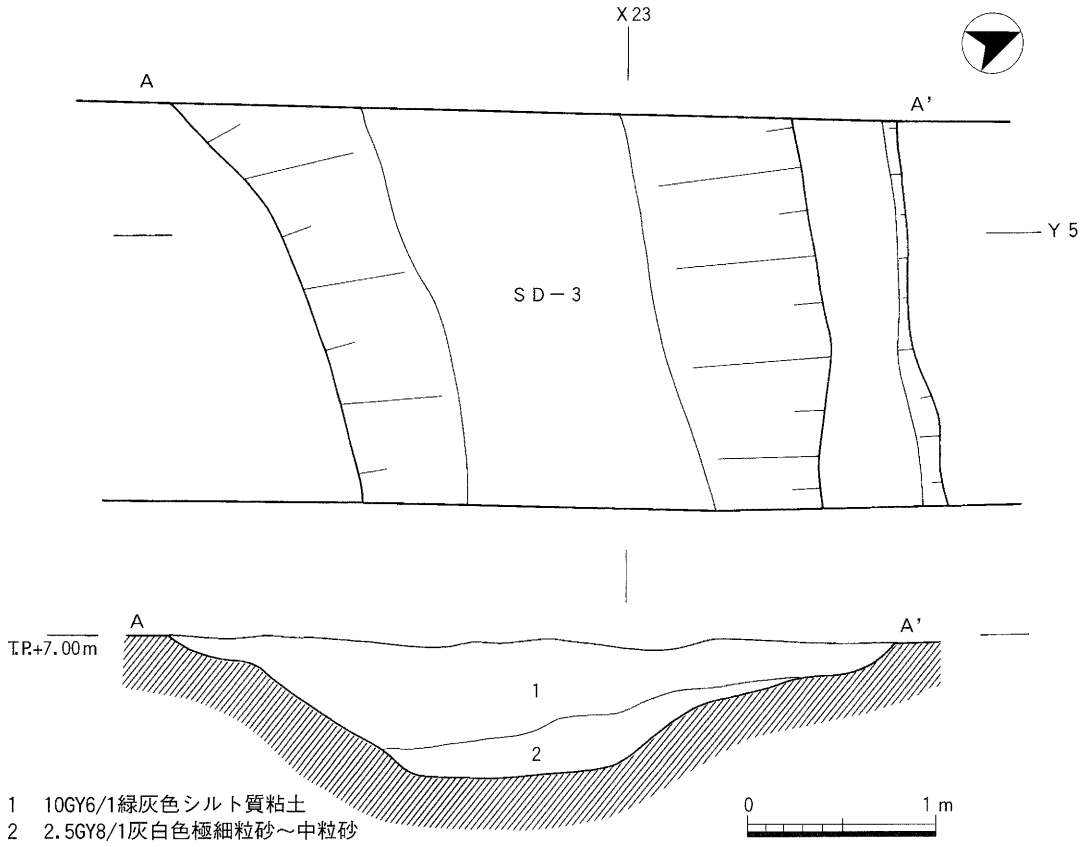
第27図　ＳＤ－１（95～97・100）、ＳＤ－２（98・99・101）出土遺物実測図

ＳＤ－２

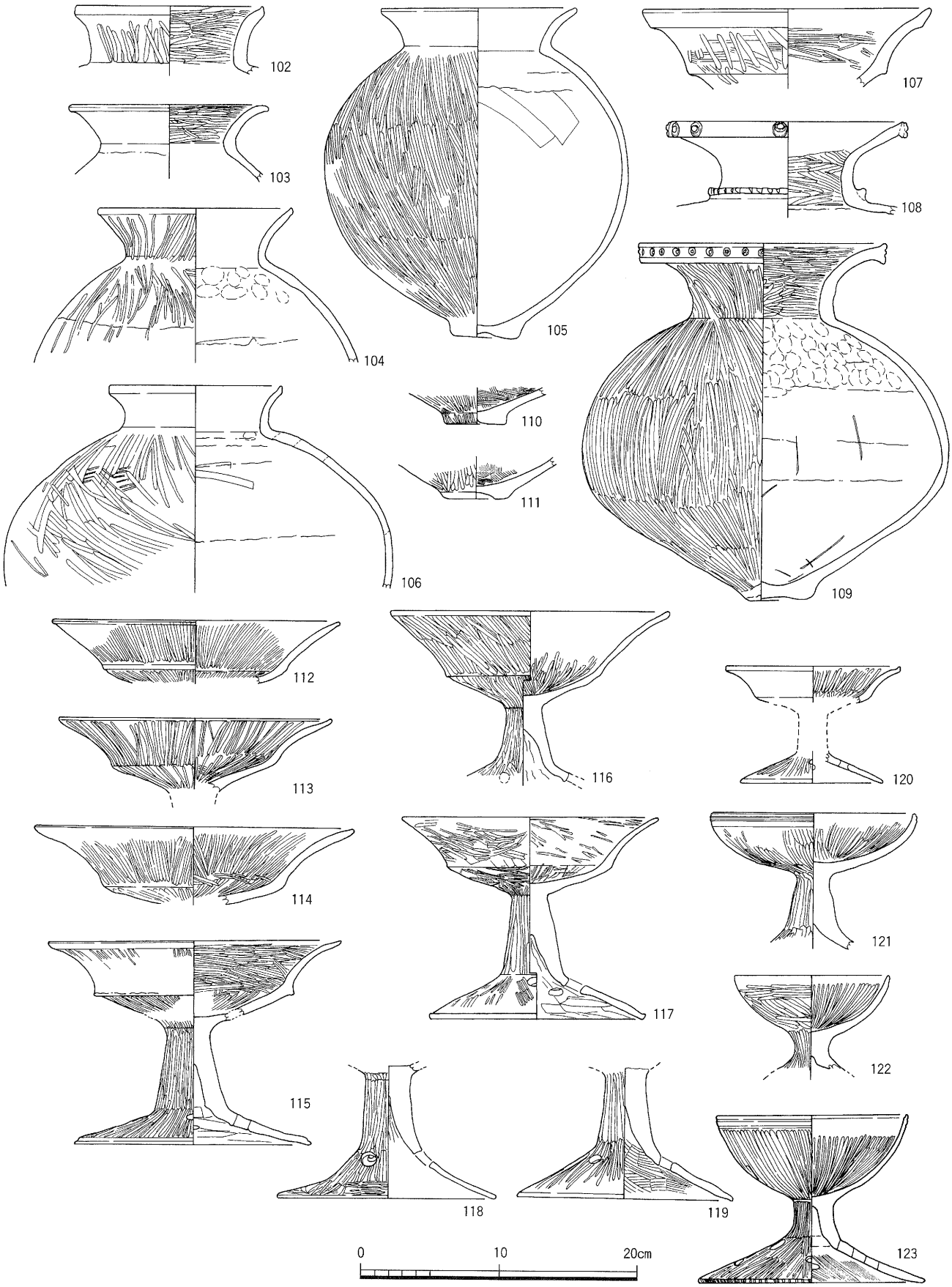
１区北部の２・３Ｃ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、南部でＳＤ－３、北部でＳＫ－１を切っている。検出長7.0m、幅0.3～0.6m、深さ0.15m前後を測る。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が少量出土している。３点（98・99・101）を図化した。98は庄内式甕の小破片である。復元口径13.8cmを測る。体部外面のタタキは右上りで単位は極細で６本/cm程度である。生駒西麓産。99は小形の短頸直口壷で図上で完形に復元が可能である。口径6.8cm、器高8.0cm、体部最大径8.7cmを測る。球形の体部に上外方短く伸びる口縁部が付くもので、体部最大径が口径を稜駕している。底部は小さな平底で裏面は窪む。体部外面および口縁部内面にミガキ調整が行なわれている。色調は灰白色。出土例が少ない器種で搬入品である。101は広口壷である。復元口径14.3cmを測る。体部外面には縦位のヘラミガキが施されている。色調は淡黄橙色。胎土は粗く0.5～２mm大の長石・石英・黒雲母を多量に含む。庄内Ⅱ期に比定される。

ＳＤ－３

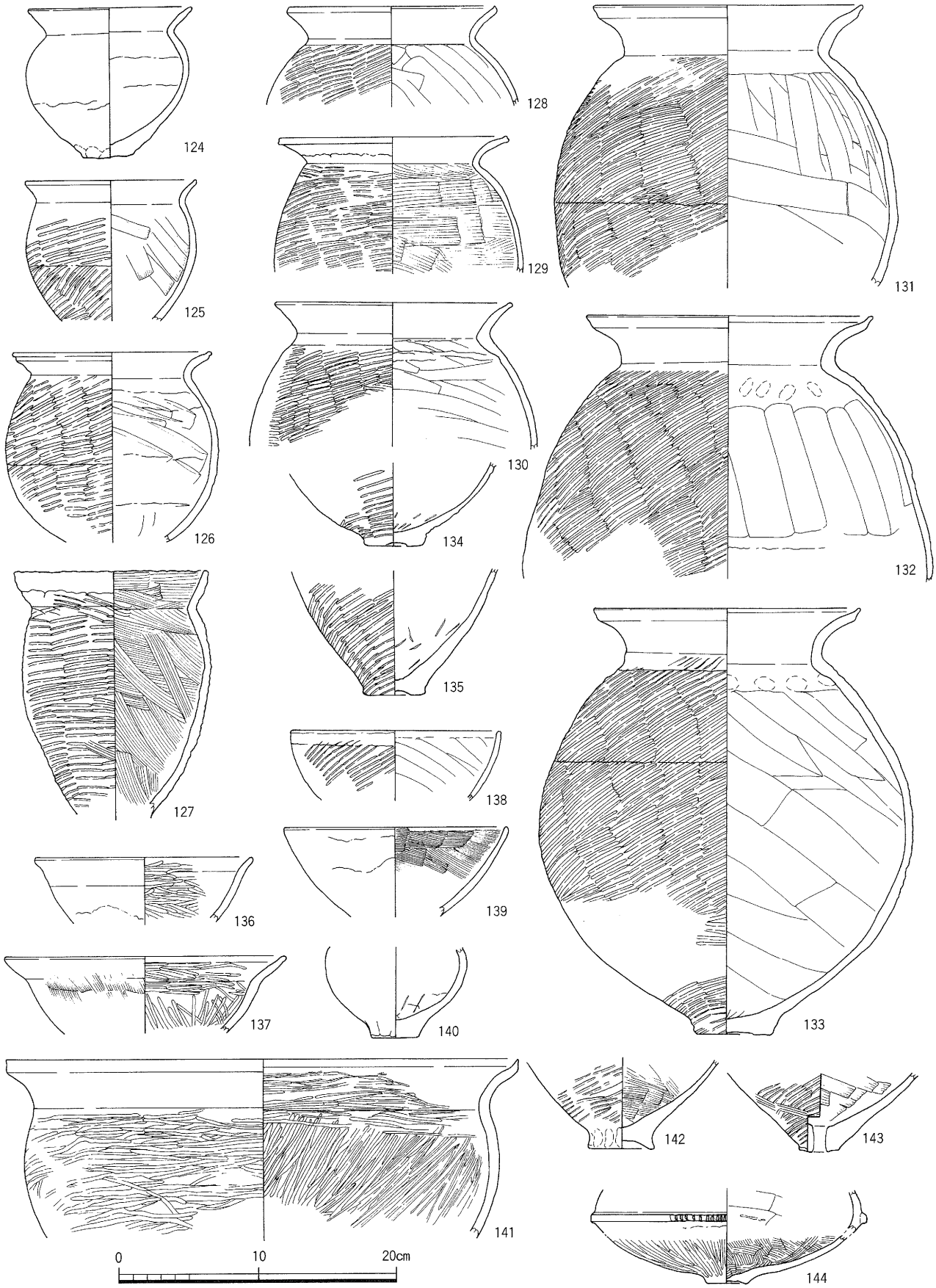
１区中央部から５区の中央部にかけて南西－北東方向に伸びる。検出長約10m、幅3.0m、深さ0.7mを測る。埋土は２層から成り上層が10GY6/1緑灰色シルト質粘土、下層が2.5GY8/1灰色極細粒砂～中粒砂である。遺物は、特に５区の東部から弥生時代後期末に比定される土器類が多量に出土した他、５区部分の溝肩部分から銅鏃１点（145）が出土している。北東部分については、２区で確認されていないことから、１区と２区の間をぬけて、６区の東部付近に伸びたものと推



第28図　ＳＤ－３（５区）平断面図



第29図　ＳＤ－３出土遺物実測図－１

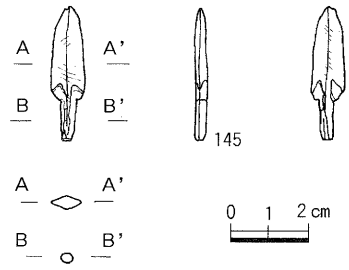


第30図　ＳＤ－３出土遺物実測図－２

定される。なお、３Ｄ地区西部で行われた範囲確認調査（藤井1998）では多量の土器が出土しているが、出土遺物からみて本遺構に対応する可能性が高い。44点（102～145）を図化した。全て弥生時代後期後半を中心とした資料である。壷類は10点（102～111）である。102～106・108・109は広口壷、107が二重口縁壷、110・111が壷底部である。102・106は頸部が斜上方に伸びた後、口縁部が小さく外反する。広口壷A_2に分類される。102が口縁部の1/3、106が口縁部から体部中位まで残存している。106は口径12.3cmを測るもので、体部形状は扁球形が想定される。色調は102が赤褐色、106が淡黄褐色で、106の体部外面に煤の付着が認められる。胎土は粗く102には0.5～５㎜大の長石・石英・花崗岩が散見される他、106には１～４㎜大の長石・石英・黒雲母を含んでおり共にスコープで角閃石の含有が認められる。103～105は球形の体部から口頸部が大きく外反するもので広口壷A_3にあたる。105が図上で完形に復元が可能で口径13.7cm、器高23.7cm、体部最大径21.7cmを測る。底部は突出した平底で裏面は窪み底である。体部外面は縦位の密なヘラミガキを施す。体部外面に煤、内面に炭化物が付着しており煮炊に使用されたものと考えられる。色調は103・105が浅黄褐色、104が灰褐色である。104が生駒西麓産。103・105は非生駒西麓産である。107は口縁端部外面に幅広の端面を形成する二重口縁壷である。復元口径20.5cmを測る。口縁部外面は横位のハケの後、幅広のヘラミガキを縦位に施す。色調は淡灰褐色。生駒西麓産である。108・109は大きく外反する口縁端部に垂下する端面を形成するもので広口壷D_1に分類される。108は体部上位から口頸部が残存している。口径16.8cmを測る。口縁端部に２個一対の竹管押圧円形浮文と頸部と体部の境に端面に刻み目を持つ凸帯が巡る。色調は浅黄橙色。胎土はやや粗く0.1～３㎜大の長石・石英・チャートが多量に含まれている他、スコープで角閃石の含有を認める。生駒西麓産。109は1/2以上が残存している。口径17.7cm、器高25.7cm、体部最大径26.4cmを測る。口縁端面に竹管文が施文されている。器面調整は外面では縦位のヘラミガキ、内面は口頸部が横位のヘラミガキ、体部上位に指頭圧痕が残る。色調は褐灰色。胎土は粗く0.1～１cm大の長石・石英・花崗岩・角閃石の含有を認める。生駒西麓産。110・111は壷の底部である。底部の形状は110が突出、111が僅かに突出するもので裏面はドーナツ底である。器面調整は共に体部外面が縦位のヘラミガキ、底部内面はハケが施されている。色調は110が褐灰色。111が浅黄橙色である。共に胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。高杯は12点（112～123）図化した。そのうち有稜高杯は９点（112～120）、椀形高杯は３点（121～123）である。有稜高杯（112～117・120）は有稜高杯D_1に分類されるもので、そのうち120は小形品である。杯部の口縁高が体部高を稜駕するもので、口縁部は緩やかに外反する。脚部は中空で屈折して開くもので。屈曲部が鋭く明瞭なもの115～117・120と丸味がある118・119がある。120を除く法量は口径18.2～22.7cm、器高14.5cm、裾径15.2～17.2cmを測る。小形の120は口径12.5cm、裾径10.3cmを測る。口稜比と口縁比の指数においては116を除けば口縁比56.8～69.5、口稜比25.1～28.6である。116については口縁比56.6、口稜比33.8で特に杯口縁部の増長に比例する口稜比の数値が高く庄内式期に盛行する有稜高杯Ｅ類に近い値を示している。器面調整は杯部外面が117を除いて縦位のヘラミガキ、内面は112～114、116・120が縦位、115・117が横位のヘラミガキを施す。スカシ孔は115が４個、116～119が３個である。色調は115が褐灰色、113・114・117～119が淡灰褐色、112・116・120が赤褐色である。胎土は全体に良好で褐灰色を呈する115が裸眼で角閃石が観察される他はスコープにより角閃石の含有が確認できる。119の裾部端の内外面には煤の付着

があるため煮炊き具の蓋としての二次使用が推定される。121は中実の脚部に浅い椀形の杯部が付くもので、椀形高杯A_2にあたる。口径14.7cm、杯部高4.2cmを測る。口縁部外面に２条の凹線が巡る。器面調整は内外面共に縦位のヘラミガキを多用している。色調は淡灰褐色。胎土中に0.5～４mm大の長石・石英・チャートの他、スコープで角閃石の含有を認める。122・123はやや深目の杯部に大きく開く脚部が付くもので、椀形高杯B_2に分類される。脚柱部は122が中実、123が中空である。122は杯部がほぼ完存しており口径11.1cm、杯部高4.0cmを測る。123は図上で完形に復元できる。口径13.8cm、器高12.0cm、杯部高6.0cm、裾部径16.3cmを測る。口縁部外面上位に２条の沈線の他、裾部端に刻み目が施されている。スカシ孔は三方で上下に６個穿たれている。器面調整は122・123共にヘラミガキを多用している。色調は122が赤褐色。123は淡赤褐色。胎土は精良でスコープにより角閃石の含有を認める。Ｖ様式甕は12点（124～135）を図化した。そのうち図上で完形に復元できるものは124・133の２点のみである。124～126は器高が16cm未満とされる小形品の甕Ａ－Ⅰに分類される。124が完形品で口径11.5cm、器高10.9cm、体部最大径11.5cmを測る。３点共に球形の体部から「く」の字状に屈曲する口縁部が付くもので、端部は丸く終る124、小さな端面を作る125、受け口状の端面を作る126がある。３点共に二分割成形によるもので、体部の外面調整はナデを行う124以外はタタキを行う。体部内面は124がナデ、125・126が板ナデを行う。色調は灰褐色。３点共に生駒西麓産である。127～130は全容を知り得たものは無いが器高が16～22cm未満とされる甕Ａ－Ⅱの範疇に含まれるものと推定される。波状口縁で体部が細身の127以外は当該期に通有なＶ様式甕である。口径は127が13.5cm、128～130は14.8～16.8cmを測る。色調は赤褐色～灰褐色。生駒西麓産である。131～133は133の法量から器高が27cm以上の甕Ａ－Ⅳに分類される。球形の体部から口縁部が強く外反するもので、端部は受け口状になる。全容を知り得た133は三分割成形によるもので、分割成形に沿ってタタキ調整が行なわれている。３点共に色調は淡灰褐色。胎土中に１mm未満の長石・石英・黒雲母・チャートの他、スコープで角閃石の含有が観察できる。３点共に体部および口縁部の形態や色調、胎土等に共通点が認められため同一工人により製作されたものである蓋然性が高い。134・135は甕Ａの底部である。底部は突出する134と小さく突出する135がある。裏面はドーナツ底である。色調は134が灰褐色、135が赤褐色である。胎土は134が良好、135は１～３mm大の長石、石英、花崗岩、チャートを多く含む他、スコープで角閃石の含有を認める。鉢は８点（136～143）図化した。136は摺鉢状の体部に小さく外反する口縁部が付く小形鉢Ａである。復元口径15.3cmを測る。137は中形鉢Ａに分類されるもので、復元口径19.8cmを測る。色調は共に灰白色。生駒西麓産である。138・139は直口の口縁部を持つ小形鉢Ｂである。復元口径は138が14.8cm、139が16.0cmを測る。体部外面は138がタタキ、139がナデ、体部内面は138がナデ、139がハケを行う。色調は138が褐灰色、139が淡灰褐色である。生駒西麓産。140は口縁部を欠くが内湾して伸びる体部に直口の口縁部が付く小形鉢Ｃに分類される。底部は突出平底である。色調は灰褐色。生駒西麓産である。141は内湾して立ち上がる体部から口縁部が外反して伸びるもので、端部は垂直方向に伸び幅広の端面を作る大形鉢Ｂに分類される。器面調整は口縁部外面がナデ、内面横位のヘラミガキ、体部外面横位、内面縦位のヘラミガキを施す。色調は赤褐色。胎土は精良で１mm未満の長石・石英・黒雲母の他、スコープにより角閃石の含有が認められる。生駒西麓産。142は底部が上げ底を呈する小形鉢であるが、口縁部を欠くため型式は限定できない。色調は灰白色。生駒西

麓産。143は有孔鉢Ａである。体部外面はタタキ調整。色調は淡灰褐色。生駒西麓産。144は手焙形土器である。体部中位以下が残存している。扁球形の体部中位に凸帯が巡るもので凸帯の上面に刻み目を入れる。底部は小さく突出する平底で裏面は窪み底である。色調は灰褐色で底部付近はほぼ全面に黒斑が認められる。生駒西麓産である。145の銅鏃は有茎鏃で逆刺を持つ凹基式に分類される。赤銅色で錆は少なく先端部分を僅かに欠く以外は完存している。



第31図　ＳＤ－３出土遺物実測図－3

鏃身の断面は菱形、茎部の断面は円形を呈する。全長3.5cm、鏃身最大幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。田中勝弘氏分類（1989田中）のＢ－ｂ－４にあたる。跡部遺跡内では、第５次調査（ＡＴ89－５）で本例と同規模の銅鏃が１点出土しているほか、第10次調査（ＡＴ92－10）でも平基式有茎鏃が１点出土している。出土遺物から遺構の帰属時期は原田編年の様相３（弥生時代後期後半－新相）に比定される。

ＳＤ－４

２区北部の３Ｅ地区で検出した。北東－南西方向に伸びるもので、検出長1.4m、幅0.3m、深さ0.2mを測る小溝である。埋土はＶ字形の断面形状に沿って粘土質シルトを中心とする３層が堆積している。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が少量出土している。椀形高杯１点（146）を図化した。杯部の大半を欠く。外面調整は柱状部から杯部下半にかけて横位の密なヘラミガキを行う。胎土は精良である。庄内Ⅱ～Ⅲ期に比定される。

ＳＤ－５

２区の４・５ＤＥ地区で検出した。南西－北東方向に伸びるもので、検出長1.0m、幅4.2m、深さ0.54mを測る。埋土は逆台形を呈する掘方形状に沿って粘土質シルトを主体とする３層が水平に堆積している。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が少量出土している。ただ、１区・３区においてＳＤ－５に対応する溝が無いため、土坑であった可能性がある。

ＳＤ－６

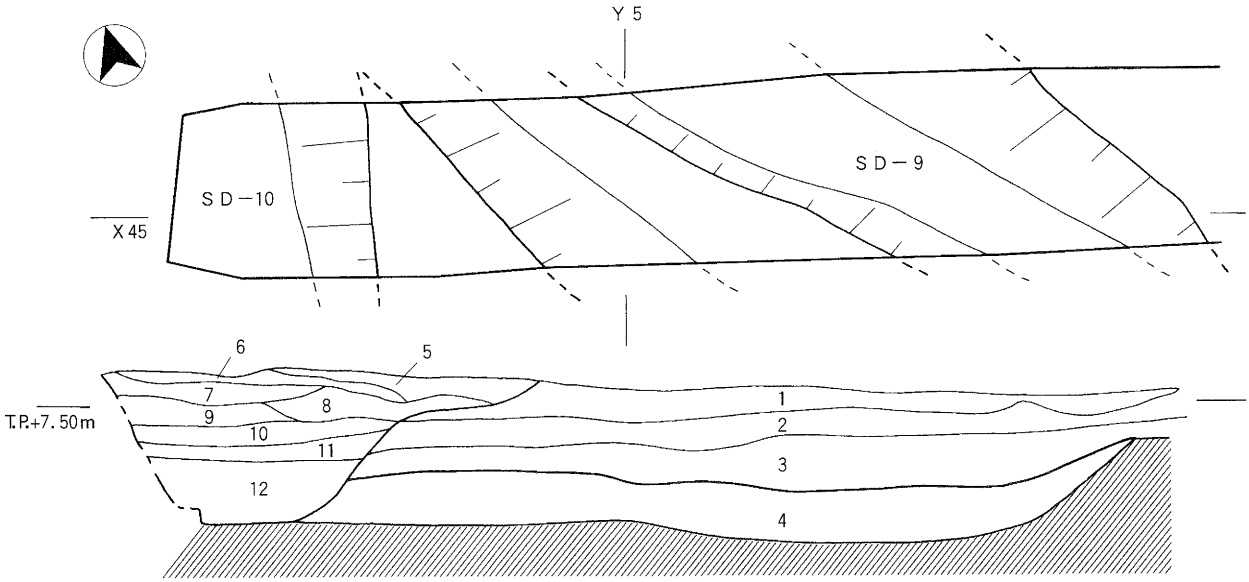
３区東端の７Ｄ地区で検出した。東肩が調査区外のため幅等は判然としない。検出部分で、東西幅0.75m、南北幅1.2m、深さ0.15m前後を測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は庄内Ⅱ期に比定される土器類が少量出土しているが図化し得たものは無い。

ＳＤ－７

３区の７Ｃ地区で検出した。北東－南西方向に伸びる。検出長1.0m、幅0.25～0.6m、深さ0.07mを測る。埋土は明緑灰色粘土質シルトと暗灰色シルトの互層である。遺物は弥生時代後期末に比定される土器類が少量出土している。

ＳＤ－８

３区西部の７ＡＢ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長1.1m、幅1.95～2.4m、深さ0.1m前後を測る。埋土は断面部分で確認したものを含めて、粘土質シルトが優勢な４層が水平に堆積している。遺物は弥生時代末に比定される土器類が出土しているが、第９層上面が本来の構築面であるため、時期的には古墳時代初頭以降が推定される。



1　10YR4/1褐灰色砂質シルト
2　基本層序第8層
3　基本層序第9層
4　N4/0灰色シルトと10GY7/1明緑灰色シルトの互層（ＳＤ－９）
5　5Y7/3浅黄色極細粒砂～中粒砂
6　2.5GY8/1灰白色シルト
7　2.5GY8/1灰白色シルト質粘土
8　N7/0灰白色シルト質粘土
9　10BG7/1明青灰色粘土
ＳＤ－10

10　N6/0灰色粘土
11　N6/0灰色シルト質粘土
12　N5/0灰色シルト質粘土
ＳＤ－10

0　1　2 m

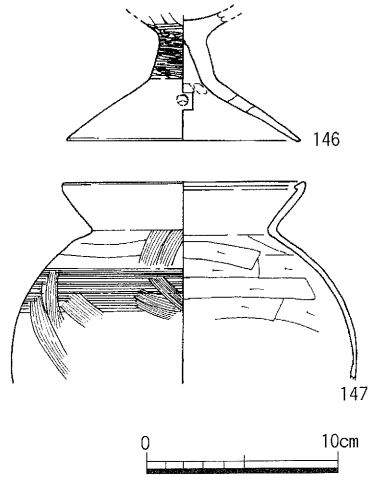
第32図　ＳＤ－９、ＳＤ－10平断面図

ＳＤ－９

４区西部の9・10ＡＢ地区で検出した。北西－南東方向に伸びるもので、検出長1.0m、幅2.7m、深さ0.25mを測る。埋土は炭・灰を含むN4/0灰色シルトと10GY7/1明緑灰色シルトの互層である。遺物は弥生時代後期末に比定される土器類が少量出土しているが図化し得たものは無い。

ＳＤ－10

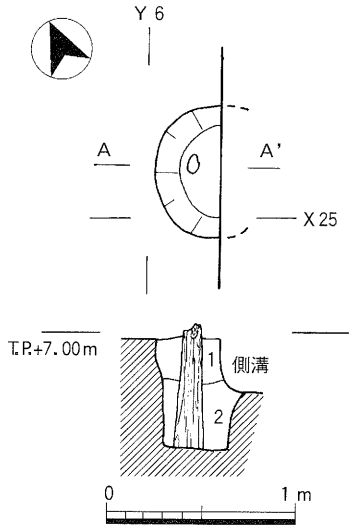
４区西端の9・10Ａ地区で検出した。西肩が調査区外に至るため幅等は判然としない。検出部分で検出長0.9m、東西幅1.0m、深さ0.05mを測る。検出部分の埋土は灰色シルト質粘土である。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器類が少量出土している。なお、この遺構は第８層を切り込む遺構で、調査では底部の一部を検出したにすぎない。断面部分の観察では、本来の深さは0.75m程度を測る。布留式甕１点（147）を図化した。147は口縁部から体部中位までがほぼ完存している。口径12.5cmを測る。体部外面の器面調整は肩部付近が横位のハケの他は縦位のハケ、内面は屈曲部付近までヘラケズリが行なわれている。色調は淡灰褐色。外面は全面に煤の付着が顕著で、一部に火熱による器面剥離が認められる。胎土は良好で裸眼とスコープで長石・石英・黒雲母・角閃石の含有を認める。布留１期に比定される。



第33図　ＳＤ－４（146）、ＳＤ－10（147）出土遺物実測図

小穴（ＳＰ）

小穴は10個（ＳＰ－１～ＳＰ－10）を検出した。検出位置からみて、２区の北部と５区での分布が確認される。上面の形状では円形ないしは楕円形を呈するものが大半で、ＳＰ－８を除けば径0.1～0.35m、深さ0.05～0.25mを測る。ＳＰ－８は５区中部の５Ｂ地区で検出した。南北方向に長い楕円形で、東西径約0.65m、南北径0.7m、深さ0.58mを測る。内部から長さ0.66m、幅0.1～0.15mを測る柱根が検出されており、建物を構成する柱穴であった可能性が高い。埋土はＳＰ－８が上下２層から成る他は、灰色粘土質シルトの単一層である。遺物はＳＰ－５・６・８・９・10から、古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土器類が極少量出土しているが図化し得たものは無い。



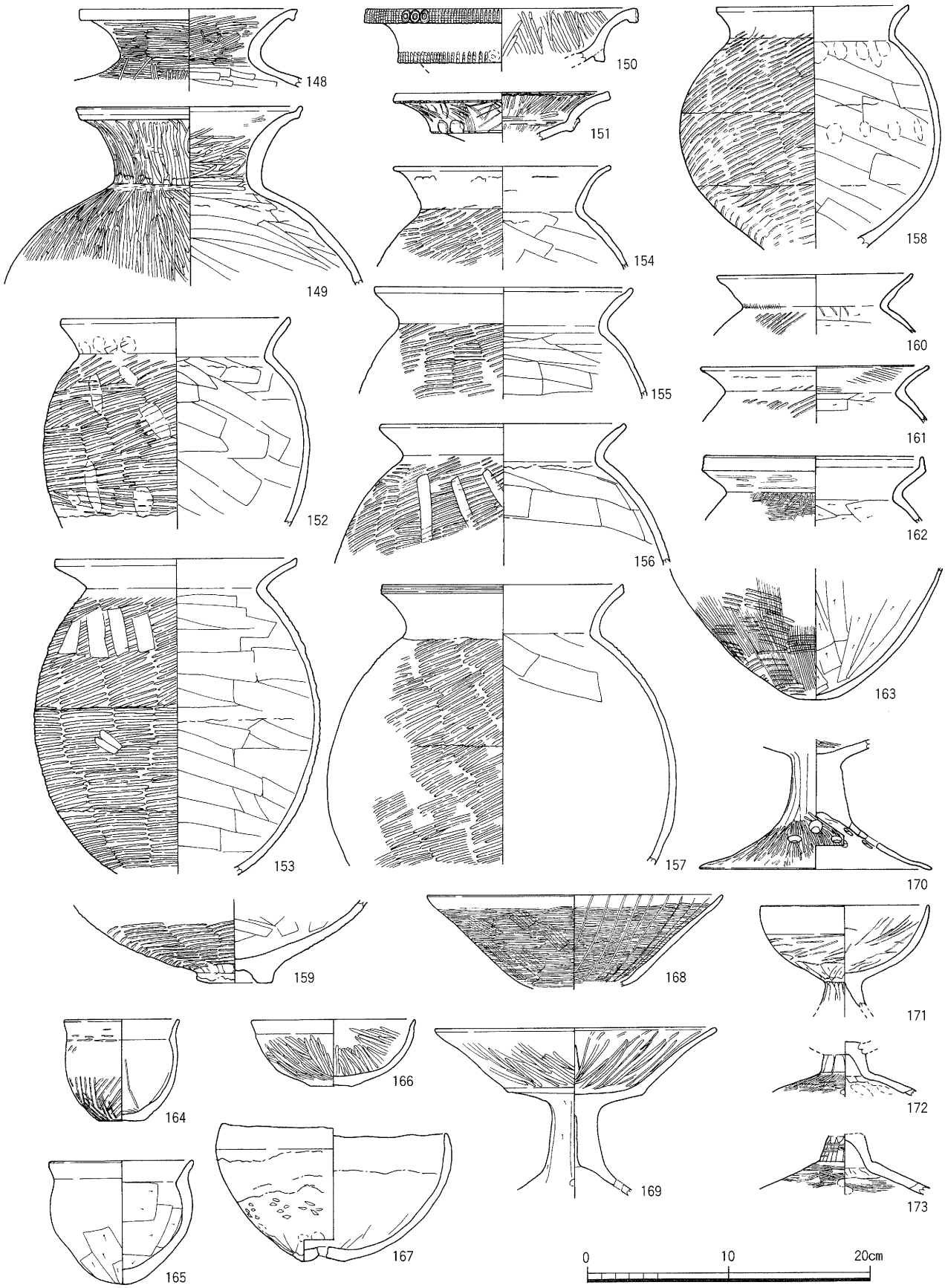
1　N3/0暗灰色粘土質シルトと
　　10GY6/1緑灰色シルト質粘土の互層
2　2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂混粘土
　　N3/0暗灰色粘土質シルトのブロック

第34図　ＳＰ－８平断面図

・遺構に伴わない遺物

第９層出土遺物

26点（148～173）を図化した。弥生土器・古式土師器がある。148・149は広口壷である。口縁部の外反形態の違いにより148が広口壷A_1、149が広口壷A_3に区別される。148は口頸部が完存しており口径15.4cmを測る。口縁端部は小さく垂下し内傾する幅広の端面を作る。口頸部内外面共に横位の密なヘラミガキを施す。色調は灰褐色。生駒西麓産。149は体部から口縁部が完存している。口頸部は大きく外反するもので、端部は受け口状の形態をとる。外面は口縁部がヨコナデ以下頸部と体部は縦位のヘラミガキ、内面は口頸部が横位のヘラミガキ、体部はナデを施す。色調は赤褐色。生駒西麓産である。150は二重口縁壷Ｂの小破片である。口縁端部ならびに口縁部下端に垂下する幅広の端面を形成するもので、簾状文を施文した後、口縁部に３個単位の竹管押圧円形浮文を施す。口縁部下端にも竹管円形浮文の貼り付けの痕跡が認められるが破片のため全容は不明である。色調は褐灰色。生駒西麓産である。151は加飾を施した二重口縁壷Ｂである。口縁部の1/4が残存している。復元口径15.0cmを測る。口縁部内面上位に波状文、外面上端と下端に刻み目、下端に円形浮文を貼り付ける他、ヘラ描きによる鋸歯文状ならびに直線文から成る施文が行われているが、破片のため全体の文様構成は不明である。色調は褐灰色。生駒西麓産。Ｖ様式系甕は８点（152～159）を図化した。ただ、検出面した遺構の時期が弥生時代後期末～古墳時代前期前半（布留式古相）におよぶため包含層である９層中からはＶ様式甕と庄内式期以降のＶ様式系甕の両者が混在して出土しているが、形態のみで両者を峻別することが困難であるため便宜上Ｖ様式系甕と呼称しておく。全容を知り得たものはない。口縁部は「く」の字状で端面は丸丸く終るもの154～156と小端面を作る152・153・157・158がある。体部が概ね三分割成形によるものが大半でタタキ調整は分割に沿って行なわれており、タタキの角度を変えるもの152・153と157・158のように連続ラセン状タタキが行なわれるものがある。タタキの後、ナデや板ナデによりタタキ調整を消す行為は152・153・155・156に認められる。159は底部である。突出平底で裏



第35図　第９層出土遺物実測図

面はドーナツ底である。色調は灰白色～褐灰色。胎土は裸眼では確認できないが、スコープにおいては全てで角閃石の含有を認める。生駒西麓産である。160・161は河内型庄内式甕の小破片である。共に口縁部の約1/4が残存している。復元口径は160が13.8cm、161が15.8cmを測る。色調は褐灰色。生駒西麓産。162は口縁部が「く」の字に屈曲した後、外傾して直上方に伸び広端面を形成する吉備地方産の甕である。色調は灰褐色。高橋護氏編年（1988高橋）のⅨ－ａ期ないしはⅨ－ｂ期（弥生時代後期末）に対比される。163は河内型庄内式甕の体部下半の資料である。体部外面のヘラケズリは上方に向かって削られており、深めで痕跡が明瞭に残る。色調は褐灰色。生駒西麓産。164～166は鉢で小形品である。164・165は平底の底部から内湾して体部が伸びるもので、口縁部は斜上方に小さく伸びる。共に1/2以上が残存している。体部の器面調整は164がタタキ、165は下半にヘラケズリを行う。法量は164が口径8.1cm、器高7.3cm、底径3.4cm。165が口径10.0cm、器高8.7cm、底径1.6cmを測る。色調は164が赤褐色、165が褐灰色である。生駒西麓産。166は椀形の体部に小さく外反する口縁部が付く。底部は突出の小さな平底である。体部は内外面共にヘラミガキを多用する。色調は淡灰褐色。角閃石を含む生駒西麓産であるが、当該期においては類例の少ない器種である。167は内湾して伸びる深目の体部に直口の口縁部が付く中形の有孔鉢である。全体に雑な作りで、口縁端部が波状を呈する他、体部外面にクラック、指頭圧痕、粘土紐痕が明瞭に残る。底部の孔は上部で1.0cmを測るもので、焼成前に上部から下部に向かって穿たれている。色調は灰白色。胎土は精良。非生駒西麓産である。高杯は６点（168～173）を図化した。有稜高杯は３点（168～170）である。169の杯部はほぼ水平な杯体部から口縁部長が長く伸びるもので、柱状部は中空である。全体にやや雑な作りで、柱状部外面は一次調整のケズリの段階で完了している。口縁比、口稜比の指数は口稜比47.9、口縁比34.8で庄内式古相に盛行する有稜高杯E_2にあたる。色調は淡赤褐色。生駒西麓産。168は精製の有稜高杯の杯部片である。復元口径21.3cmを測る。内外面共にハケ調整の後、横位の密なヘラミガキを行うもので、内面は更に放射状にヘラミガキを装飾的に施す。色調は赤褐色。胎土は精良である。スコープで角閃石の含有を認める。170は有稜高杯の脚部で柱状部は中実である。裾部径16.5cmを測る。スカシ孔の穿ち方は特異なもので、円孔三個を三角形状に配するものを三方に穿っている。色調は淡灰褐色。スコープで角閃石が観察できる。171～173は椀形高杯である。171は精製品で杯部の1/2が残存している。口径12.0cmを測る。杯部外面口縁部はヨコナデ、以下はヘラケズリ、内面はナデを施す。172・173は脚部片で171と同様精製品である。色調は171・173が淡灰褐色、172が赤褐色である。胎土は３点共に精良であるが、スコープで角閃石の含有を認める。

参考文献

弥生土器・古式土師器

・原田昌則　2003「第５章　遺構・遺物の検討　第１節　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線４工区に伴う－』（財）八尾市文化財調査研究会報告74　（財）八尾市文化財調査研究会

・原田昌則　1993「第５章まとめ　３）中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）』（財）八尾市文化財調査研究会報告37（財）八尾市文化財調査研究会

・楠　正勝　2003「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究ＸＸⅣ－庄内式併行期の土器生産とその動き－「越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相」』庄内式土器研究会
装飾器台の部分名称は本書に従っている。なお、中河内地域での出土例は、八尾市の『亀井北（その１）』１号墓マウンド上面で１点、久宝寺遺跡〔2003年（財）大阪府文化財センターによる水処理施設建設に伴う調査〕で１点（亀井　聡氏よりご教示。未報告。）がある。
・大久保哲也　1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会他
・大久保哲也　1993「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について－下川津Ⅵ式以降の様相－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』
・高橋　護　1999「弥生時代末期の土器編年」『研究報告９』岡山県立博物館

銅鏃

・田中勝弘　1989「銅鏃」『季刊考古学第27号　青銅器と弥生社会』雄山閣

報告書

・安井良三・成海佳子　1991「跡部遺跡発掘調査報告書－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－」『（財）八尾市文化財調査研究会報告31』（財）八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1997「Ⅰ跡部遺跡第10次調査（ＡＴ92－10）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告58』（財）八尾市文化財調査研究会
・藤井淳弘　1998「付編.跡部遺跡（96－580）の調査（その２）」『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財報告38　八尾市教育委員会

第３章　まとめ

今回の調査では、各調査区ともに狭小であったにも拘わらず、ほぼ全域にわたって密な遺構分布が看取された。ただ、全容が知り得た遺構は少なく遺構の性格についても不明な点が多い。検出した遺構の時期は概ね弥生時代後期末、古墳時代初頭前半～後半（庄内式古相～新相）、古墳時代前期前半（布留式古相）の３時期に限定される。以下、時期毎に既往調査との関係を含めて概観する。

弥生時代後期末（様相３－後期後半新相）

当該期の遺構は１区・５区で検出されたＳＤ－３、および４区のＳＫ－８・ＳＫ－９がある。ＳＤ－３については、３Ｄ区西部で行われた試掘調査でも検出されており、おそらく南西－北東方向に流路をもつものと推定される。そのうち、５Ｂ区および３Ｄ区西部で行われた試掘調査では多量の土器が出土しており、溝としての本来の機能に加えて廃棄場的な性格を帯びた遺構と推定される。

古墳時代初頭前半～後半（庄内Ⅰ～Ⅲ期－庄内式古相～新相）

今回検出した遺構のなかで、最も多く集中するのがこの時期に比定される遺構群で、なかでも古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定されるものが大半を占めている。庄内式古相段階におい

ては、本調査地の北東部および北に隣接する第５次調査（ＡＴ89－５）および第７次調査（ＡＴ92－７）で検出されており、当該期の墓域が調査地点の北西約80ｍ地点（市教委昭和56年調査）で検出されていることから、当地付近に部分的な移動はあるものの継続的に居住域が設けられていたことが推定される。

古墳時代前期前半（布留Ｉ期ー布留式古相）

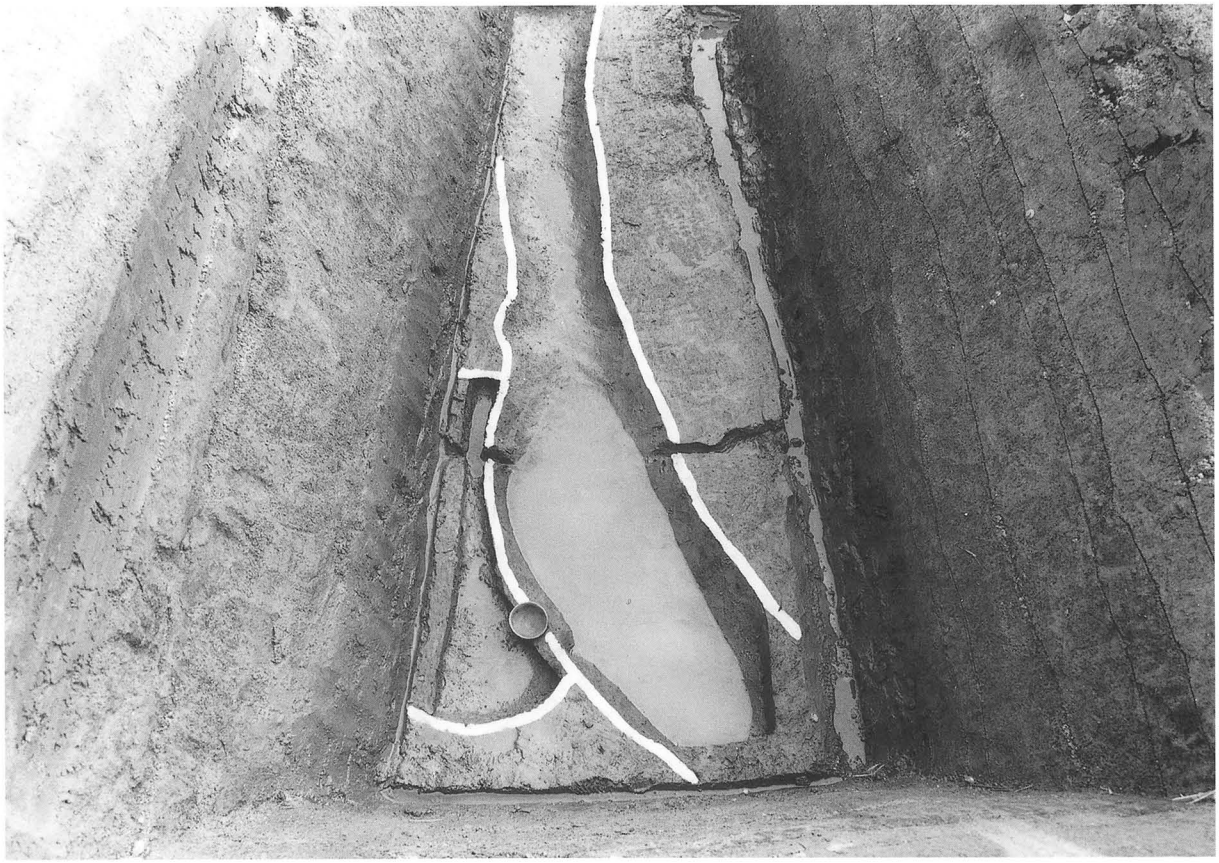
この時期の遺構は２区でＳＫ－４、４区でＳＤ－10、５区でＳＥ－１等が検出されているが、他時期に比して分布密度は粗い。包含層から出土した当該期の遺物も該して少なく、比較的短期間のみ存続した居住域であったと推定される。周辺で実施された既往調査では、北東に隣接した第５次調査（ＡＴ89－５）で竪穴住居が１棟検出されているほか、南東約70ｍ地点の第32次調査（ＡＴ2001－32）、東約130ｍ地点の第15次調査（ＡＴ93－15）で同時期の遺構・遺物が検出されており、現時点では、当調査地点から東部および南東部にかけて当該期の居住域の拡がりが想定される。

参考文献

・高木真光 1983「第６章 跡部遺跡発掘調査概要報告」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告２』(財) 八尾市文化財調査研究会
・安井良三他 1991「跡部遺跡発掘調査報告書－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告31』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1993「Ｉ跡部遺跡（第７次調査)」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告39』(財) 八尾市文化財調査研究会
・岡田清一 1994「５．跡部遺跡第15次調査（ＡＴ93－15)」『平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・岡田清一 2003「Ｉ跡部遺跡（第32次調査)」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告76』(財) 八尾市文化財調査研究会

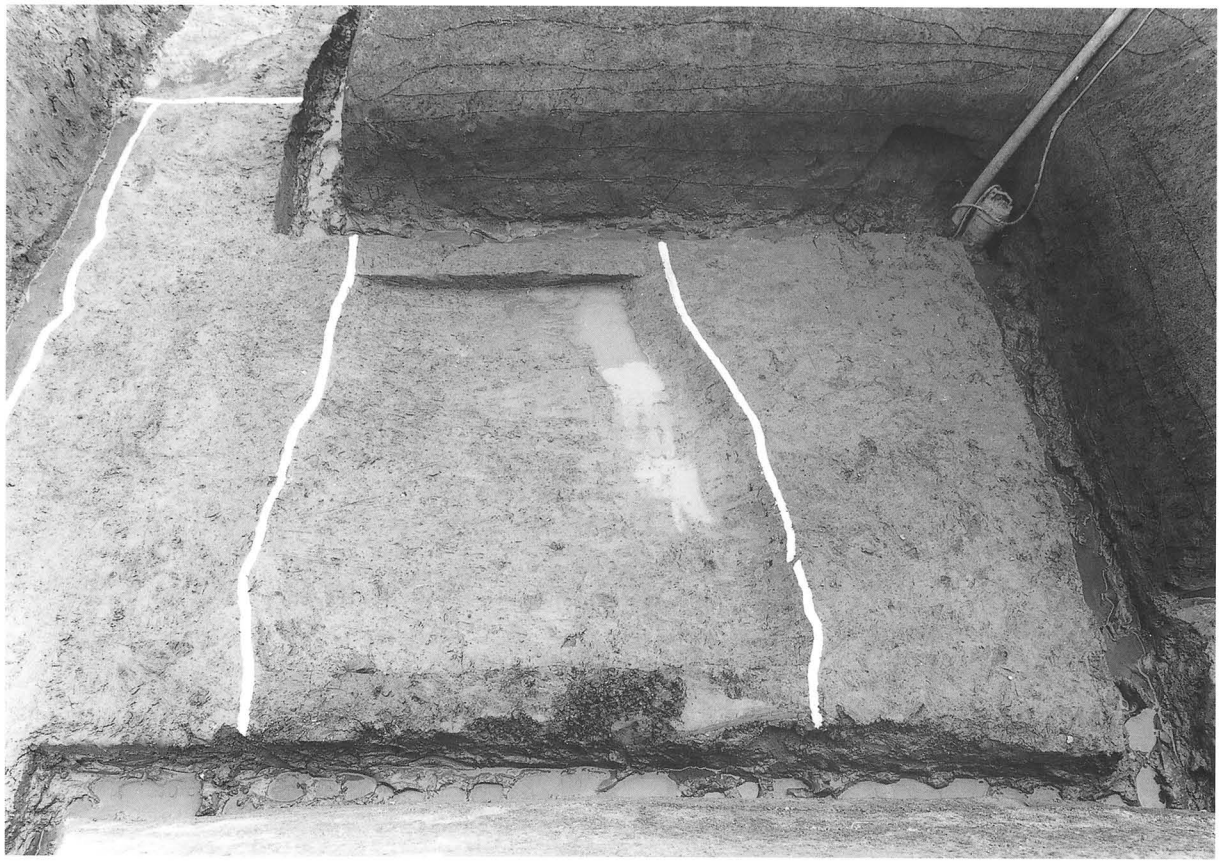
図　　版

1区　全景（北から）

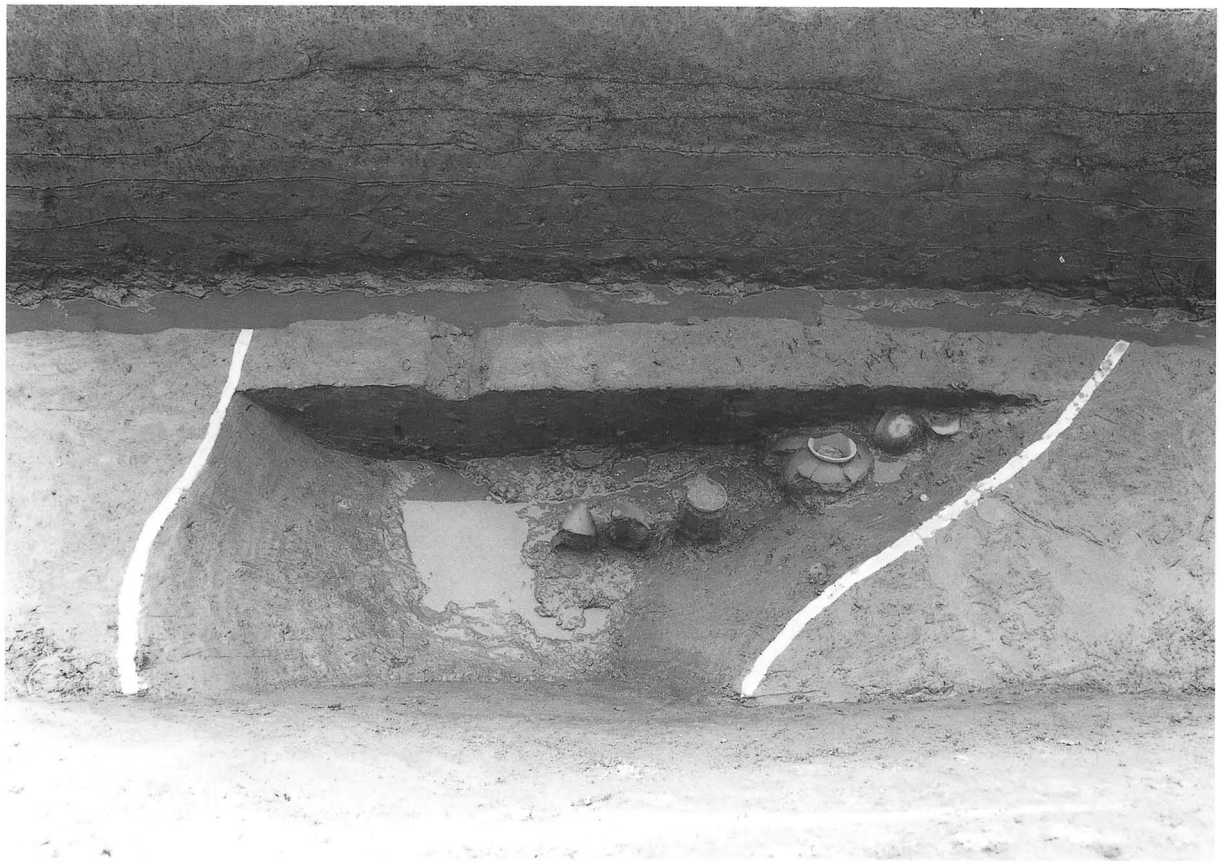


1区　ＳＫ－１、ＳＤ－２検出状況（北から）

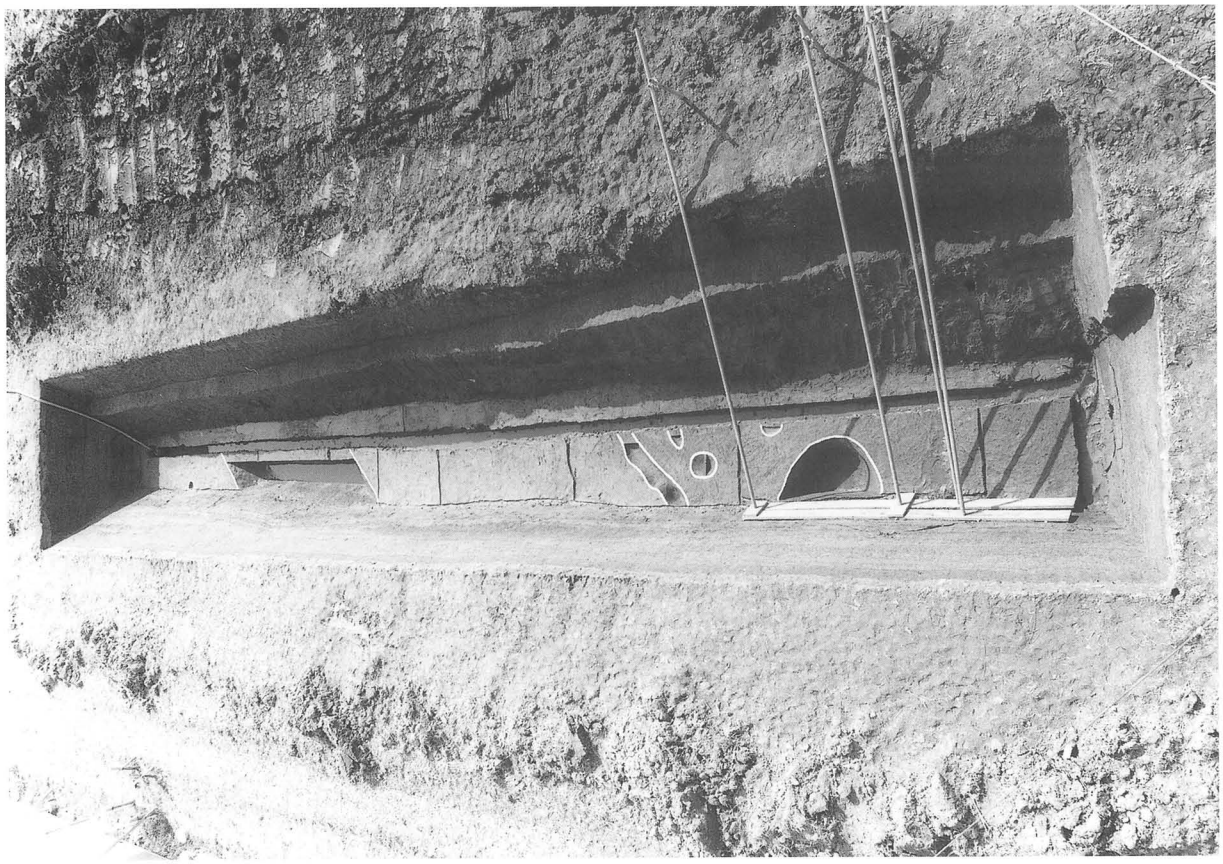
図版二



１区　ＳＤ－１検出状況（北から）



１区　ＳＫ－２検出状況（東から）

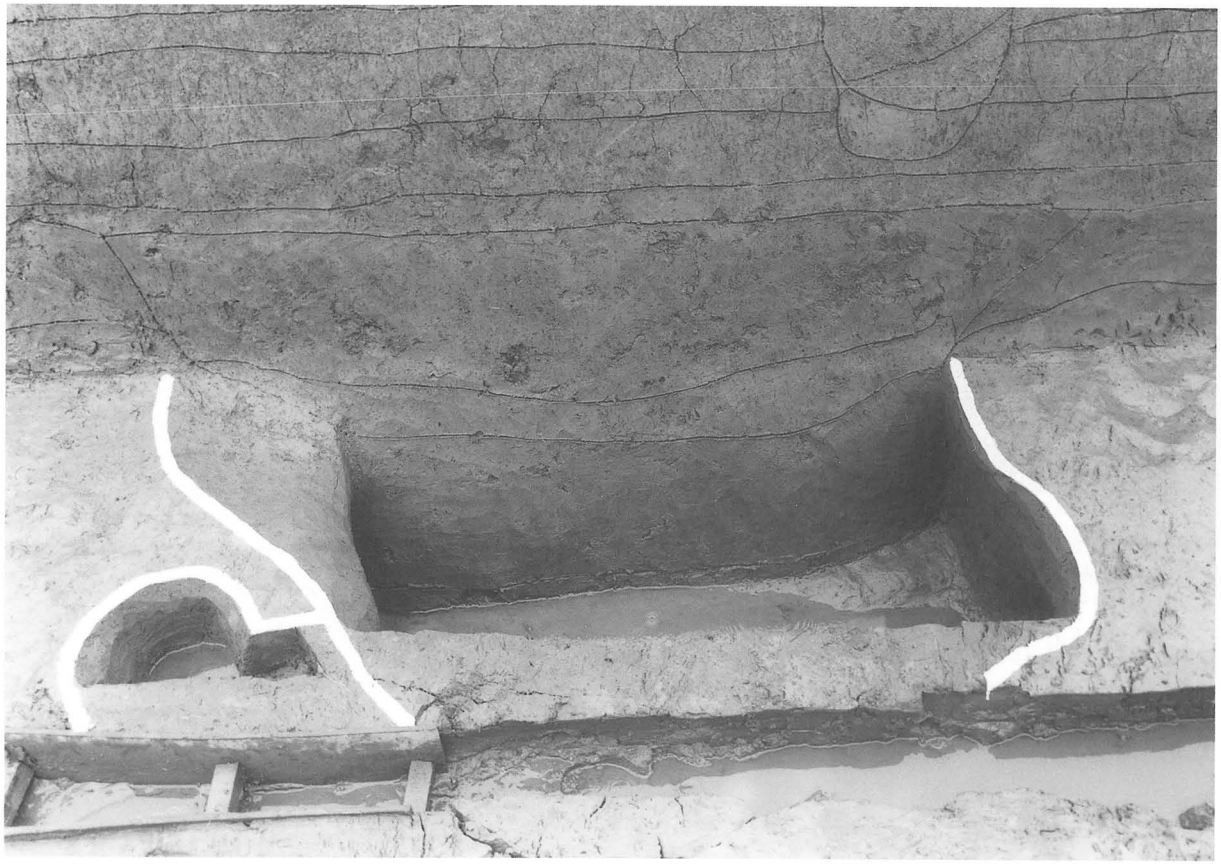


2区　全景（北から）

2区　ＳＤ－５検出状況（東から）

図版四

3区　全景（東から）



3区　ＳＫ－５検出状況（南から）

3区　ＳＫ－６検出状況（北から）

3区　ＳＫ－７検出状況（北から）

図版六

4区　全景（東から）

4区　ＳＫ－８検出状況（北から）

5区　全景（北から）

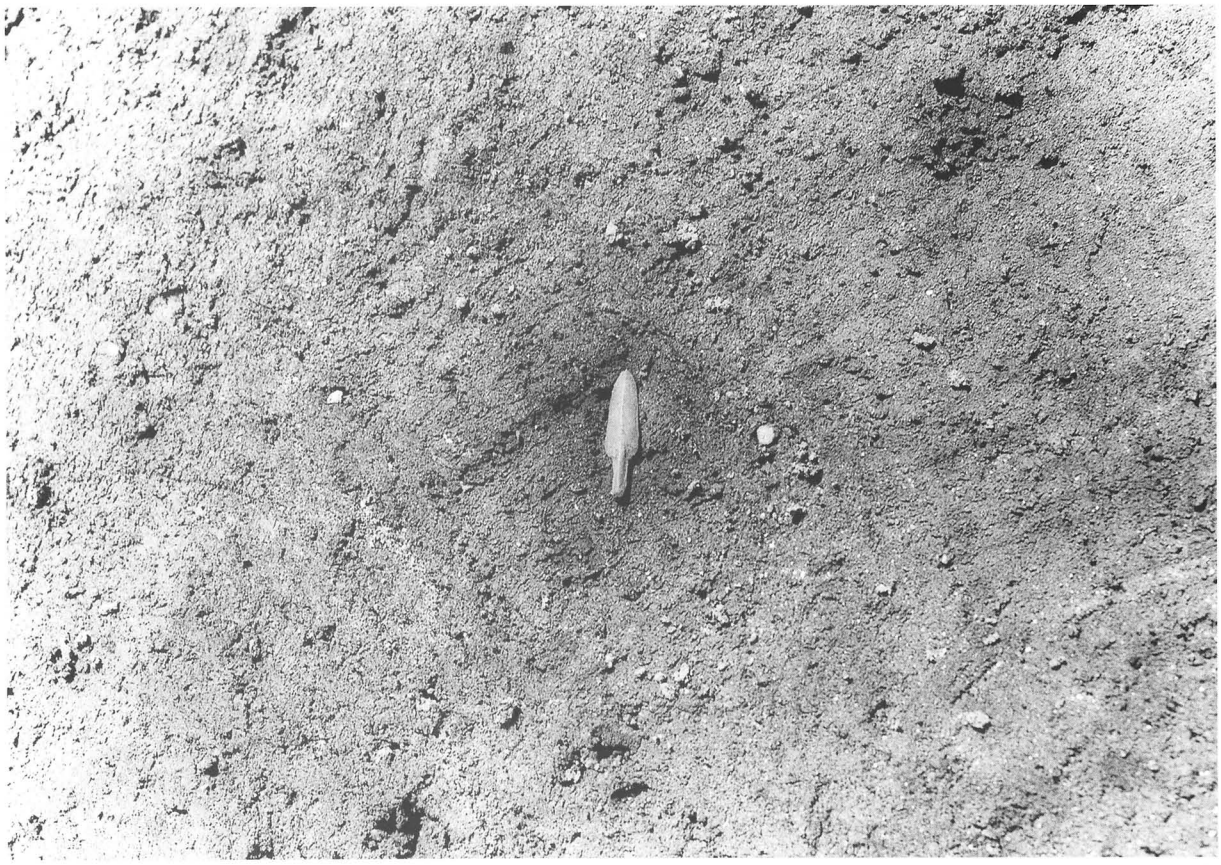
5区　ＳＫ－11・12、ＳＰ－６・７検出状況（東から）

図版八

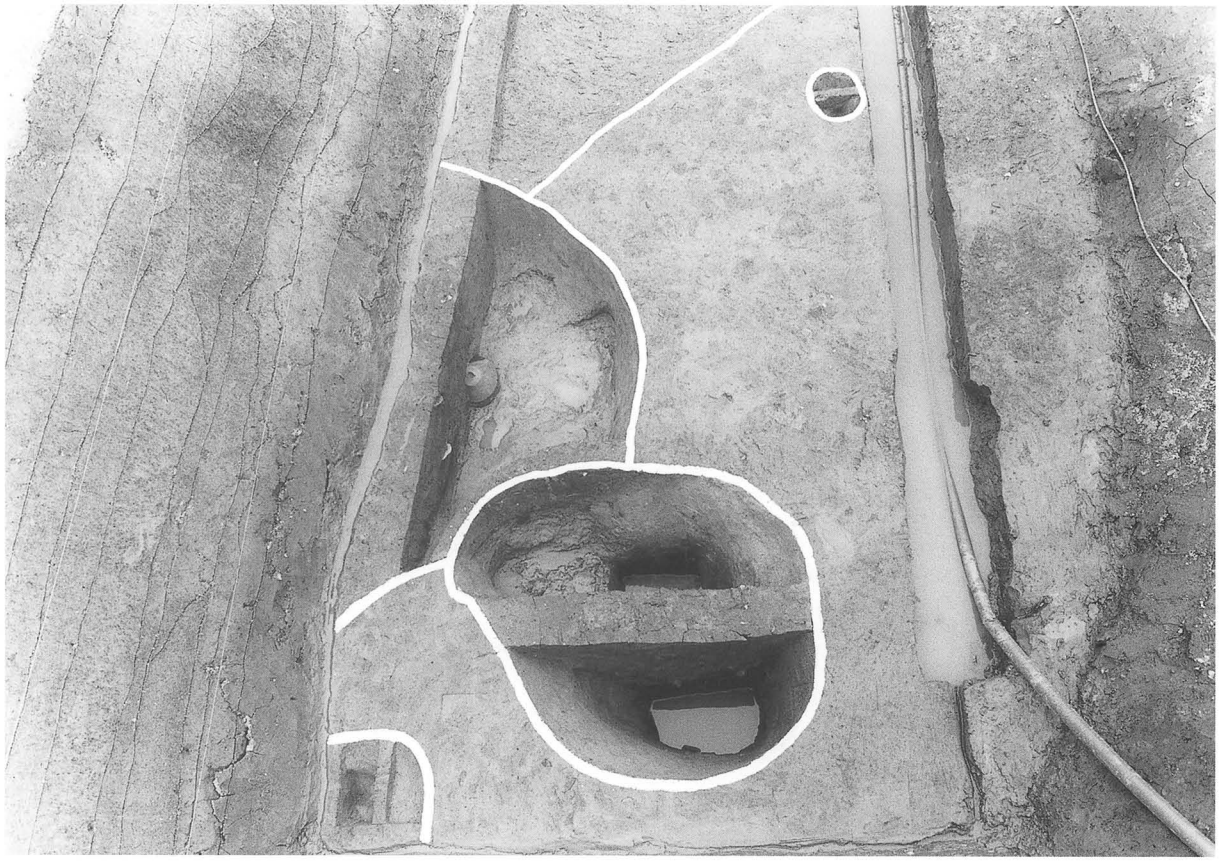
5区　ＳＫ－12検出状況（西から）

5区　ＳＫ－13検出状況（東から）

5区　ＳＤ－３検出状況（東から）



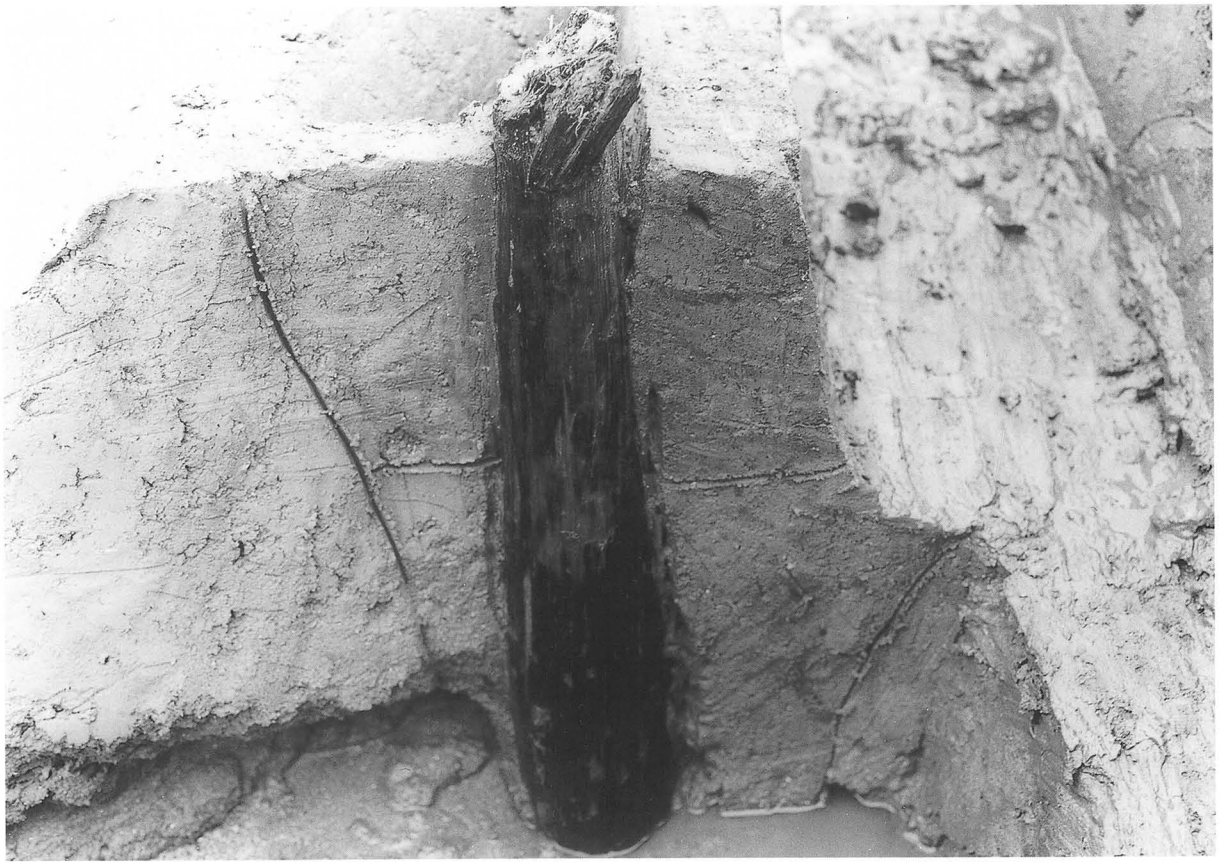
5区　ＳＤ－３銅鏃出土状況（東から）



5区　ＳＫ－13、ＳＥ－１検出状況（南から）

5区　ＳＥ－１検出状況（北から）

5区　ＳＰ－８検出状況（東から）



同上　断面（南から）

6区　全景（東から）

1区　調査風景（北から）

1

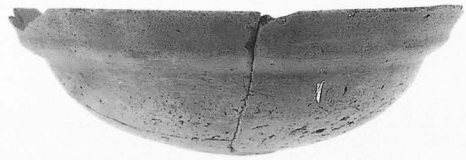
2

3

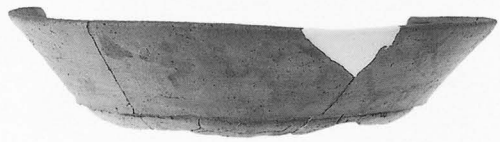
4

5

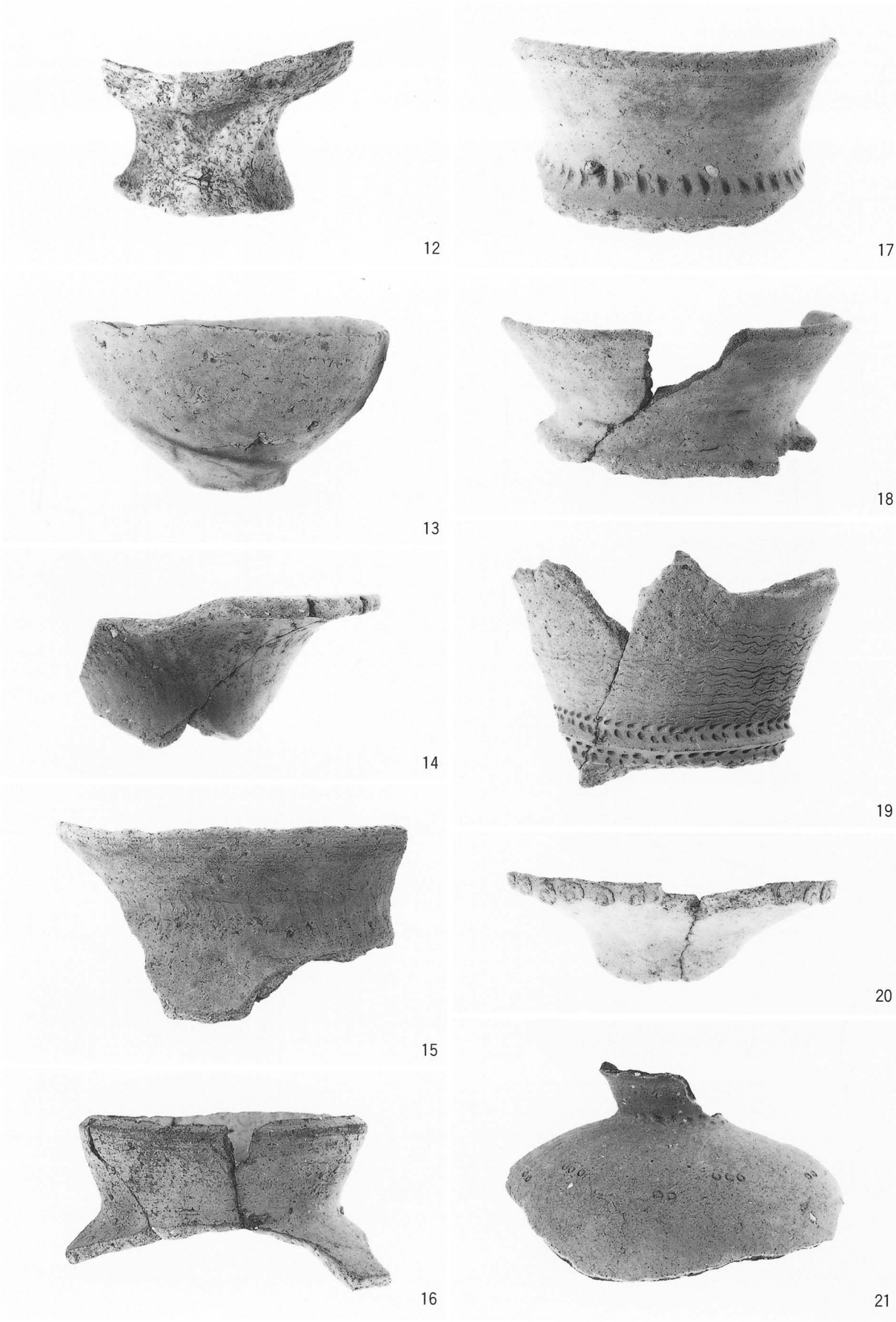
6


7

8


11

ＳＥ－１出土遺物（１～８、11）

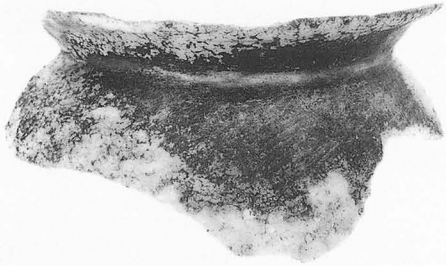


ＳＥ－１（12）、ＳＫ－１（13）、ＳＫ－２（14～21）出土遺物

22

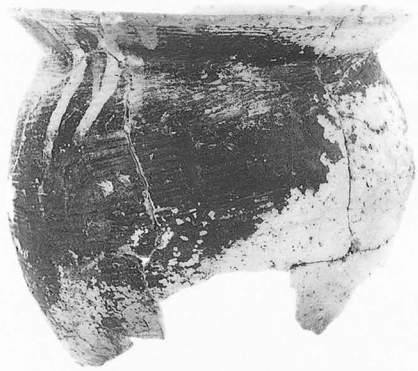
23

24


25

26

27


28

29

30

ＳＫ－２（22～30）出土遺物